

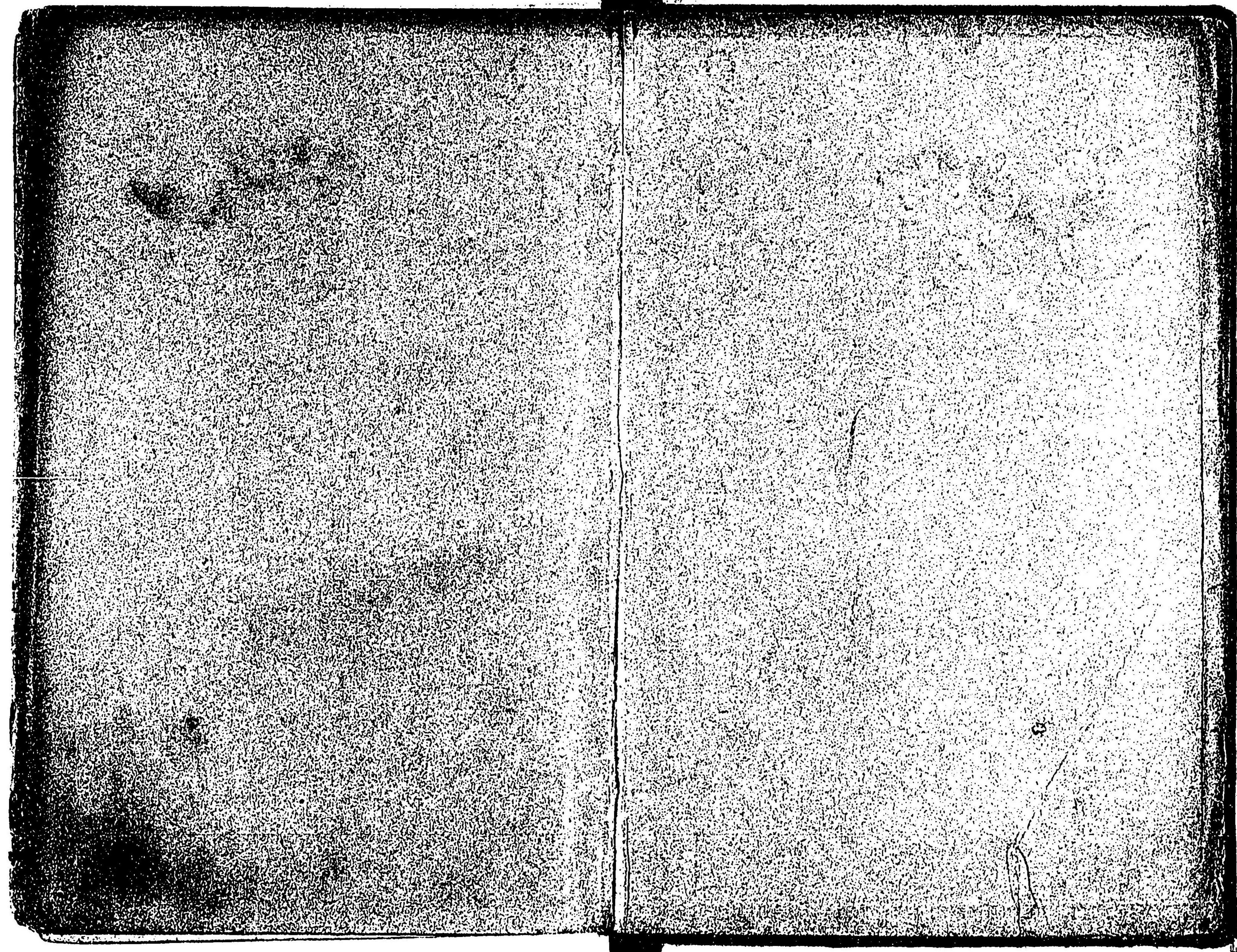
子瀆



86

275

保人 廿五



濱

子



卷首に

文學が道義習慣其他の従屬となつて、自己自身の目的を爲うて發展することの出来ないものでございまして、どんなに作家はつまらないことでありませう。けれども時世の進むにつれて、此美的發展と道義的發展とを混淆して見る人の影を没したのは、喜ばしいことでもあります。

われわれ人類の凡ての活動は何が爲めになされるかと申しまするに、これは「生活の向上」といふことだからである。文學も道徳も宗教も法律も習慣も此目的に符するものはないものはないやうに存じます。只其進路を一にしてゆかないといふ迄です。

されば文學が人生の必然的要求であつて、進歩的生活の要具たるべきが如く、道徳其他の活動が理想的生活の得られた迄等しくわれわれに須要飲くべからざるものたることは、贅を申す迄もないことでせう。文學者なるの故に道徳を蔑視し習慣を毀ち其他のものを顧みぬといふの理由は、何處にもございませぬ。

反省しなすれば、文學も道徳(其他)も其軌道こそは異なれ、或度迄の一致融和を期せねばならぬ、相倚つて提携し行かねばならぬといふことになる。或度とはわれわれ現在の進歩的生活の豫想をして可能ならしめ得るの範圍に於て云ふのです。

道徳も習慣も乃至法律も宗教も、其形式に於て内容に於て全然固滞して動かぬといふものは一つもありませぬ。否、大に各自其時代を追ふて進歩し改善しつゝあるやうに存じます。で忽ち變轉し易き道義習慣の下に文學が屈服の辱を受くるのいはれどてはございませぬが、さればとて全然此等を無視し去つて、文學の價値を認めしめやうとするのは甚だ危険なことであらうと思ひます。なせかなれば斯くては却つてわれわれ生活の向上進歩に妨礙となるばかりか、文學其物の生命を阻ふやうな結果に陥り易いからであります。現住の社會に行はるゝ道徳に不備の點があるからとて、之に代ゆるにより善きものを以てしないで、徒に其權能を拒むの法はありますまい。又不完全なる道徳でも無道徳なるわれわれの生

活には優つてをります。道徳法律を要せぬ迄に文明の進歩した理想的社會が現出せぬ限り、道徳も法律もない社會には文學其自身も竟に無價値に畢らねばなりません。

先づわれわれの社會に道徳がなかつたならば、一日も安泰なる生活を營むことは出来ませぬが、文學がなかつても現實的生活の可能條件には毫も差支は生じませぬ。人生の消極的條件は道徳で文學は其が積極的條件と云はるべきである。文學的發展はこれに先立つ道義的發展があつて始めて其意義あるに到るのである。近く申してもわれわれはお腹がひもじくつて靜に書に耽るといふたわけは出来ませぬ。

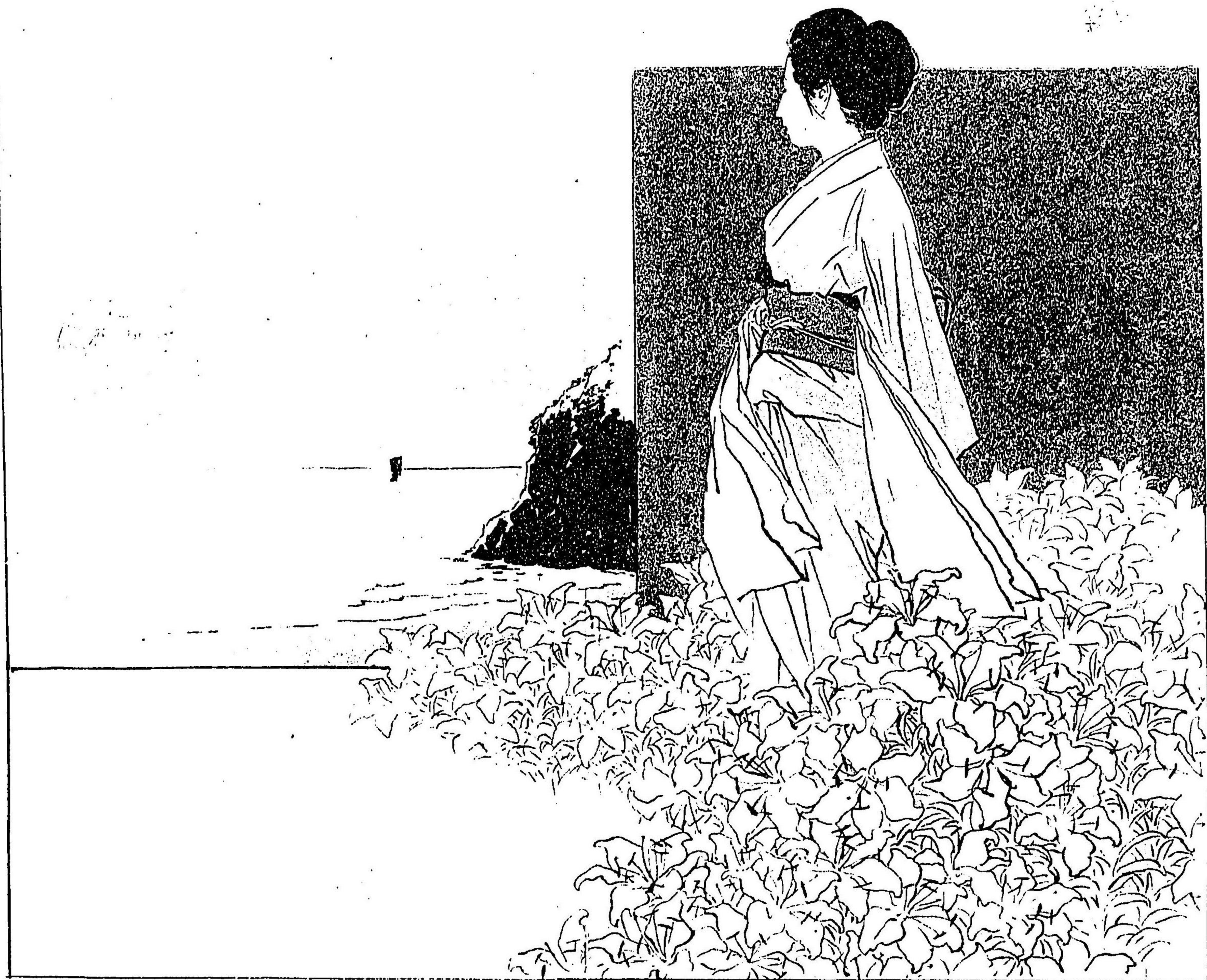
アプロマルの美的文學的發展が道義的發展を阻害する或時代の或場合があるとしたならば、われわれは悪る現象を察することには出来ぬ。道徳の進歩と相俟つことをしない斯くの如き文學は、如何に高尚なるものであるとしても、世人の欣賞を許してはならぬ。文學者も道徳の支配下にある以上は、社會の人たる義務として此命

令に服従しなければならぬのである。況んや何等の成案を有することなしに、自から現實の人でありながら現實の道徳習慣に反抗して、これを一掃し去らんと試みるが如きは、迂愚も亦極まれりと云はねばなりませぬ。文學が單獨に其價值を發揮し得るやうの理想から斯くなるので、これは決して文學に眞の生命(意義)あらしむる所以でないと思ひます。文學者の尊大主義とは往々斯る迷想を醸すのであります。

文學は人類生活の積極的活動である。道徳其他は其消極的活動であるならば、此消極がなくつて積極の可能とせらるゝ、所以はないといふのが上段の趣旨でございます。従つて文學は社會人生と相關つことの出来ないのは道徳と同一である。又文學の作家が社會を眼中に置かないで、道徳其他に服しないのしかこれに反抗せんと企つるは、社會の人としての自己を發見し得なかつた結果であります。作家と社會との關係は、私は彼の道徳家と社會、宗教家と社會、事業家と社會學者と社會と云ふか如き關係と何の異なる所もな

いと思ひます。今の社會に嫌らない、自分は社會を超絶したなど云つてゐるのはよくないことと存じます。

頗ろ文學の本領目的といふが如き問題について種々説があるやうに見受けますが、或人は單に娛樂を以て目的とせよと云ひ、或人は文學は何等かを闡明し、何等かを指示し、或は何等かを教へるものでなくてはならぬと云つてをうれます。「美は絶對也これに効果を説くべからず、獨り美的觀照あれば足る、なんかと仰有るのが娛樂主義の方で、お新しくない御説法を承はるのは仕合せの至りであります。圖を指示し教へよと仰有るのは、申さば時代かぶれとでも申しませうか、これも結構な次第でございます。が私共には此等は問題ではありませぬ。と申すのは娛樂も闡明も指示も教訓も文學的活動が文明の増進——人類生活の向上——に資する所のものでさへあれば、同等に有價值でありますから、其孰れたるも是等は作家が勝手に好む所に従つていゝのであります。音漸く流行の兆あるテンデンスのノベル、又はプロブレム、ノベルなどを

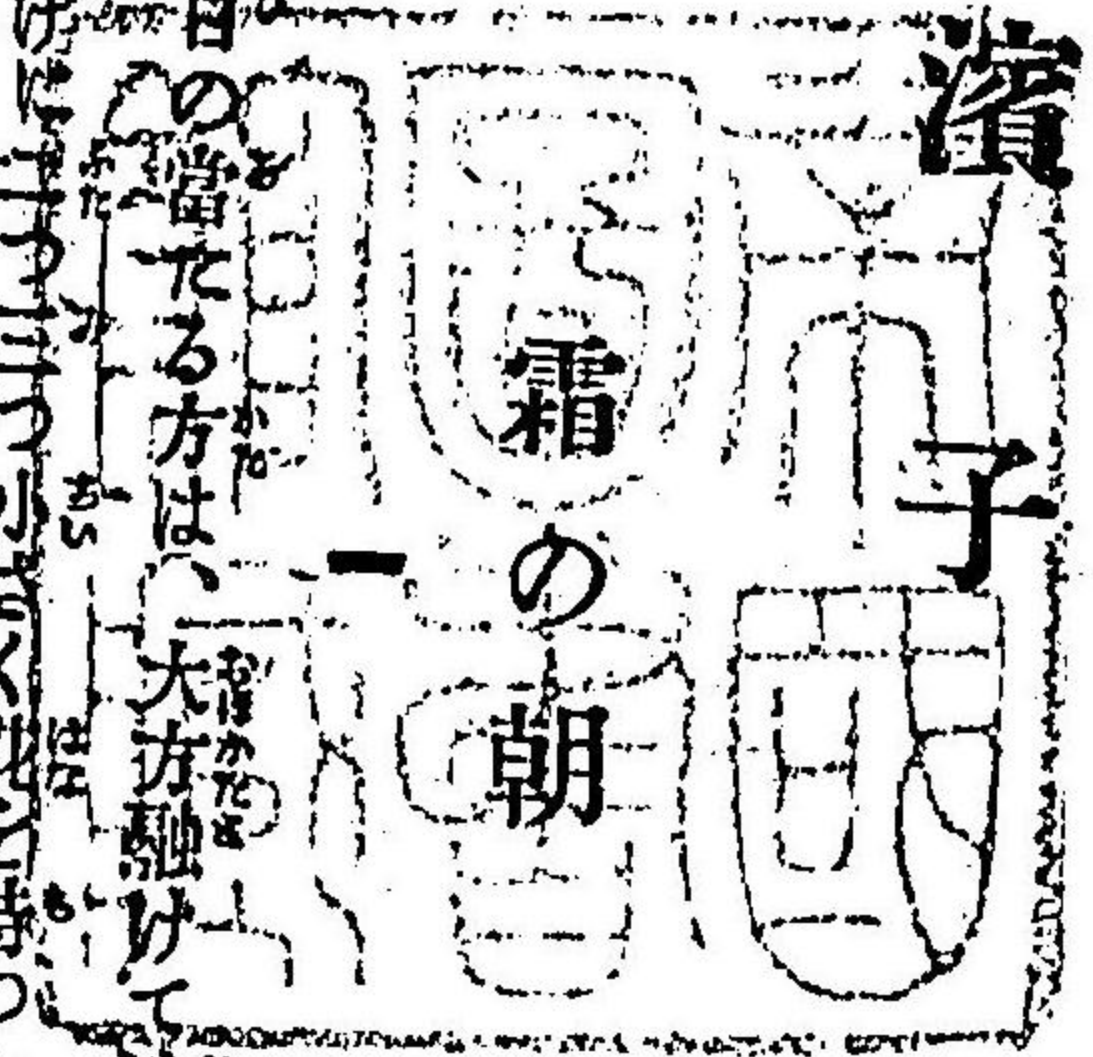


TEARS.

THANK God, bless God, all ye who suffer not
More grief than ye can weep for. That is well—
That is light grieving! lighter, none befell,
Since Adam forfeited the primal lot.
Tears! what are tears? The babe weeps in its cot,
The mother sings: at her marriage-bell,
The bride weeps: and before the oracle
Of high-famed hills, the poet hath forgot
That moisture on his cheeks. Commend the grace,
Mourners, who weep? Ah! as some have done,
Ye grope tear-blinded, in a desert place,
And touch but tombs,—look up! Those tears will run
Soon, in long rivers, down the lifted face,
And leave the vision clear for star and sun.

—MRS. E. B. BROWNING

北 星 住 人



日の増える方は、大分細く消えたが、垣根の隈、奥庭へ中溜りの柴戸、山茶花の裏淋し
 げに三つ三つ小く花を持つたあたりには、花を植えたかのやうに、瑠々として一夜の寒
 の殊に厳しかつた爲め、恐ろしい迄の霜柱である。北に向つた洋風の應接室には、目覺し
 い花絨氈が敷かれてあつて、テーブルが一脚中央に据ゑられ、周圍に四五脚の革張の椅子
 が行儀よく並べられてある。新派の青年洋畫家A氏が作品中、最も清新の氣に充ちて、遺
 憾なく此作家の獨得の長技と、其特色とを發揮したものととして、去秋あたりの展覽會で評
 判があつた大幅の風景畫が、何うして運ばれたのであるか、此應接室の壁に掛けられて、
 室には稍不釣合な大きなおの畫ではあるが、兎に角來客をして退屈を忍ばする唯一の品とな
 つて居る。此油絵に隣つて贅澤なる書棚が低く置かれて、新刊の書籍が満載されて少し取

置かれてある上には、石膏の半身像が置時計と肩を並べて、二室の趣味を饒かならしめてゐる。政治家として上院の一方に雄飛してをられる當小町田子爵の私人としての奥床しだが、これにも見えるやうであるとは、去る訪問子が人に語つた所なのである。

今此テーブルの一端に片臂突いて、何か物を案じてゐるやう、堅くなつて控へてゐる二十七八の、顔立のつべりとして、伶俐さうな洋服扮装の男がある。

窓掛が左右にたくし上げられてゐるので、遙か彼方の飛石やら、早くも霜除をせられた植込やらを眺めてゐるが、廊下を登音が此方へすると、不圖と見返つて耳を敬てながら、身を繕つた。が、ふいと其登音が何方へか紛れて仕舞つたので、失望して眉を擧め、如何にも不懺らしく我と我身を顧みて、悴と太息吐いたのである。果ては又洗んだ色をして、凝然と灰皿の金細工を噴めたり、天井を仰いだり、足許に視線を落しなぞして、詰まらなく彼は小半時も過ぎたらうと思はれる頃、小刻みの女の静かな歩調が聞こえたかと思ふと、急に扉が外方から開かれたので、聊か喫驚して振り返ると、更に驚いてと顔が紅くし、慌て、椅子を飛上つた。

「おや、小菅さんなの、妾は他の方かと思ひましたよ。や本當に失禮な、何といふ取次だ

らう。大層お待たせ申しましてねえ。」と鳥渡手輕に挨拶しながら、入つて来たのは、誰あろう、子爵夫人高子であつた。

小菅は叮嚀に禮を返しながら、

「いえ、も決して左様なことは御座いしません。」と云ひく揉上を飽迄刺上げて、房々とした、額髪を奇麗に分けた其面を上げて、上目遣ひの懐つこく夫人を見遣りながら、

「今日お伺候申上げるのには御座いしませんでしたけれど、少し心配なことも出来ましたし、しましたものですから、早朝からこんなにお邪魔を致すことになりました。」と落着いた物言ひ、夫人は嬉しうにして、

「あの、らう。本當にあなたには、も御迷惑ばかりお掛け申しましてねえ。」と其處に立つた儘手を揉みながら、四下を不圖胸して眉根を寄せつゝ、寒さうに肩を寄せた。

「小菅さん、何だかお寒いやうぢや御座いませんか。火も持つては参りませんでしたね、あなたお寒かつたでせう、本當にぼんやりな女共ばかり揃つてをりますものですから。」

「いや、私には何うを決してお構ひ下さいません様に。」と云つたが、夫人は其には氣も止まらなかつてお寒いぢや御座いしませんですか。あなた何時でも他人行儀にはかし遊ばして不可ま

せんこと。些少もかまひは致しませんですから、つまりあなたの御損を御座いますよ。」と笑ひながら「あの彼方でお話は承ることに致しませう。宜敷いませう、今日ゆつくりなすつていらしつても。本當にお寒いやうですわ、ぞく／＼してまゐりますよ。こんなでも御座いませんですが、此室が餘り陰氣に出来てをりますものだから。」と先に立つて導くので、小菅は黙つて後からついて此室を出た。

「羨も丁度暇ですし、小菅さん、御差支が御座いませねば、あなた遊んで行つて下さいましな。種々おね、折入つてお話しなければならぬことも御座いますし、本當に羨も此頃は氣が氣でないことばかりなのです。小菅さん、あなた、どう？」

「は、かしてまゐりました。」と小菅は言葉少なに、恐る／＼と云つたやうな、稍首を俛垂れて、肩を落して随つたのである。

小菅静馬と云つて、父の愛重と此小助田子爵とが多少政見を共にして、實業社會に於ても常に共同の働きをしてゐるので、其由縁で以て、未だ學生でゐた時分から、此家に入入してゐる者で、萬事生真面目で、細心な所がいたく子爵の氣に適つて、珍重されてゐるのみならず、何處やらに内氣な、物を差合ひ初々しくと、色白く、髪黒く、鼻目清秀の其麗貌、

物腰のしとやかなのが、これ又子爵夫人の喜ぶ所となつて可愛がられてゐる。年は二十八、さう何時迄も、無邪氣な小供見たいな考へを持つてゐるのもあるまいが、温順し所が何處に押出して、人の同情を惹いて、悪感を感じてゐるやうのところがなかつた。

子爵夫人高子は小菅の美德を愛するの餘り、今では自分が大事の脇腹の如くに思つて、何事も打明けて話すと同時に、多くの難かしき用事其他を小菅の手に振つて辨ずることも少くなかつた。小菅も又夫人に申しつかつた事があれば、恰も自分の働き振と、才分とを發揮するの機會を見出したを喜ぶかの如く、一生懸命になつて其事に當たるので、固より自分が性來の敏慧なる才智は、能く夫人の意を充たすに足るものあるを信じてゐた。

小菅が今日の訪問も、亦無意味なる御機嫌伺ひの類ひではなかつたのである。實は夫人が此頃第一の痛心事の爲めに、延いては子爵家の大事の爲めに何等かの働きを内々で托せられて、其復命を齎したのであつた。夫人が殊に喜んで迎へたのも其爲めである。交際社會にも多少の周圍を有して、其愛嬌の多いのと、人前のうまいのとで名高い夫人が、未だ何人に向つても不愉快な顔をしたり、ぞんざいな言葉遣ひで迷惑を掛けたり、無意味な話をして飽きを來たさしたことのないのを知つてゐるものは、驚くにも當たらぬやうなもので

はあるが、尙頗る昵近なる此小菅静馬に對しては、平生の用意と態度とを忘れないうで、叮嚀に親切に應對したといふものは、甚だ夫人の面目を想見せしむるのである。

二

夫人高子は最早四十の齡を越えてゐられるのであるが、打見は三十四五か、萬一六とは思はれぬ迄の若やかさである。細造りの眉を立て、黒眼勝の流るゝやうな眸、小締りとした鼻の、口許の締まつた、生際の浮立つて奇麗な細面で、額に小皺の寄つたやうでもあるが、派手好み身の廻り萬端、何も彼も五つ六つ年弱のつくりであるから、これが二十歳を過ぎてから、小町田子爵が後添ひの夫人となつて、濱子といふ先夫人の一女を育て上げ、實子なる今茲十九になれる豊子と、其妹と、高光といふ嫡子を擧げて、都合四人の母親であらうとは思はれないのである。況して子爵は政治に實業に、日ねもす飛行くといふのであれば、假令家令家扶以下召使の輩は何人ゐたからとて、一家の主婦としての夫人の世話は、決して容易なるものではなかつた。其に此若やかさである、交際社會の一勢力となつてゐられる。逆も血々の夫人ではない。

で、小菅が訪問に伴ふ夫人の痛心事といふのは外でもないが、自からには戀しき中の濱子

に關した事柄なのである。濱子は去年長縁があつて、男爵日向家の嫡輝雄といふのに結婚をしたのであるが、不運なことには何分夫婦中が睦まじく行かないで、竟に此秋の初めつたかたよりは、ぶら／＼病ひの爲めに、實家へ歸つて、もう再び日向家へは歸らぬと云つてゐるとかで、一家これが爲めには大心配を重ねてゐると云ふのである。濱子は今は湘南の別荘に保養勞々出向いてゐるので、其後で兎も角此始末をつけることになつて、夫人は氣を痛めてゐる。細々しい家事には無頓着な子爵自身も、此事ばかりは安閑としてゐられないので、相當に世話もし相談もしてゐるのであつた。

濱子を日向家へ入れるについて媒人となつたのは、小菅静馬が父の愛重であつたので、静馬は豫て日向輝雄と友誼もあるしする所から、高子夫人の内意があつて、輝雄自身の意向を糺して、今日は其復命を齎したのであつた。

六疊の奥の小座敷に、桐桐の火鉢の中に差向ひて、純子の蒲團に座して、密々と話してゐるのは、件の夫人と小菅静馬とである。

夫人の顔には何處となく暗愁が伴つてゐるやうに思はれて、其話聲の絶間々々に細く溜息が漏れてゐた。

「ぢや、小菅さん、やじはしなの。」と云う。

「若し其が事實をめぐつて、世間にはッと取り沙汰をせられるやうにでもなりましたら、何うしたら好うございませうねえ。」と切なげうにして、

「全くね、なんぼお親しくして戴いてをりますからつて、こんなこと、あなたにだつて御相談申上げられるやうな譯ぢや御座いませぬわ。一門の又ない耻辱ですもの。妾はもう何うすればよろしいやら、濱子の父へは勿論のこと、家扶にだつて申されるやうなことで御座いませぬもの。困つたことを御座いますのねえ。」

「だけれども、夫人、其は未だ確乎と其と極まりました次第でも御座いませぬですし、日向君も私には親しい友達では御座いますか、豈夫それだとも斷言は致しませぬので御座いますから、さう御心配遊ばす程のことを御座いませぬかと存せられます。尤も日向といふ人は、慥う申しては甚だ何で御座いますか、疔癬の強い方で、私共のことにも直ぐ邪推をされるといふ傾きがあるのですから、或は此度の濱子様のこと、日向君の思違ひとも存せられますが、其に致しませぬば、私にはつきり其と仰有らぬのが、第一さう仰有るだけの、ま、證據見たいなものがない所爲ではないかと疑へば疑はれますか

濱子——霜の朝

八

ら。」と小菅は却つて恐めるかの口調である。

「本當にねえ、さうですとこんな心配はしなくつて済むので御座いますけれど。」と夫人は淋しく微笑んで、「そしてあの銀林は只今何う致してをりますせうね。」

「其から後の消息は餘り聞きませんが御座いましたか、たしか湯島邊の下宿屋とか、下谷邊の寺院にかかぬやうで御座います。あの其後御伺ひも申さないので御座いませうか。」

「い、え、もう、一向まわりませんです。あんなに本當に人の恩義を知らない者と云つては御座いませぬですわね。小菅さん、あなただつて御存知の通り、一寸は才も利きますもので御座いますから、親も兄弟も御座いませぬのだと申しますし、妾は一かどの者にせうと思ひまして、濱子がさう申しますものだから、不知釣込まれて日向様へ置いてあります頃、其はもう一生懸命可愛がつてやつたので御座いますけれど。」と口籠つて、「人といふものは、決して當てになぞするものでは御座いませぬですわね。自分の子でもなす者を、何らの怨うのつて、氣骨を折ります位、馬鹿なことは御座いませぬですわ。」
「其は全くさうに違ひは御座いませぬ。銀林も格別人の好くない男だとも思ひませぬですわ。」とこれば只合繩を打つたのら。」と云う。

濱子——霜の朝

九

夫人は何か物思ひに洗んだやうであつたが、膝を進めて、

「あの、小菅さん、其で輝雄さんは濱のことはやつぱし御離縁をなさらうと思つておらうしやるのでせうか。あなた、何とも仰有いませんでしたか。」と熱心な顔をして、

「何だ彼だと申しましたも、其はもう輝雄さんのお心次第なので御座いますから、其を確めて置きませんでは。其さへ分りますれば、其外のことを御座いますと、又何うとも處置は出来るので御座いますから。」

小菅は頷いて、「唇を小さくしながら、

「で、私も大層氣を痛めました、何うぞして當人の考へを搜つて見やうと、其ばかり二三度先方へおまわりしました、日向君を何處ぞへ連出して見ましたのですけれども、ま、何ぞ御座います、はきとしたことは申しませんですね。」と小首を傾けた。

「一體が話に要領を得ませんやうなことはかり申しましてね、銀林のこと、申ししても何だかあるやうなやうな、全然奥歯に物の扱まつたやうな云ひ振で、私も困却致しましたので御座います。そして濱子様のこと、申しますると、僕の方で何うといふことはない、先づ濱子自身の胸に隠したお早いだらうと、其以上には一言も仰有らないで、他の話をせ

られると云つたやうな體格で、何處を掴まへてよろしいのか、全くどうも手法がつかぬので御座います。」

夫人の眼は異様に輝いてゐたが、覺えず此時噂と溜息をついて、當惑の色が見る／＼其面を上ると、咳くもつて「全く困らせませうよ。」と云つたが、向直つて、

「それはもう、歴平とした落度か濱子の方に御座いますものなら、妾が何と申しまして、仕方は御座いませぬのですけれども、何もね、輝雄さんがあなたに迄をんなつかまへ所のなやうな御挨拶をなされるにも當たらぬでは御座いませぬか。妾ははう思ひますよ、輝雄さんだつて男子を御座いますもの、悪態を申すのでは御座いませぬが、何時迄もこんな曖昧になすつておらうしやつて、妾共をお困らせなからぬでも、斯く／＼した不埒がありませんから、何うぞうと御遠慮なしに仰有つて下さりますると、却つて事が捌けて宜敷う御座いますので。小菅さん、本當に妾共の心配と申しましては、一通りや二通りは御座いませぬですよ。」と怒み混りた、稍愚痴のやうなことを云ふ。小菅も氣の毒のうた、

「お察し申しますよ。」と云つたが、其上をささかす。

「濱子も不禮儀だからして、歸つておまわりされてから、さう彼是百日はかしたなるので御座

「まずよ。醫師を呼んで見て戴いても、これは氣の病ひだから、薬よりも保養が第一だと申しますし、其で只今も如那して稻村ヶ崎の方へやつてありますのですが。妾はまた濱子の父が大層氣を揉みますのですが、自分がなした子といふのでは御座いませんのだし、もう〜其事にはかしかまけてゐて、仕様がありませんの。」

夫人は口を噤んだが、やゝあつて、

「ね、あなた、こんなこと迄おきか申して、幽あなたお厭で御座いませうねえ。妾といふものはまあ仕方が御座いませんです。でも、こんなに氣がくさ〜致してまゐりますことは御座いませぬわ。ほ〜。」

わざとらしく夫人は笑つたが、直ぐ眞面目に返つた。そして改めて、

「それで、あの輝雄さんの御兩親は、濱子のことを何と思つて御座いませう。」

小菅は窮屈さうに控へた洋服姿の、ズボンの隠しから一方の手を出して、火鉢に翳しながら、

「はい、其はあの何で御座います。——、今朝お伺ひ申しましたのも、實は其事を申上げやうと存じたので御座います。あのついで……。」とやつと夫人の顔色を見てゐたが、

「先程少し御心配なことに申しましたのも、此處のことなので御座います。何でも日向君

から御兩親へは御相談なされたのであらうと存じます。——。」

「はあ、其であの何うなのでせう。」と夫人は少し急込んで来る。

「只今申上げます。何うも日向君からでもなければ、誰とも推量はつかないことなのです。兎に角御兩親が銀林のお話をなされるので御座いますね、私も少し變だと存じまして、何も存じませぬ形で、仰有る儘の事を承りましたので御座います。何うも濱子様については、餘程のお疑感を懐いてゐられるやうなので御座います。」

「まあ、何といふ輕々しい。ぢや全く輝雄さんが仰有つたので御座いませう。」と夫人は呆れたやうに云つて退けた。

「私もさうぢやあなつかと存じます。さうで御座いませねば、何も銀林のことを何うしてかれこれと仰有る筈が御座いませぬですもの。日向君が仰有つたとしますれば、大凡日向君自身の御意向も推察せられるので御座います。未だ立派にこれぞと申しますだけの事實も御座いませぬ。仰有つたとすれば、日向君の不徳とより信ずることは出来ませぬ。私は御兩親が早呑込にさう極めてお仕舞にでもなませうならば、これは實に心配なことでたらうと恐ろしくなりましたので御座います。後になつて、日向君が事柄に思違をし

てゐられることが分明致しまして、其時はもう迎も駄目だらうとさう思ひまして、實は心を痛めてまゐりましたのですが。」

夫人は黙つて、語る小菅を聴いてゐたのであるが、小菅が云ひ畢るのを待兼ねたかのやうに、

「輝雄さんがさう事を輕々しくなすつて下さりましては、小菅さん、本當にさう困つて仕舞ひますのねえ。御両親に仰有らうといふ前に、當然ならばね、せめてあなたの阿父様にも、それがかりやならば、あなたにさよさよさいますわ、一應の所は何とか御挨拶下さりまして、濱子に屹度した落度が御座いますか何うか、其をお調べ下さいますのが御願當だらうと思ひますわ。こんな不名譽なことは濱子が一生の疵にもなりませんし、妾共の家名にも、拭ふことの出来な汚點を塗るので御座いますから、少しは前後を考へて下さつても、御無理では御座いませぬやうですが。」と云つて少し俯向いたが、言葉を繼いで、
「其はもう不東な娘なものですから、御不足に思召して、御座いますならば、何とも別に申様はございませぬすけども、何も妾共で押附けがまし、是非に日向様へ上げて置かねばならぬと申しますことは御座いませぬのですから、御申分があまり遊ばしてなら、明か

に其と仰有つて戴きたう御座います、有耶無耶に御離縁だと仰有つては、氣が拙くつて厭になつて仕舞ふでは御座いませぬかね。さうぢや御座いますまいか、ね、小菅さん。」

「私もさう思ひまして、日向君にも、段々お話も致して見ましたやうなものをすけれど、何うしても要領を得ませぬやうなことはかりで。」と小菅も共に沈んで物を云つたのである。夫人は日向輝雄の仕打が飽き足らず懇えて、腹では怒つてもゐるであらう、若しや濱子に落度と云はれるだけのことがありはしまいかと思はないでもなかつたが、其を恐るゝよりも、輝雄ともある者が、これでは餘り人を輕蔑にした、輕しい仕方ではあるまいかと、其を不平に思ふのである。其と口には出さぬが、輝雄の両親が我子可愛しと思ふ心からとは考へられるが、銀林の話誰やらにするのが餘り無思慮に過ぎて、人の名譽を踏躪るかのやうに思はれて、不快に堪へないのであつた。繰返して、

「これが少しでも間違つて、世間に噂に上るやうな仕儀にでもなれば、あなた一人を殺すのぢや御座いませぬですか。ね、小菅さん、妾は本當にさう切なう御座いますわ。」と同情を求むるやうに語つたのである。小菅も、
「御道理で御座います。濱子様にしては本當に私はお氣の毒でなりません。」

「心から氣を揉み下されるのは、あなたばかりなので御座いますよ。」と夫人は術なうにして、
「濱子はかしの不名譽では御座いません、一家一門の不名譽で御座いますもの。」と沈切つて
手を額に當てたが、少し頭痛をもして来たのか、指の先で額を叩いてゐる。

二人は無言で對してゐた。日は長けて庭の松の木の下に、鶯の聲がする。椽先に吊された
鳥籠がパツと障子に影を落して、もう十時にもならう。火鉢の火は疾くに消えて、白い灰が
雪をくづしたかのやうに、ゆらくとした。

夫人は氣分を損ねて黙りこんでゐたのであるが、我に返ると氣を取直したやう。愛想よく

「小菅さん、種々あなたに迄御心配をおさせ申して済みませんのねえ。此事は又後でゆつくり
思案致して見ますことに致します。何うぞね、また此上ともお心添をなすつて下さる
ましよ。こんな思まはしいことと申したら御座いませぬのですし、成るべくならば、誰に
も知らぬないで片をつけたいと存じてをりますから、何うぞお厭でも妾にお力をお添へ遊
ばして下さいまし。」と笑ひながら、火鉢の上に重ねた小菅の手を取つて、驟然と其顔を見
たので、小菅は取着を失つて、頬を赧くしながら、目禮をしてこれも笑つた。

「あの松波様と仰有る方が見えて、御座います。」と下手の襷子ですつと聞きて、叮嚀にかし

こまつて指を壁に突いて、裏若い小間遣ひらしのが申上げる。と振向いて名刺を取上げ
ながら、

「ま、能く来たことね。松波かえ、彼方へお通し申すのですよ。」
小菅を顧みて、

「あなた御存知や御座いませぬですか不知。松波謙次郎。本當に能く出世して呉れまし
たよ。ぢや妾は鳥渡逢つてまゐりますから、遊んで行つて下さい。豊子を只今寄越します
から。其からあなた高光がね、大層お懐かしがつてお待ち申してをりますから、今に學校
から歸りますでせう、是非逢つて遣つて下さいましよ。其から松波も久々振にまゐりまし
たから、御一緒にお午飯でもござへさせますから。」

松波謙次郎といふのは、新醫學博士で、松波病院長として、内科婦人科の専門家として現
今の圭刀社會で五指に數へられる一人である。松波は少年の頃からして、小町田家には一
方ならぬ恩義に預つてゐる者で、故あつて暫時出入を遠慮せねばならぬ事になつてゐたが
今では子爵夫妻、其他一家の者に相當の尊敬を拂はれてゐるのである。

磯のほとり

三

参差として朝霧に裏まれて、夢のやうに連つた松林の、片はづれの殊に眺望の可い處に、
数奇を凝らして閑雅にしつらへた二棟、萱葺の別荘、稻村ヶ崎と云へば少し不便ではある
が、蓮子、鎌倉、鶴沼と引較べて、氣を養ふのに此處も亦捨難い好位置である。
海濱とあるだけに、温度も確かに東京とは二三度の相違がある。野分立ちて庭に萩薄の折
れ伏した、稍肌寒き夕より、濱子は東京の邸を去つて、今年の秋を淋しく此別荘に暮してゐ
るので、濱子に随つて同じ此秋の寂みを嘗てゐるのは、小町田家の家扶の辰巳、濱子を襁褓
の中より育て上げたといふ老女とせ、女中の兼と云ふ年増と、花といふ小娘とである。濱子
は胸に云ひ知らぬ惱まししの思をついで、此裏淋しき別荘に身を泣いてゐるのであるから、
病氣保養の爲めとあつて、我儘勝手の振舞も出来ないもので、ゆめく身勝手をして、折角自
分の病氣を氣遣つてくれる乳母を始め、皆々を困らうとは露思つても見ないのであるが、
時として悲しみの小さな其胸に溢れ、地へくし溜涙の堰を切つて一時に頬を流れやうとす

濱子——磯のほとり

濱子——磯のほとり

る朝に夕に、あせめては自分一人が此處にあつて、心の儘に泣いて泣いて泣いたらばと、
よしなきことを念じることあつた。けれども左右に人集りでもしたかのやうに覺えて、
懊惱い迄に彼はと注意をしてくれる人々を見ては、只もう何故とはなしに情ない思ひのせ
らるゝので、待かるゝ身の辛さを忘るゝに、唯一の方法となるものは、一人野に出て名もな
き小草の花を摘みそれ、松の小蔭に立つて無心に躍り狂ふ波濤を望むられ、或は又胸に手
を組みつゝ、こぼれ松葉、うら枯れし小徑の草を踏みて、心行く迄漫ろ歩きする樂みと云
ふのであつた。

誠に海洋の眺観は、悲みある人、惱みある時、多くの望みを持たぬ場合に、又なく心の慰
藉を得ざるものである。四六時中間断なく満ち干す潮の、自馬の如く躍り、野牛の如く叫
りつゝ、岩に碎け陸に翻うてゐる其状は、何となく苦痛ある胸の奥の奥の緒琴に觸れて、
何等かの福音を辨らすやうに感じられる。海の勇壯なる活動を見るに、濱子が今の住居は
甚だ都合好く出来てゐた、また實際濱子には磯の匂ひするあたり、雪の如く碎けて、亂れ
散る飛沫の我袖を濡らす處へ突立つて、人が見たらば氣狂ほしくも思ふだらう、我と我身
を堅く抱締めて、千態萬狀、分秒毎に變化し行く波の姿を、我を忘れて見入ることは、之

途に決して少なくなかつたのである。

海は濱子が惱みを少時にても忘れしむるに、此上もなきものであつた。けれども切りに夢覚むる霜の冷たき夜半、彼の松風の枕に通うて、轉た涙のこぼるゝ時、遙かに近くてれに和して陰響たる海潮の響は、更に濱子が腸を絞るばかりの惻怛の情を動かさぬであらうか。悉る夜は濱子は樹じくて涙を流し、神経を鎮むることが出来ないので、黎明に徹することが例となつてゐた。

昨夜もまた睡られぬ夜の二つであつた。濱子は聲中であつて、悶々の情抑へがたなく、意に一夜を微睡ともしないで明かしたので、今朝は未だ夜の氣の全くは明け離れない、仄白く空の見らるゝ頃、一家中起出でた者もないのに、小松原に面した我室の雨戸を、一枚身を抜ける程小練つて、窈と踏石に穿き捨てた庭下駄を、素足に突掛けて下立ちつゝ、其儘冷たい土を踏んだ。固より道を行く人もない。朝風のわけて身に沁むばかりなのに、濱子は寝巻姿の、上に書生羽織を着流して、しどけなく博多の帯を巻つけたので、束髪の寝亂れ髪、鬘の毛の頬に散るのを小指を擧げて搔上げながら、何處としてもなく彷彿ふのであつた。血の氣なき顔の色の蒼白う、見れば氣遣はれもするのである。

濱子——磯のほほり

二〇

濱子——磯のほほり

二一

ほのくくと白み渡る空の色の、次第に遠近の景色の輪廓正しく浮び出で、近くは逗子薬山より、長者が崎に限られて、遙か彼方は秋霧と海の色とに没せられて、三浦半島の形勝は目に入らぬが、直ぐ目の下、片瀬の里、淡墨の色に似た江之島の、葦中に並ぶもしらう。削りなしたる脚下の絶壁に、潮は其出来る限りの侵蝕を逞しうしてゐるのであつた。濱子は何處を何う辿つたのであらうか。

四

「ま、濱子様、何處へあらで遊ばしたので御座います。」と乳母のおとせはもう涙合んでゐる。「目が覺めて起出て、見ると雨戸が細目に開いた儘、濱子の姿が見えぬので、おとせの今朝の驚きと云つたらなかつた。俄に騒ぎ立て、辰巳を始め、別荘番の老爺迄手を分けて行方を捜したので、此松原の彼方なる岩陰の、菖紅葉したあたりへちらと其影を見出して、駈寄つた時、嬉しやら悲ししやら、頓では言葉も出ないのであつたが、僅かに憶つてゐる。細りつゝしたのであつた。

「何處へあらで遊ばしたので御座います。」と、私はどんなに懐疑いたしましたことせう。「と練返して」「濱子様、とせが心も酌み遊ばして、これからはお一人でお歩き遊ばすこと

だけは止め下さうまし。ま、御無事を辛而安心は致しましたもの、御覽遊ばせ、未だこ
んなに胸が。」と乳房を抑へて、氣息を切らして送頓した様子、濱子が何とも答がなりので、
「今朝はあなた何う遊ばしたの、御座います。」

「何うもしやしませんよ、朝の景色を眺めたら氣が清々するだらうと思つてね。」と濱子は片
頬笑みながら

「妾は夜一夜睡られなかつたものだから、夜の明けるのを待兼ねて、そつと抜けて來たの
ですわ。」

「それならよございませうけれど。」とあとせは漸く我に返つて、

「でも、あなた誰にも仰有つて、御座いますせんかつたものですから、皆々が喫驚致して仕舞
ひましたの、御座います。」とつくくくと濱子の顔を見上げてゐる。

「あの御氣分はいかがで御座います。」

「いえ、大層いゝ氣分だわ。」

「左様で御座いまするか、濱子様、其れもお顔の色が大層お勝れ遊ばさうに御座いま
すよ。」と心配らしい。

「さうですかね、睡らなかつたものだから、その所爲だらうと思はれるの。乳母や妾は今朝
心からさう思ったことがありますよ。」と濱子は岩に寄添つて體を持たせ掛けながら、うつ
くしく其眼を恍惚として、干潮のさらさらとした漣を追ふが如くに見入つて、

「本當につまらなうわね。」と力をこめて云つた。

「え、あの何がさうなので御座います。」とあとせは様子が変わるので、進出て窺込みながら、
「あなた、又いゝんなことをお家じ遊ばすのちや御座いません。」

「だけども乳母や、本當に人の一生程、つまらないものはないのねえ。」とさう云つて、
「乳母や、義理だの人情だの、何の彼のと云つて、厭な思ひばかりせねばならぬやうな世
間なもの、こんなつまらないことはないぢやないか。妾、だから誰も住まない離れ島に行
つて仕舞つて、たつた一人をゐたらば、どんな可い氣持だらうと思つて、此海を眺めてゐ
ましたら、直ぐにも行つて仕舞ひたくなつて來たの。」

と物淋しげに笑つたが、氣が沈んだやう、ほろりとして、

「人は悉皆こんな思ひばかりするのぢやありませんけれど、乳母や、何うしてこんな氣
が弱くなりましたのか、妾つくくくと思つたら悲しくつて泣きたくなつて來て。」

「濱子様、それはあなたお宜敷く御座いませんですよ。いえ、決して濱子様ばかりがそんなにお辛いのぢやございませぬ。人と申しますものは、誰でも思ふことの出来なかつたり、儘にならぬことが御座いますれば、そんな悲しいことを考へたりしますけれど、あなた其は決して本當では御座いませんですわ。悲しいことも切ないことも、みんな時と時節で御座いますもの。そんなにお氣を腐してお仕舞では、何う致します。とせも死にたくなつてまわりますよ。あなたをあれ程お氣に掛けて下さいます阿父様を、いかに遊ばすか心を御座いませう。」

「だから、妾は其も出来ないことと思つてね、悲しくつて、乳母や。」と濱子は袖を引出して目をこすつた。

「それは全くどうでもなぐてはなりません。悲しいことがあつても、過ぎ去つて見ますれば、其が却つて楽しい思出でもなつてまわりますやうし、何事でも濱子様のやうに、餘りきなく御苦勞を遊ばしてはなりませんですよ。其よりかお氣樂に遊ばして、早く東京へお歸り遊ばすやうに、御體をお厭ひなさいますのが肝要なので御座いますわ。そして殿様の御安心のまわりますやうに、早く日向様へお歸り遊ばさねば——。」

濱子——襖のはきり

二四

濱子——襖のはきり

二五

乳母は噂々として説くのであつた。濱子は無心にそれを聴いてゐたが、

「乳母や、もう其事は後生だから云つておくれでない。妾は憶出して身願ひが出て來ますもの。やつぱし阿父様は妾が日向へ歸るのを、御希望なすつてせうねえ。」と如何にも辛うづに云ふと、

「そんなこと仰有るものでは御座いませぬ。假令殿様はさう思召してゐらつしやいませんで、濱子様あなたは、日向様のお體では御座いませぬか、あなたがさう仰有れば、殿様はどんなに御心配なさいませう。乳母やだつてもあなた——。」と覺えず云ひかけたが、濱子が蒼白き、顔の色を煩つてゐるのを見ると、はッと思つて、

「あの、もう、こんないやなお話は止ませう。其事はまた兎に角になりませうですから。あなた御體を大事に遊ばして下さいますでは不可ませぬ。」

濱子はうつゝなき態であつたが、

「乳母や、あたし切ないことばかり」と思惱んだ苦しうな聲。これを聴くと、

「また、そんなこと仰有つて、あなた、病氣は氣からと申しますのに、お心細いこと思つたりなさいますのでは御座いませぬ。とせが申しますことに、御無理が御座いましたらば、

御免遊ばして、何うぞね、お氣を丈夫にお持ち遊ばすやうに。「とせは心から慰めて、
「餘りお冷え遊ばすとお毒ですから、其では歸るといたしませう。とせは濱子様のことはか
し、これでもお案じ申してをりますので御座いますよ。」
「乳母やには妾本當に濟まないと思ふことはかしの。けどもねえ、何かと云つては、妾氣
が滅入つて仕舞つて口惜しいわ。」

「何でもあなたとせに濟むの濟まないと申しますことが御座いませう。あなたがわらつし
やりますばかりで、此とせが碌でもない體をながらへてをりますのですもの。」

「妾を心から同情つてくれるものは、乳母やと阿父様ばかり。」と云つて又うるました。

「そんな勿體ないことを仰有るものでは御座いません。とせの體をお役に立ちますなら、火
が水で御座いませうとも、何で御辭退申させよう。濱子様かとせに迄お心にもないことを
仰有る度毎に、私はお怨み申してをりましたよ。それで御座いますもの、濱子様には二十
幾年おつかへ申してをりまして、さらさら其を私の手柄に致すやうの不心得は御座いませ
んけれども、今更お心をお隔て遊ばしますのかと思ひましては、悲しくなつてをりますし
てね——。私は此世に何も望みと云ふものも御座いませぬのですし、せめて濱子様が樂し

くお暮し遊ばすのを、蔭ながらお見届け申したうと其ばかり。お辛いこともお樂しいこと
も、仰有つて載つて、お辛いことには、とせがお身代りを致しませうし、お樂しいことは、又
私も樂みに致しませうと存じて……。「と熱心に語つたが、これも連聲した。
「こんなにして、お悲しくばかりしてお暮らし遊ばすのを見ましては、此頃のとせが思ひは、
どんなに辛う御座いませう。濱子様。」
濱子は我を忘れたものであらう、腹上りだが、おとせが肩に其手を纏ると、面を押當て、
忍び音に泣出したのである。

「乳母や、妾が悪いのだから、何うぞ堪忍して下さうよ。乳母やの氣を推測つては、氣を引
締めておますけれども、とせすれば一人でこんな悲しいこと思つたりしてねえ。阿母
様が何處においでなか、其さへ此頃迄知らないでゐて、乳母や妾はお前を本當に阿母様の
やうに思つて、これでも決して御恩を忘れたことなどはなくつてよ。」

「またく、そんな勿體ないことを仰有つて、とせは涙が出てをります。」と思ふ様これも
泣いた。

朝霧にうまれておた沖の真帆片帆、磯に近く飛ぶ鷗のむれ、さうくと極をきしつて片

瀬の方へ漕ぐ一艘の漁船があつた。稍曇りの、日の光りはうつすらと雲間を漏れて、松の
葉の落葉に音のして、絶えずとめく波の音は、耳を洗ふばかりであつた。早や一時間餘
も過ぎたであらう。

この身

五

濱子は今年二十三。抜ける程色の白い、澤やかなる髪の毛の丈に餘つて、何日も無雑作に
束髪が英吉利銀香に束ね上げてゐた。匂ひやかなる眉、眼は剛長く稍鉤つて、睫毛の蔽か
ふさつて如何にも感情の鋭敏なのが見られるので、笑ふ時眞白く揃つた歯の唇を漏れて、
無邪氣に物を云つて除けるといふ質なのであるが、緘手として口を結んでゐる時には、凛
として犯し難い所が相貌に現はれるのであつた。本来ならばすらりとした立姿の、肩のあ
たり肉附の可い、何れも其母を知つてゐる者は、頗る母親似との取沙汰である。

濱子は誠に生れながらの不幸なる身の上であつた。因より人に羨される、權門に人となつて、
貧家の子女の連も夢想だに做し得まじき立派なる養育を受けて、一人前の女となつたので

濱子——この身

二八

濱子——この身

二九

あるが、故あつて自分の身を生み落とすと同時に、悲しく小助田家を去られた母親のあるを
知つては、幼なき頃の頑是ない間こそ、儚なき身の上を不幸とも思ひ知らなかつたのであ
るけれども、やゝ年を経て、可愛き前髪を上ぐる頃、漸く世に物心つくにつれて、人の心
に我身の物淋しく、時として繼しき母の何故となく怨まるゝこともあつたのである。其よ
りは連りに生みの母戀ひしく、懐かしく、袂漏る夜寒の風に夢ならぬ冬の夜さ、偕ては明
くるに近き夏の夜の蚊帳の中に、是も非もあらず、逢ひたく、見たく、しとよなる涙に浮
身を啣つのであつた。で、並々の令嬢達が心にこればかりの愛ひがなくて、一向に我世樂
しく過やす間にも、濱子は獨り書齋の小窓に垂籠め勝の、往通ふ友と云つても、餘り多く
は持たなかつたのである。乳母のおとせが恚る幾歳の長の月日の心遣ひ、身にかけての氣
苦勞は決して輕忽なるものでなかつた。

去年春四月、相應しき愛度き縁談が持込まれて、今日興入といふ日、濱子が曠やかに着飾
つた三枚襲の、瑞々しく美しきを見た時の乳母が喜ばしきは如何ばかりであつたらうか。
おとせは泣いて喜んで門に送つた。其より一年半を経た今日此頃、秋風の情なく老の身に
沁みて、思ひも掛けず濱子が身の果敢なく思遣らるゝ此不運に逢着して、冬枯の野に立つ

旅人の、便る方なき感想もしやう。氣を着けてさへ、我ともなしに沈む心を引立てながら、日ねもす夜すから、涙に晦れ、思ひに憫む濱子が、若しも大事の體に障ることもと心配しては、碌々に三度の食も咽喉に通らず、身に疲せを覺ゆる迄のことがないでもなかつた。乳母の心を知らぬでもない濱子が、其を又術ないことに思つて、つとめて苦惱の堪へ難いのを、出來得る限り忍んだのも想へば悲しさの極みである。

尙此外に濱子が是迄の身の上を就いて、語られねばならぬことは少くない。わけて裏若の處女の身に、濱子が自分の孤獨を深く感じた時、其心の奥に浸みて忘れ難く覺えしことの、今も殘つて取去ることの出來ない一事がある。此頃の愛ひと、悲みと、將た傷ましさと、或は此過去の一事が與つてゐるのではあるまいか。乳母が濱子の奥深い胸の底に迄立入つて、何うして其を知つてゐやう。固より父なる子爵が心附く限りではない。其は新醫學博士として世に持囃され、別して小町田家に舊識の故を以て好遇せられつゝある、松波藤次郎に關してもある。

海邊の岩陰に、濱子は今朝乳母のおとせと圖らぬ話から引入られて、互に心と心とを秘

めず語つて、手を取合つて泣いて、其が却つて少しは氣を慰めたものであらう、午後は日の影うらゝかに、一天驟す雲もなく澄み渡つて、瑠璃色の空の下に、珍らしく小春日和の照々と暖かいのに、南の小椽に何處から摘んで來たものか輪の小さい寒菊を手してむしりながら、床の間の花瓶を此處に持出して、思附いて花を生けやうとするのであつた。少し疲れを覺えて、濱子は散らばつた花を踏みしだきながら、椽先に腰打掛けて、生けかけた菊を直してゐると、小間使のお兼がやつて來た。

振返つて、

「兼や、乳母やは何處にゐるの。」とたづねると、

「あの、只今何で御座いますよ、小坪からお着を持つて來て呉れましたので、其を見つくりはせておらつしやいますよ。」と云つて、

「あの殿様は此度の汽車でお入來になるので御座いますか。」

「お前、先刻のお手紙に何とか云つて來てあるでせう。辰巳に鳥渡訊いて見てもらんな。」と濱子は缺を取上げてはちやくやつてゐる。

「辰巳様は屹度三時半の汽車で御座いますせうつてさう仰有つて、今先か出迎ひで御座いま

す。「と」のを取引つて笑ひながら、

「それぢや何も兼やが妾におたづねしなくつても分つてるぢやありませんか。」

「左様で御座いますけれども、何だか氣にかゝりますものですか。」とお兼はづつくりとした肩を動かして、袖を口を蔽ひながら、ほろりと笑出した。

「お嬢様、あの殿様がお出ましになりましたら、明日又江之島へおいで遊ばしますでせうか。」

「何うですかねえ。そんなことは阿父様におき、申して見た方が早いわ。」

「あんなこと仰有つて。豈夫其を私がおき、申すつて譯にもまゐりませんですもの。」と鳥遊考へて、

「お嬢様もお出懸け遊ばしたら、兼やも御一緒にお伴致しておよろしいやうに、お願ひ申し下さるさま。」

濱子は可笑しくなつて来て、

「何だか分りもしないことを、兼やは能くう程々なことお考へたことねえ。」

「あら、まあ、そんな譯のものでは御座いませんですけれども、私は未だ江之島を見物致し

ましたことが御座いませんですもの。朝晩に此方から眺めてばかりをりますものですから、

一度位見物致して置きませんければ、東京へ歸りましてから、お耻かしら御座いますわ。」

「江之島を見なからつてお前、義理が缺けるといふぢやありませんか、そんな兼や見たらに手廻しを好くしなくつても、些少もお耻かしらことなぞありませんわ。」

「それめ、どうも御座いますけれども——。」とお兼は何か云はうとして、濱子が餘り相手になつてくれぬので口を噤んだ。

「ほんやりとして立つてゐるのを見て、

「兼やなど、そんな氣樂なことはかと思つてゐて、妾本當に羨ましいわねえ。」と濱子は漸く菊さくらやら生け華つて、顧みだ時、淋しうたふらふつた。

「ま、お嬢様の。お可哀想に、これをもあなた、それ／＼心配なことは絶えませんで御座いますよ。」とお兼は少し委氣返つて、

「氣樂な體にならう／＼と致しまして、なかくあなたならはかしまゐりませんですよ。世間相應にお錢のことやら何やら御座いまして。お屋敷に上つてゐて自分だけならば、つゝるも御座いませんけれども。」とさうさき始めたので、濱子も所爲事なしに、

「誰でも、そんなものですかねえ。」と云つたが、小さく唇と溜息をした。

「おやが兼おんは何をしてゐるのだねえ。」と何を働いたのか、甲を切りながら、両手をぶらぶらして、勝手口から廻つて、あとせが首だけ突出して疳高の聲で呼んだ。

「勝手は目ぐるまの程忙がしなの、其處に何をしています。何處へあいでだらうと私は思つてましたのに、困りますねえ。」と笑つたのを、

「乳母や、兼おは大層おぢやなものですよ。」と濱子が日當り上氣した顔を振り向けて、答へたので、お兼も居堪まらず、

「おや、ま、濟みません。只今。」と駈出して「御免遊ばして下さいます。」と小腰を屈めながら去つた。

「あれをどうして苦辱するのかしら。」と我と我に語つて、濱子は徒空然として少時物思ひで耽つてゐた。

お兼とらゐるのは小娘の頃からして、小町田家の小間使に上つてゐるので、何事にも熱心な能く働く、餘り氣は利かならぬ方であるが、濱子が氣に入りの一人である。濱子が日向家へ縁附してから、尙お嬢様々々云つて改めなので、あとせに叱られたことなども

濱子——この巻—— 三五

濱子——友—— 三五

あつたといふ愛嬌者である。併し此頃は濱子自身が奥様と呼ばれる度毎に、身置ひをする程厭がつてゐるので、乳母を始め、成るべくうは呼ばないやうに心掛てゐるのであつた。

徒空然としてゐる中、濱子は一旦晴れかゝつた心の、曇りを掃ひて、唯懶き心地に空を眺め遣つてゐた。

友

六

「本當だねえ、よくまあ、お入來下さりました。此方へお出浮遊はしましてから、もう彼は百日近くもなるで御座いますか。いゝえ、もう、一度も東京へはお歸りはなさいませぬので御座います。毎日々々何をなさると申しますことは御座いませんのですけれども、何うもね、あなたまだ御氣分がしつかりとはお平癒では御座いませんのですから、おつき申してをります私共も、必掛りなことに申したら御座いませぬのですよ。はい、何別に何處へ云つてお願ひのぞも御座いませぬのですから、此儘お氣長に御保養遊ばしたらば、御本復は疑ひ御座いませぬ。」と云つて、さやばやと聲をあらしらあのはあとせも、居ながら

ら海が廣々と見渡される座敷の中に、客といふのは二十一二の奥極風の扮装をした女。二重險のつまんだやうな鼻に、可愛い口許の、くつきりと名手の鑿で刻まれたかと思はれる丸ぼちやの顔の輪廓正しく、エメラルドの輝く薬指と、肉細の金にルビーを箱めた小指と、双方の手を組合はして、膝の上に置きながら、側目も振らず、ちんと濟ましてゐた。竹原玉子と云つて、濱子が同窓の友、且つ殊に親密の交際を結んでゐたので、今は松波博士の令夫人となつてゐるのである。

濱子が病氣でゐるとだけは、何時かの里歸りに聞及んでゐたのであるが、今の身は自由にならぬことのみ多くて、濟まぬと思ひながら、其日の事に取紛れて、手紙を仕出すこともしないので今に及んだのであつた。所へ今日藤澤にゐる里の親戚の許に、愛度きことがあつて、是非来て下さいと體の動けない老人の切なる案内に、已むことを得ないで、父に随つて出て來たので、此處からは片瀬川を下つても遠くはないとのことだ、案内する男を具して、辛而午後から訪ねて來たのである。

あとせは豫て竹原様のお嬢様であつた頃から、能く玉子を知つてゐるので、此思掛けもなす珍らしく訪ねて來てくれたのに、嬉しくて堪まらないのである。

「本當にあなた、お話のお相手と申しましても、こんな片田舎で御座いますから、誰一人あらうでは御座いませぬのだし、何も存じませぬ私共ばかりなものですから、時偶お話致してをりましたも、厭あになつてお仕舞ひなさいませぬことが御座いますですよ。せめて海の景色がよろしう御座いますから、其で少しはお慰みにもなつてをりますか。」と話に油が乗つて來て、「このお座敷から眺めますのが一等なの御座いますよ。江之島の方を見ましても、返子、鎌倉の方で御座います。」と云ひく立つて行つて、閉切つた障子を左右に一杯押開くと、眼下に起こつて畫圖のやうなるうつくしい眺めが、玉子の目に輝いた。

「その、結構なお眺めで御座いますこと。東京なぞからまゐりましてはお目覚めましたやうで、一時に氣分が透いてまゐりますやうですね。」と玉子は少し座行出て眼を向つた。あとせは座に返りながら、

「景色だけを御座いますと、何うして、なかくなもの御座いますですよ。少しあなた、不便利と申上げる程な御座いませぬが、郵便や何か不自由なものなすから。」

「全くで御座いますねえ。」と玉子は尙も見惚れてゐる。

「御病氣もこんな好い景色ばかりで平癒なるもので御座いますならばねえ、あなた。」と顔

見合はせて「さすげとも、お氣の病ひだと云ふことなのですから、鳥渡は思ひ通りにまゐり兼ねますでせう。」とおとせは聲を落して云つたのである。

「本當に何とも申上げられませぬ好いお眺めですよ。」と云つて玉子は本の姿勢に返る。と屹とおとせを振向いて、

「あの濱子様にお目にかかれませうか。」と言葉を改めた。

おとせは背後にそり返つて、一方の手を腰に突いて支えながら、

「私と致しましたことが、つまりませぬ自分の申状ばかり並べましてね、何時迄もお取次も致しませんで——ほい、お訪ね下さいましたことが、譯もなしにうれしかつたものと見えますして、飛んだ失禮を申上げました。何うぞ御免遊ばしませよ、年を取りますとこんな意氣地なうなりませぬものか、自分で愛想が盡きて仕舞ひますよ。あなた御免遊ばして下さりませよ、ほい、ほい。」とそつと立上つて、座敷を出た。縁側傳ひに彼方の小庭に出ると、濱子は何處へか散歩でもしての歸りと覺しく、少しばかり霜月の草花を手に携へて、ふらふらとして来るのであつた。

「ま、可い所で。濱子様々々々。」と續けざまに呼んだので、濱子は振返ると、おとせは頗り

に小手招きをした。

濱子は何事かと思ひながら、落着いた足取でやつて来るのを、おとせはもとかしらうに、

「何處へおいで遊ばしたので御座います。私は又此處の御座敷へおいでだとばかり存じまして……。あの濱子様、お珍らしい方が見えてで御座いますよ。」と莞爾もので手を取つて引上げやうとする。

「はう、だれ？」と云つて突立つてゐる。

「まあ、あなた、何人でもおよろしいでは御座いませぬか。本當にね、今日は何といふ好い日なので御座いませう、殿様もおつつけお入來になるので御座いませうし、あんなお珍らしい方が入らしつて。」

「だから、何て方なの？ ちれたいのねえ。」と濱子は従々と先に立つて、袴も袴はず獨り玉子が端座つてゐる座敷へ来る。濱子は玉子を一目見ると、餘り意外な人であつたから、

「まあ、あなた何うして来て？」と踊り寄りながら、膝を突合はさむばかり進出て、吸附いたやう、手と手を取つて、二度三度打振つたが、

「あなた、ま何うして見たの、お一人？お一人なの。」と濱子はまじく王子の顔を見入つたのである。

王子もそんなに嬉しいのであらう、いそぐとして取られた濱子の手を、容易に離さうともしないで、堅く握り合つて膝の上に置いたので。

「濱子さん本當にお久闊で御座いましたのねえ。」と流石は堅く控えて、膝もくづさず、濱子が痛くも寝れ果て、惜しいばかりの髪も、東爰の搔上げたとも覺えず、顔を稍上氣せて振くしてゐるが、蒼白色の傷ましい其態、肩の瘦せ、手の細り、氣を止めて見てあれば、あのおうつくしかつたこれが濱子様かと、王子はひたとばかりに胸を潰すのであつた。

「この頃は何うなすつてゐらうしやませうと、妾は折につけてはお仲の上かつた頃のこと憶出されてなりませんかつたの。あなたが御病氣で此方の御別邸へ見えてだとは存じてをりましたので御座いますけれど、つらく何うもね、取紛れましては御無沙汰ばかり致してをりましたものですから。まあ、本當にお久闊なので御座いますわねえ。——それであの、御病氣はいかゝるので御座いますか。」と云つて、又云繼いで、

「全くよ、あなたお厭ひ遊ばさないでは、およろしく御座いますせんわ。餘程此前お目に掛つ

た時分とは、お疲せなすつてゐらうしやるやうなの、何時頃で御座いましたつけね。」と考へ、

「さうく、あの去年の春あたりや御座しませんかつたか不知。」

乳母のおとせは、二人がさうく懐かしうしてゐるのを見ると、なればこそと自分も云ひ知らぬ話してしまつて、弱かに鼻うめかすのであつたが、

「さうなのを御座りますよ。あのお屋敷へお入るすまはした時なので御座いますせう。」と口を出す。

王子はおとせを振返つて、

「さうく、あの奥のお庭で櫻の花を見物して戴いたやうに存じてをりますか。たしか濱子様が日向様へお興入遊ばす少し前なので御座いましたやうですわ。」

おとせは悦に入つて、

「本當に左様で御座いましたね、ほ、ほ、ほ。王子様はもう其頃は、松波様の奥様でつんとしてゐらうしやりましたわねえ。ほ、ほ、ほ。」と笑出したので、王子は體裁悪らうに、少し頬を染めて、

「あれ、乳母やさんは不可なこと仰有るのねえ。お口が悪くておらつしやるわ。」

「でもあなた、私にはあの時ほど思ひましたので御座いますですよ。本當にもう玉子様は御
細細はよし、お髪は御立派ですし、大きいお丸髷にお結び遊ばして、奥櫛風になすつておら
つしやる所が、能くお似合申してをりましたもの、見違へるやうに御成り遊ばしたつて。」

「まあ厭ですこと。」と玉子は其れも喜ばしやうに思出し笑ひをしたが、少し涙合んで、一方
の手を盛に突いて、俯向いてゐる哀れな濱子の横顔を眺めると、直ぐ調子を更へて、
「濱子さん、あなた御病氣は此頃いかほどの御座いますか。」と寒さうな其憐元に散る後れ
毛の顔おやうなのを見たが、

「妾、今日は藤澤の親戚迄、辛而抜けてまゐりましたものですから、此處からはお近所のだ
と聞きまして、もうくお目に掛りたくつて堪まらなくなりましたものですから、其であ
の鳥渡なりと何しやうと存じまして。」

「本當に御親切にねえ。」とおとせが又嘴を容れた。濱子は少し顔を上げて、

「妾、心からうれしいわ、能くまあ来て下さりましてねえ。」と、したが力揚げがしたかの口
調。笑みを泛べて、

「妾、何人が見えてだかと思ひましたわ。お葉書で鳥渡なりとお知らせして下さりましたの
だと、何で御座いましたけれども、もうお顔を見ましたら、餘りお珍らしかつたものだけ
ら、映濤して仕舞つてねえ。能く来て下さりましたのね、うれしくつて涙が出てまゐりま
すわ。本當に妾には誰もこんな片田舎に訪ねて下さるやうなお友達はありませぬもの。」
「以前から悠々と極めてまゐりましたものなら、お手紙で御座いますしても、使者でも上げて
置くので御座いましたけれども、餘り性急で、足許から鳥が立つやうなので御座いました
もの。本當にあなたお久々振よ。」

「いえ、斯うしてお訪ねして戴いてれば、お手紙も何も入るのぢやないんだわ、玉子さん。」
と久振に思はぬ面會のうれしさに、濱子は少し今日は勝れてはゐたが、氣分を悪がつてゐ
る此頃のことを忘れたやうに、胸の結ばれを解くのであつた。

おとせは傍から濱子を慰めるやうに、玉子に向つて、

「御病氣もお承しことぢやありませんかと思はれますから、孰れ其中には東京へお歸り遊ば
すお手紙で、取返ひませうと御座いますけれども、かねぐも申します一體病ひはおの
の心から出ますと申しますから、只今の所が全く肝腎なので御座いますよ。でも、あな

た、ぶら／＼やつて磯やら松林やらを御散歩遊ばしますことが、大層お薬になりますから、御座いますから、お淋しくつても、今暫らく此方で御養生遊ばすやうに申上げるので御座いますよ。」と咲きして、

「玉子様は何時か目にお掛り申しても、御達者で御結構で御座います。」

「何うやら斯うやらね、ま、斯うやつてお暮し申してをるので御座います。濱子さんの御病氣も、未だお名残で少しお寝れ遊ばして、御座いますけれど、御養生へ遊ばせば、大したことも御座いませんでせう。其にこんな好い景色を朝夕眺めておいで遊ばすので御座いますから。」

「海邊は大層空氣もおよろしう御座いますから、屹度もう大丈夫なのですよ。」とおとせは附け加へて、

「私もお伴申してこしらへまわりましてから、能く晩なども睡みますやうになりまして御座いますよ。でもこれは何も海邊だから、とせ迄か達者になつたと申すのでは御座いませんでせうけれど、おほ／＼。」と可笑しくもなす所へ笑つて、

「今日はあなた、御寛悠遊ばせよ。」

「難有う。」と笑つて、これも頭を垂れて辭儀をした。

「どうぞ。」と云つて立上りながら、

「何もか御馳走は出来ませんですけれども、其では失禮致しまして、鳥渡御仕度いたしますから。」と罷らうとする。其を呼止めて、

「何です、乳母やさん、妾になら何もかかまひ下さりませんでも。そんなことでもなされる、お氣が置かれますして、長くおたゞませせんわ。」

濱子が引取つて、

「あなた、可いわ、玉子さん、今日はお急ななくつても可いなせう。」

「いえ、急ぐのじや御座いせんですけれども……。」とたゆたや。

「ぢや、可いわね、遊んでゐて下さるゝよ、泊つても可いなせう、四時ですわ、これから歸りだと遅くなりますよ。」

「何うしませうか不知。」と考へてゐる。

「折角なもの、あなた此儘お歸りだと、妾また淋しくなつて仕舞ひますわ。其になんたもの。」

と相手の氣色を窺ひながら、

「妾まだお話せねばならぬことが、澤山胸に仕舞つてあるの。又は何時か目に掛れますやら分らないものね、玉子さん、お差支が御座りませぬのですと、是非にね、御慈悲にね、明日お早くお歸し申しますから、泊つて行つて下さるよ。今晚きなんだから。」と熱心に濱子は説いた。

「え、え、差支へますことなどは、今の所御座りませぬですけれども、それでもあの、濱子さん、こんな突然に上つて泊めて迄載りますのだと、餘り身勝手のやうですわ。」

「あんなお爲めかしを仰有つて。何もあなた身勝手だの何のつて、こんな不自由な住居ですもの、どうせお自宅のやうにして、ゆつくりお御足をお伸ばし遊ばすやうのことは出来ませぬですけれども、そんな御遠慮ならば決してお氣遣ひ遊ばすには及びませぬですか。何うぞね、玉子さん。やつぱしあなた不可なりつて。」と云つて、

「可いわね、此家へお泊りだからして、何もむじむじかしてはなさらせませう。」

「さすけれども、妾餘りのやうよ。」と玉子はそれでも心を痛めてゐる。

「さうしますると、明日御一緒で江之島か鎌倉の方へも遊びにまゐられますわ。こんなに

引込んでばかりをりますものだから、滅多にそんな遠くへ出ることはありませんもの、あなたがお泊つてゐて下さりますと、何もお御馳走は出来ませんから、其をせめてものお土産に致しますわね。」と笑つて促がす。

「それでもまあ、お氣の毒で御座りますこと。」と玉子も切たらしい濱子の意を忤し兼ねた様子。子。

「濱子さん、それぢや御迷惑でも泊めて置くことにはしますよ、餘り何だけれども。」とこれと笑つて。

「さう、それぢやさうして下さるよ。妾も本當に迷つたばかりで、お別れしたくは御座りませぬもの。」と訝々として元氣の好言葉遣ひ、濱子は安心して、

「今日は何、あなた阿父様も見えます筈なので、辰巳がお迎へにまゐつて来るので御座りますよ。三時半の汽車だからして申してをりましたから、もうまゐらねばならぬのですけれども、時間が間違ひましたのか不知。」

「あや左様でござつしやりましたか、阿父様ばかりなので御座りますか。」と問返す。

「何うですか不知。屹度高光も一緒だらうと思つてをりますけれども。此頃はね、大層忙し

がつてゐるのですつて申してをりましたから、連れてまゐりますやら何うですか。」と云ひ

「あの玉子さん、此室ではお話が何故ですか落着いて出来ませんわ。彼方の室へまゐりませう、海は能く見えませうけれども、人の聲なきをえまして不可せん。」と立上る。

「まあ、大層あなた仙人見たいにおなりですこと、ほゝゝ。」と玉子も後に續きながら、さう云つたのである。

玉子は導かる、儘、濱子の居間に決めてある、松林に向いた小奇麗な部屋に入つて座りながら、床の間に野の花の、流石に振り振りは面白くないけれども、何處となく生き／＼としてゐる菊の、花瓶に活けられたのを見出でたので、

「濱子さん、大層奇麗なことねえ。」と話を向けた。

「餘り仕様がありませんかつたものですから、今日ね、方々で摘んで来て、小半日もかゝつて慰み半分に活けて見ましたの。」と自分も振向きながら、

「だけども、餘り輪が小さくつて、莖が短かいものだから、瓶にするには何だかこままつたやうだね、何だか見苦しいやうせう。」

濱子——友

四八

「いえ、本當によく出来てをりますよ。」と玉子はそらゝなす。

「濱子さん、御病氣は別に何うと申しますやうのことは御座いませぬの。」と眞面目に改めて問ふたので、

「難有う。此頃は餘程氣分がすぐれてまゐりましたやうですよ。」と濱子は聲を細くして云つた。

病氣はと云はれれば、濱子は何時でも返辭に窮して、要領を得ぬやうなことを云つてゐた。強ち自分の病氣を隠さうとするのでもないが、斯く問はるれば何となく心に穢かならぬ思ひかして、氣が沈むので、出来るだけ病氣や氣分のこと、多く語らぬやうに努めてゐた。先程から玉子に幾度か病氣は？と問はれて、うまく外して答へなかつたといふのも、外に仔細があつてゐないが、唯此程かならぬ思ひが胸に湧くのが厭さからである。何故そんな思ひかして来るのかは濱子自身も知らぬので、又これを知らうとは思つても見ないのである。

玉子との親しみは、決して去年今年始まつたものではない。いや、去年今年こそ餘り親しく往來もしなかつたのであるが、其以前は餘り遠くない處に住んでゐたので、二三日置き

濱子——友

四九

に顔を合はさぬこともなかつた位。其も濱子は外出嫌ひの、多く家にも垂籠めてゐたといふので、玉子から重にたづねたのである。で、何をすることも二人は何日も相談相手となつてゐたので、流石に女の年頃になつた此四五年は、表面を憚ることのないのでもなかつたが、要するに其は表面で、互に氣心を知合つてゐる二人は、其がある爲めに眞情を阻害せらるゝことともなかつたのである。固より二人が心の奥底に潜む大事は、若し果してあつたとするならば、用心深い女子の性質として、互に明かし合つたとは思はれぬが、猶二人が互ひくの話に依つて、仄暗い心の底の惱みにも、澤山の慰藉を得てをったといふことは云ふ迄もなき事實である。然るに一昨年秋、玉子は松波博士の家に嫁することとなつてより、相逢ふことの少なくなつたのに、搦て、恰も同時に濱子がしばし病氣にかつて、其より殊に陰氣臭くなつて仕舞つて、玉子に對してさへ餘り逢ふことを避くるやうになつたので、二人は互に思出さぬ日とはない位であつたが、さればとて元來の如くちかしく逢つて、少しの奥底もなしに語ることは出来なくなつたのである。濱子が何故氣心も知合つてゐる玉子に迄、面白く逢ふを欲しなかつたかは、病氣上旬の所爲と云へば其で済むやうなものであるが、其處には又一場の哀れな話が傳へられるのである。――

で、去年の春、濱子が日向家へ縁があつて、取極められた頃、一度玉子は濱子を訪ふて、半日を其家に費したのであるが、其時も快い談話といふが如きはなされなかつたのである。これは二人が心を隔つるといふのではないが、變り行く身の境遇と、其思想とは、止むなく隔たらしむるのであらう。

今日濱子が病氣を養へる別荘に、玉子が訪ねたのは、二人が此時以來初めての面會であつた。玉子が増進思想の遷るにつれて、心を明け出して何うといふことが出来なくなつてゐるのにも係らず、能く濱子を忘れないで、懐かしく思つてゐたと同様に、濱子はわけてゐる濱子の佗びしき住居に、玉子を戀しく思ふてゐたことは、前大抵のことではなかつた。相見の瞬間、二人が引付けられるが如くに擦寄つて、手を取合つて喜んだといふものは、其心と心とに昔時其儘の眞情が普へられてゐたからであらう。

「本當にね、あなたお體が第一に大事なのですから、御用心遊ばさねば不可ませんですよ。」と玉子は氣遣はしげうに見上げて、

「あなた、あの遠山様の房子さんね、御存知で御座いますせう。少女の時分羨共と同じ級にお

S.S.のね、ほら……」と云つて、

「あなた御存知の筈なのですよ。」

「はあ、覚えておますわ。あの方でせう。拙宅へも何時か来て、あなたと三人でいろ／＼お話をした。」と濱子は漸く記憶を喚んで頷いたが、

「それで房子さんが何う？」

「おや、御存じないのねえ、あの方のこと。」

「いゝえ、些少も存じませんですよ。」

「あの方もね、長らく御病氣でゐらつしやいましたが、ま、こんなこと云つて、あなたに失禮かも知れませぬわ、御免遊ばして下さいますよ。で、あなた一年ばかりと申しますものは、御氣分がよくなつたり悪くなつたりなさいましてね、ぶらくやつてゐらつしやつたので御座いますよ。ですと、つい此間のことなのすわ。御病氣にお風邪が添つたとか、あなたも可哀想に到頭おじくなり遊ばしたのですよ。」

「まめ。」と云つて驚いたのら」云。

「濱子さんの御病氣を、房子さんの御病氣におくらべして、あたしこんなこと申上げるのは御座りませんですけれど、ね、御病氣はみんな何だと申しますもの、些少ばかりの御

油断で、取返しつかないやうなことになるのですつて。ですから羨はあなたがあんまりお考へ遊ばしたりなぞなさいまして、お體をお厭ひ遊ばさないで、折角お軽くなつた御病氣を損ねるやうなことでなさいましてはと、さう存じますして。」と御挨拶のやうなことを云つて、

「其でね、房子さんの御境遇を承つて見ますれば、全くお氣の毒でたまりませんですよ。房子さんはお一人娘でゐらつしやいましたものすから、お婿様をお迎へ申すばかりになつてゐましたさうですけれどね、何かで阿父様が悪い奴にお掛り合ひ遊ばして、お手許が不如意遊ばすやうになつて、其でお婿様の方迄がお出来遊ばさなかつたとかで、其爲めの御病氣だと申すことで御座いますもの。お婿様と仰有るのも、房子さんがよく御存じの方なのさうで、何方からもお可愛く覺してゐらつしやいましたとやらで御座いますよ。遠山様へお仕へ申してゐました老婆やとやらで御座いますか、其を申して本當にお可愛想なことで御座りましたつて泣きましてねえ。」と云繼いで、

「内氣な温順しい、人の大勢ゐる中では、あまり言葉も仰有らないやうな、あんなおやさしいお方なものですから、もうちやんと胸にお婿様と極めてゐらつたのに、飛んだことか

ら、自分の大事の戀といふこと迄もこぼされてお仕舞なのですから、どんなにかねえ落膽なさいませう。これは妾の想像なので御座いますけれども、濱子さん、何うも房子さんの其後の御病氣は、この事が原因になつてゐるのぢやないかしらと思はれますわ。ね、さもなければ、一年ばかりもあんなぶらぶら病ひを煩つてゐて、急におなくなりなされるつてことは、御座いませんでせう。妾此度さうだらうと思ひますわ。」

「さうでせうか。」と濱子は少し氣を損ねて聴いたのである。

そんなことは、玉子固より氣が着かないのであるから、房子と呼んだ亡き人を思つては、自から果敢ない思ひもせらるゝので、

「人といふものは、本當に種々な運命を持つて生れたものだつて、其からさまぐりのことを思浮べて、何だか慙はれましたやうな氣分になつて仕舞つてね、夜一夜あなた悲しいやうな、泣きたいやうな、たよりない厭あな變な氣になりましたので御座いますよ。」と息をつ

さか、

「こんな氣がしてまゐります時分には、自分が小供でゐた頃からの生立のことが、まぎなくと目に見えますやうで、何だか人は果敢ないやうな感想がしてまゐりまして、本當に可笑

しいのですけれども、邪氣ない小供見たいな心持になりますのねえ。」

「はあ。」と濱子はつかぬ返事をして眞面目に差控へてゐた。

「あなたや、妾がお老年になりましたも、濱子さん、振返つて小供からのことを追想して見ましたらば、依然果敢ないとはかし思ふでせうか。」と濱子を見ると、机の端に消えもしやうな白い片肌を持たせながら、頬杖突いて癢えたやうな體をそれに支へて、深き物案じに晦れてゐたので、少し胸を轟かした。眞面に向直つて、

「濱子さん、あなた何うかなすつて？」と目を附る。

何時か秋の日の桔槔落しといふが如く、海面は早や一面の暗緑色を帯びて、一時夕照の紅色を横さまに漂はした大波小波のうねりも見えぬ。白い砂、青い松、光射の鈍い夕月にほんやり見えて、歎乃も聞えぬ。とほら〜と眸に冷たい風の音訪れて、障子をゆすぶつた。室内には燈火も運ばれぬ夕闇の中に、玉子が胸を轟かして覺えず目を附つたので、濱子もはつと氣が着くと、慌て、蒼白い其面を上げたのであつた。

「あなた、何うかなすつたのぢやないの。」

「いえ、何うもしたのぢや御座いませんですよ。妾も何だか心細いやうな氣がして來まして

ねえ。あなたも王子さん、そんなこと思つてゐらつしやることがありますのねえ。妾は始終中あなたもうー。」

「ですけれども、あなた、お體に障つたりなぞ致しませんのですか不知、こんな長々お話をして。」と王子は自分が餘り言ひ過ぎて、濱子の氣色が沈んだのではあるまいかと心遣つて、話頭を轉じやうとした。

「いえ、大丈夫よ。妾こんなことでも考へなくつては、却つて病氣になる位なのですもの。」と笑つて、

「王子さんも、やつぱしう思つてねえ。妾は毎日々々こんなことばかり考へてゐますものですから、とせはあなた、毒になりますからつて背きませんので御座いますよ。こんな人の世の儂ないことや、人の行末とか、運命だとかいふやうなことを思つてます時は、氣がしんとして仕舞つて、何だかぐさぐさして心が落着いて、可い氣持になつてまゐりますので御座いますよ。あなた、そんな澄んだやうな氣がして來ますでせう。」

「ですけれどもね、妾は悲しくなつて仕舞つて、仕様がありませんの。」

「それであらうですわ。世間が何も彼も厭だと思ひます時に、こんな鹽梅に氣が澄んでまゐり

ますると、悲しいやうな、妾は其處に慰めがあるやうな感じがしてまゐりますの。」

「悲しいと思ふことは、其下してゐることは御座いませぬね。」と王子がいきと、

「さう他々ばかりしてゐますよりは、悲しいと思ふことが出來ますれば、どちらかと申せば、心が定まつて來るのですもの。」と濱子は遮つたが、顔を見合はせると、等しく笑ひを合んだのである。

王子は、

「妾は悲しくなつてまゐりますれば、小さな頃も死別した阿母様のことが直ぐ思出される

の。」と無邪氣な口振で、

「全くなのを御座いますよ、心細うとか悲しいとかになりますれば、阿母様のことはかと思ひ續けてゐましてね。」

濱子は少し愁ひを帯びても見られたが、絶えず口許には淋しく微笑を浮べてゐた。

王子の父は宮内官で、なかく可い地位にある人であるが、左程家産を積んだとも覺えぬが、家庭は餘程の嚴格で、王子の如きも下様の様子などは餘り多く知らないで育てられた方である。幼ない頃母に死なれて、父親の殆ど手一つに人となつたので、僅かに母の愛

の幾分を記憶に刻んで、其が忘れられず、憶出しては母いませし時世を偲ぶのであつた。濱子には産みの親にも優る乳母もあり、兎に角、母親と名のつく人もあつて、左程不足にも思ふ筈ではなかつたが、其でも別に生の母があると聞いているは、小供心にも戀しかつたこともあつたのである。二人が朝夕にゆきかかてゐた頃から、玉子が母親のことを話出す時、濱子は又同じ母親のことながら、外なることを思つてゐるのが常であつた。今日久々振に玉子が今も母親を戀しく懐かしと語出した時、濱子は我知らず微笑まれたのであるが、自分が眞實の母なる人はと想到れば、胸の痛さも覺ゆるのである。

其から其と二人が話を續けてゐる中に、おとせは、暮りに夕餉の仕度を急いでゐたのである。濱子の父も通知迄してゐるのであれば、今に來られるであらうと考へてゐたのであるが、其事は竟に豫想に過ぎなかつたのである。濱子と玉子とが膳を濟ましてやがて、鎌倉の停車場迄正午過から出迎ひに行つた辰巳は、何か物思ひつゝ、日がとつぷりと暮れた頃、とほくとして自分一人で引返したのであつた。

辰巳とおとせとは、心配がうたして裏戸に密々と話した。

「其でもそんなお差支が、殿様の方にお出来遊ばしたかも知れないぢやありませんかね。」

濱子——友

五八

とおとせとして云ふのはおとせである。

辰巳はそれには何とも答へない。

「少し聞込んだこともあるが、私は心配でならぬのよ。」「と考へ込む。

「だから、何がやありませんか。どんなお差支が出来たのかも知れませんもの。」「

併しね、其お差支といふのが。——私も斯うも思ふのだが——聞けば日向様では愈濱子様をお離縁遊ばしたと仰有つていふことなのだから。」「

「そんな波相な、縁起でもないこと云つて、可い年をして辰巳さんは何を云ふんだね、そんなことでもあつて御覽なさい、どんなに私は失望しますだらう。いゝえ、お嬢様はあの通りの御氣勝で、日向様へは二度と行きたくないと迄仰有つてゐらつしやるのだから、何ですやうなものだけどもね、何の咎がなくつて、御離縁なると先様に仰有つて戴いては、第一あなた、お名折で御座います。家風に合はないとか、何とか、そんなことでは此とせが承知は出来ません。」「と泣聲になつて少し急込んで來た。

「私も其だから氣を揉んでるのぢやありませんかね、お嬢様にまさるか／＼お落度があるらうとは思ひませんければとね、まあ聞きなさいよ、日向様の方では何か一かどの證據でもあ

濱子——友

五九

るやうに仰有つてのやうだからな。」

「證據つて其は何の證據だらう。そんなことが怪我にもあつて堪まりますか、辰巳さん、車轍ならば大低にして置いたが可いぢやないか。」と乳母は最早遺願がないうやうに思ひ詰めて、打腹立つてゐるのである。

辰巳もむきになつて。

「何を云つてゐるんだね、私が何でこんなことに送申職を云ひますものか。私は容易ならぬことを聞込んでゐるから、一方ならず心配もするのぢやないかね。」

「だけども、そんな云掛りを先標に云はれる筈はありませんもの。」と力を落して、おとせは云ふ。

「股様が御手紙送下すつてゐてあいでならないのは、其あ他に御用事が出来なかつたとは限らなければ、何ですよ、これも必ず御心痛遊ばす一つだらうと思はれるよ。」

「何うしたのだらう、お本當にそんなことでも出来て来た日には……。」

「私は停車場へお待ち申してゐる中にも、若しかそんなことでも思つてゐたものだから、気が落着かれないでねえ。」と云つて、

「都合では源子様には御内證のことにして、明日早く私は一寸東京へ歸つて見やうかと思つてゐるのさ。」

「どうですかね、どうして見て下さると、私もそんなに助かるか知れないけども——辰巳さん、本當にそんなことに送なつてゐるのかねえ。」と危ぶむやうな便るやうに口調を云つた。

「茲で斷言は出来なけれども、今の様子では、ま、どうぢやないかと氣遣はれる。」と憶面もなく云つたので、おとせはほつと溜息を吐いて、

「どんなに氣苦勞をして來ても、仕様のなす時には仕様のないことが出来て來るものだねえ。」と涙つぽく哀れた云つたのである。

「私は日向様の云分といふのが、聴て見たいと思ふのですよ。どんなことを仰有つてだか。」

「それがね、一通りのことならば、却つて源子様をお引取遊ばすのにも何だけれども、餘りなことを云ふのだから、事實か何うか其は私には分らないけれど。」

「一通りなつて、其はなに、何をせう？」と目を圓くした。

過去の事件

卓子を三角に取圍んで、何れも微醺を帯びてゐる。これは日向男爵家の西洋室の會食室で、日向輝雄が主人となつて、客の二人といふのは、共に親しい交際を結んでゐる小菅静馬と、他は小山田清雄といふ美術家なので。

寒山竹の大きい鉢植が、一方の卓子に置かれて、燃立つやうな緋の窓掛が引絞られたまゝ、夕日を受けて眩耀いばかりである。物は大方荒らされて、亂暴に投出されたナイフの、嚙み赤したコップと共に、日の影にきらりと輝いて天井に反射した。

「ぢや、君、珈琲にしようか。君はチヨコレートといふ注文だな。」と日向は美術家と小菅とを見較べて、「何うだ、庭でも散歩して、改めて晩餐後の一杯とさぢのは。」

「それは甚だ結構だね。僕正に賛成する。」と卓を叩いたが、コップを取つてぐつとやつて、「あ、咽喉が干いて仕様がな、だから君達の貴族主義は好もしくないといふのだ。」

「あや、鳥渡お待ちなさい。だから君達とは僕迄貴族にして仕舞つたね。」と小菅が引取つて、

「君の見解に依れば、無爵者の僕の如きも、且父祖の勳功なくして貴族たるを得るのだね。」

酒子——過去の事件 六二

酒子——過去の事件 六三

「馬鹿を云ひ給へ。假りに君達と云つたからつて、君など何だね、平民の子じやあないか。君達と云つたからつて、蛙が森になり得ぬ限りは、君は依然として平民の子だ。」

「これは何うも怪」からぬ罵詈雑言をするぢやないか。平民の子が何うした。」と進み出ると、

「平民の子は到底男爵日向輝雄君とは種が違ふといふことよ。は、は、は。」と洪然大口を開いて笑出したので、日向は腹を抱へながら、

「其で小山田君の咽喉が乾いて、何故貴族主義とやらが排斥されるのだらう。」

「それは云ふ迄もない話ぢやないか。君達は常にこんな三鞭とか何とか、面白くもない酒を好んで、お蔭でお附合に出た僕迄を困却せざるぢやないか。芳烈正宗の如きは、酔つて酔醜の甘露水あり。ビールなら未だ酔つて酔心地が可いのだが、此等の酒と來ちや何うも飲んで陶然たらず、更に酔陶微吟に耽るといふ蔗境に入ること出来ないね、其癖馬鹿に咽喉が乾いて來て仕様がな。何うです一本抜かして下すつちや。」

「何を。」と日向。

「仕方がない、ビールで間に合はして置ませう。」と半で口のあたりを拭いた。

「下らない男だ。其ぢや君、ちつとも要領を得ないぢやないか。君の云ふ所は一向とらまへ

所がなくて困るよ。」

「日向君、本當ですせ。まあさ、お免し置かれませだ。乾いて仕様がなないのでが……。」

「今チヨコレートを持って来るよ。其とも水なら茲にある。」と水瓶を突出されて、

「これは千萬忝ない。ビールも好いが、怒る時水も亦多少の味なきにあらすよ。なにね、水が好きだからつて、敢て僕の體の組織迄が水分によつて出来るといふのぢやないよ。」

「止せ。小山田君、大低にして静まらんか。面白くもない。洒落だか管だか分らない、ろんな辻褃の合はないことを云ふものぢやない。君、男爵の御面前ですせ。」と小菅は笑ひながら、

「何うも本當に酔つたらし。」

小耳に挟んで、

「なに酔つた。申越云つちやあ困る。君の御馬前ならざる限り。男爵の御面前が何うしたといふのだ。而も男爵輝雄君は、憚りながら慥く申す僕の親友よ。へん。」と云つて鼻息が荒い。なに、さう酔つてもゐない。例の展覽會の大氣焔よりは餘程可い。心配といふものがないから、こんな少量ばかりの酒にも世間が面白くなつて来るのだ。」と微笑みながら、一つ年

上の美術家を寛待なるる。

小菅それには耳も藉らず、

「君の御馬前ならねばこそ。さう生命がけに働かなくつても可いやうな勘定ぢやないかね。おい、小山田。君、何うしたね、確乎し給へ。」と手を伸ばして友の肩を軽く叩いて、

「ちうまあ一時に弱込んで、飲直しも出来ませ、君。」

「いや。ちうとも弱込みはせん。これつばかりのこと何で弱込むものか。」と意氣昂然として云つたが、頭が重くるしい様子。

彼是する中に珈琲が現はれる、大方話にも倦んだ頃なり、三人が等しく口を噤んで、何となく、れ氣味で擗へてゐると、美術家はふつと憶出したかのやうに起上つて、

「ぢや、日向君、僕はこれにて失敬する。」と云ひ様さら／＼として歩出さうとするので、日向は不意なのに面を喰つて呼止めながら、

「あや、何うなすつた。何もさう無愛想に急がなくなつても可いやあなにか、待つて、呉れる人のありさうもなし野郎の癖に。」

「悪いことならのだが、これから少し廻らんければあならぬ所があつてね、君、知つて

るぢやないか、僕が今日懲らしておられないことは。」と愈歸り仕度なので、日向も強ひては止めず、

「知ってる、大きに知ってる。何れ君の怨を枉げ給ふ處ぢやもの、様な處ぢやよもあるまい。」
「お待ちなさい。いさゝか御人體がやんとなくておはしますからね、おむ。」と合點をしたやうに、

「小菅君もそれぢや達者だね。」と一揖する。

「何だ、こゝで生別れをするところぢやあるまいし、千駄木と下谷と云へば目と鼻よりも近しぢやないかね。何だか面白くもなす御言葉だね。」

「と云つて別に云ふこともないのだから、其ぢやと云つて黙つたら氣が悪からう。」
「なに悪うことがあるもんか、君なんざあ……。」と云ひかけて笑つてる。

「これめ聽き直さなければならん、怪しからん、君なんざため。」と小戻つて、

「これでも小山田清雄と仰有つてね、お齡こそ若くつてゐらつしやるのだけども、斯道の大家としては誰知らぬ者のない——。」と一口に云續けて、呼吸が續かなかつたやう、深く吸込んで、

「高い聲では申上げ難いのだが、これも。」とにやり笑つて何か云はうとした時、

「さう待つてました。」と小菅は我を忘れて躍出す。

「くだらない、あゝ止まう。」と美術家は暗然として

「ぢや、いよくこれで失敬する。」

「腕車をさう云つつけやう。」と日向は立つて送出す。

「腕車？其には及ばぬ、冷風吹面其處此處と冷かしながら歩くのも妙だらう。」

「それも可いが、冷かしながら君迄が冷えたりしぢや體に何うだね。」と流石は眞顔で心配する。

「それには及ばんく、大丈夫だよ。」と小山田は早くも玄關口に出ると、女が外套を持出すのを受取つて、脇挟みながら、召してらつしやいと云々のを耳にも入れず、帽子を手にして、

「ぢや失敬。」

「ぢや失敬。」

「用心して歩き給へ。」と小菅が聲を掛ける。

日向と小菅とは、小山田を送出して、又食堂へ返つて來た。

日向は葉巻に火をつけながら、

「小山田ばかりは、何日逢つても苦勞のない顔をしてるね。あれで今年の審査會を罵倒して、新聞に出したといふのだからね、審査長にべこ／＼して銀盃にありつかうなんていふ意氣地なしの手合が多い世の中に、美術家の仲間でも餘程あれは變り物だよ。」

「けれども、流石に洋畫の方は悪く云はないのが妙じやないか。日本畫から洋畫へ入つた男だから、日本畫には最早御用がないといふので罵つたのだらうて。」と小菅が面白からぬていふ云々。

「なにさ、氣紛れな賈だから、そんな考へなぞ持つちやわらないよ。所信を斷行するこれ男子の勇ぢや、なぞと云つてるぢやないか。兎に角面白く男だ。」

日向は君の方のお話はあれから何うなつたね。」と云つて聲が低くなつた。

「厭な話をせんければならぬよ、日向君。」と云つて小菅は思惑ありげな聲かならぬ顔をした。

「其れ君は何う思ふ。」

「やつぱし僕の考へでは、此上はもう小山田君の所謂所信を斷行するこれ男子の勇ぢやね。何日逢逢巡してゐたからつて、連も君ね、泥の上塗りするやうなものだから。」

「僕も固より其思惑ではゐただけども、君、何れにしても僕は非常な苦痛を忍ばねばならぬのぢやね、察して呉れ給へよ。此頃はもう不快で、朝から晩迄酒浸りよ。」と淋しい笑ひを漏らして、

「多少の地位もあれば、名譽もある身分では、君、離縁をするといふ其事が早くも堪へられぬ苦痛です。だからと云つて、何うも不貞腐れた女を家に置くといふのも忍びないしね。」

「それめ、さうに違ひない、素商人か何ぞの家庭なら、仕置は思ふ様のことが出来るやうなものだけれども、君の身分としては、さうも行かないのだよ。兎に角日向男爵家の嫡子たる輝雄君の所置でなくつちやならないのだ。」と合槌打つて、

「先方でも敢て夫人の不義については、何とも辯解は出来ぬと云つてゐるがね、やつぱし其名譽が／＼と心配してゐられる様子。だから遠慮なくさう云つてやつたのだよ。日向君の方でも多少の地位もあれば、名譽もある。して見れば浪子様に何等かの御不都合があつたと分つては、知つて知らぬ振もしてゐられないのだからつて。其れね、其不都合といふの

は何ういふことかと云ふのです。何も此場合憚ることもないのだとは思つたが、まあ、其處迄云はなくつてもと思つて差控へたのだが――」。

「大きに何うも君に濟まなかつた。」と日向は俄かに太息をついて、頭を俯垂れたのである。小菅は絶えず日向の様子をのみ氣にして眺めてをつたのであるが、此時深く頷いて、獨合點をして、肺腑より出るやうな、落着いた、とつしりとした聲で、體を前にのしかゝりながら、

「でね、輝雄さんは一體何うお考へであらう、其が聴きたいつてさ。こんな際どい場合に及んで、猶且つ君の心を當てにしてゐられる様子なんだ。僕も氣の毒にもなつて來たのだが、物の道理を考へて見てもね、君が其程不義の女をいつくしむ筈もないことは分りさうなるのだのに、虫の好い話なんだから、少しは呆れても見ましたね。其は勿論貞淑なる日向夫人であつた時には、出來るだけの愛情を澆ぐのが妻に對する夫の責であるけれども、何も此程の汚辱を忍んで迄妻に仕へる理由もなしね、僕は男子の意氣、面目にかけて獨り少からず激昂したんでさ。」

日向は黙つてゐる。

小菅は故意と察れかけて、

「實を申せば日向君、僕だつてもこんなことを思つたりしたりするのぢやありません。けれどもね、第一君、僕の父が君に對して、又君の家に對して、媒介として充分な責任がある、不面目であるといふことを知らんのぢやない。で、僕と君とが並々の間柄に過ぎなかつたものであるとするならば、成るべくならば、僕も彌縫して、こんなことにはしたくないのだけれども、僕は何うも君を欺くやうな氣がしてならなかつたものだから。君、僕を悪くお取りぢや困つて仕舞ふのですか。」と日向を見たので、

「いえ、決してそんなことはない。僕は重々君の御親切に對して感謝してゐるのだから。」

「感謝など、君と僕との間柄で、そんな下らない儀式はない筈ぢやありませんか。」

「何もそんな意味で云つたのぢやないよ。唯ね、僕は少しとれ程迄に耻辱を與へられてゐるのだから、實は其を漢子自身について探偵して見たいと思つてゐるのだが。」と云ひ懸つて、

「ぐすくこんなことを思つてるよりは、断然たる處置に出た方が得策かとも思ふのだが、少し事情が其處にはあつてね。」

「はて事情がある？、何も君、恚うなつては事情なを顧みるに足らんぢやなからうか。で、僕は此結婚の媒介たる父の子としては、成るべく穩便にして戴きたいのだが、君の親友として、何うも取急いで御處置をなされた方がよくなるかと思ふのです。」

「さうかね、僕も勿論其覺悟だけはしてゐます。」と又「覺悟」を繰返した。

小菅は其端麗なる顔容に、少し朱を澀いで、

「さうやら僕は誤解せられてゐるやうな氣持がするよ。」

「決して。小菅君、そんなことは僕の方にない。僕の誠意は神明に誓ひませう。」言葉をや柔らげて、

「そんなことは何うでも可いのだが、何となく僕の云ふことが、君の胸に落ちないやうで……。でね、僕は今少し僕の聽き得た事實を君に語らうと思ふのだが。」と返事を俟つと、

「さや、新らしい事實があるのなら、何卒君、知らしてくれ給へ。」と餘り落着いてゐる様子ではなす。

「新らしいことは少しもなす、君がさう仰有ると、却つて言ひ悪くなつて來るのですが、濱子様の方で、此頃君のことを何とか噂してゐるやうですよ。」

濱子——過去の事件 七三

「どんな？」

「じつがしのことでもないのだがね、畢竟何といふのさ、君怒つちや不可ないよ——畢竟の君といふのが眞人として仕へるに、餘り面白くないといふのでせう。其で濱子様の方でもさう日向家へは歸らないと云つてゐるやうな話です。」

「さむ。其の事實だらう、其には僕の胸に思當ることがある。」と激した口調で、熱心に、

「其があれはこそ、僕も確たる證據が上らなくつても、銀林の一件を信じねばならぬやうなことになるのだ。君、濱子がそんなこと誰にか云つたのか。」

「僕の耳に入る位だから、其はさうに違ひはないさ。して見れば男子として、君になつても餘り面目な次第でもないんだね。」

「僕の方でも、そんなこと何時迄云はせて置くやうなことはしない。君、僕がこんな煩悶を重ねてゐるといふのも、出來ることなら、離縁をするにも人間の悪くない理由を以てしたらば、濱子の爲めにも、又小町田子爵の爲めにも、少しは可いかと思つたからなんです。僕自身の名譽も惜しい、汚されたと思へば實に残念に思はないではをられない。だけれども僕は人の名譽も同時に重んじなければならぬ。濱子自身は、或は名譽の醜の汚點のといふ

濱子——過去の事件 七三

だけが野暮かも知れないが、小間田子爵は上院の異彩を以て任じておられるだけ、どうも行くまいと思はれるんだもの。小菅君、人といふものは餘計な思遣などをして、自分で自分を坑にするつてことが多いものだね。」

「全くだ、僕は君が爲めに満腔の同情を寄せんければならぬ、只婦女子に關してと云つて仕舞へば、何でもないやうであるけれども、實際男子といふものは、兎もすれば婦女子の爲めに身命を損ふことがすくなくないね、僕もね、濱子様の口づからそんなこと仰つたと聞いた時に、どんな腹が表えるやうな思ひをしたらう。」

小菅は呼吸を合はして、勢ひ込んで云つたのである。

「此度のやうなことも、若し事實が過去を以て推すことが出来るやうなものならば、必らずしも虚誕の説とのみは云はれぬことがあるのです。何も僕に直接に怨みがあるといふのもないものを、茲で洗立をしやうといふのぢや夢更ないが、君もあの松波事件といふのは知らぬこともないだらう。」と不思議な問を發する。

「いや、一向知らぬ。何とか云つたね、其松波事件。え、松波事件といふのはやつぱり濱子に關しての事件なのかね。」と稍上氣せてもゐる氣味で、日向は聲のあるうつくしい口邊を

濱子——過去の事件

七四

歪めながら、恐ろしく熱心になつて来た。

「關しての事件かつて、君、事件の主人公が即ち濱子様ぢやないか。小間田家では非常に此事は秘密に附してあつたとかに聞くが、悪事千里を走るとやらでね、其に邊の者に口があるから、一時はツとしまらになつたのだ。」

「え、そんなこと。其は君、此度濱子が里へ歸つてからなのか。」と我を忘れて眼を輝かした。此方は應揚に胸を拱いて、椅子に埋まつた體を反しながら、

「いや、そんなことぢやない。だから、僕最初に過去の事件と斷つて置いたぢやないか。君、まあ落着き給へ。」

「あ、どうだつたかね。」と少し安堵して、

「して其は何らいな事件だね。」

「君は全く可哀想だよ。運が悪かつたのだよ。少しでも身許を調べてから話を持込めば、此頃のやうな心配も生じて来る筈はなかつただけれど……僕の父も其を知らないこともなかつたらうと思ふが、何うも注意が及ばなかつたものと思はれぬ。」と怪しい光を帯びた眼を定めて、

濱子——過去の事件

七五

「此松波事件と僕がいちの君、一時は一家中の大騒ぎとなつたものなんだよ。碎けて云つて仕舞へば、當人が未だ小娘時代の色騒ぎさ。」

「えッ、小娘でゐた時代の。」と日向は餘りの意想外なのに呆れ果て、萎頓した。

「其處には云ふ迄もなく、綿纏した事情といふやうなことがないでもなからう。併しまあ考へて見ても、十六か七位の、家庭といつても比較的嚴重な間にあつて、大事を仕出かしたのだから。君、大膽なものといつてよろしいだらう。」と穩かに語る。日向は頷いて見せた。

「松波と云へば、大層此頃名が弘まつて、めき／＼有達を上げてゐる新歸朝者の、ドクトル謙次郎君よ。松波病院長と来て、此春から患者を取扱つてゐる博士様さね。此松波が其頃は、小間田家に一口に云へば、まあ書生だが、書生よりは少し待遇の違つた、つまり掛人ですな、掛人となつて醫科大學の學生となつてゐた頃のことなんだが、何うした機女にか、間違つた考へを起こしたのと思ひ給へ、子爵家では平常勉強はするし、學業の成績も真好なものだから、一も二も松波々々と云つて、子爵にも夫人にも愛せられて、濱子様とは兄妹のやうにして、散歩にも一緒、御飯も一緒と、萬事さう云つたやうな具合で何方からも親密なものだつたとさ。まさかと思ふから、其を監督するではなし、したゞ儘のことを

濱子——過去の事件

七六

さしてあつたら、其が大變になつてたんだもの

辰巳とか云つて、今も家扶でゐるでせう。もう五十幾歳と云つてる癖に、元氣の可いことばかり云つてるあの辰巳が、二人の關係を嗅出して眞面目な男だから、驚いて奥に通じたのです。君、驚くまいことか、子爵は勿論だが、夫人の如きは青くなつて仕舞つて、茫乎して仕舞はれたとかであつたが、漸く辰巳の取計らひで、其限り松波の世話をしないといふことになつて、出入を禁じたといふのが、ま此事件の梗概なのです。いや、其以上の事實は僕は知らん。知つても興味のある話ではないのだから、訊いてくれ給ふな。要するに、この位大膽の性質が、小供の頃からしてあつたものと分れば其で可いちやないか。」小管が虚實を取混へての勝手な話を、日向は熱心に耳を傾けてはゐたが半頃から少し厭氣がさして、不快な思ひが胸に漲るやうであつた。

「いや、何うも不快なことばかり、君は能く話すね、僕はもう平氣でそれを聴くには堪へん。勿論、君、其は事實に相違ないでせうねえ。」

「僕の語つた所だけについては、保證します。其頃から僕もちよ／＼遊びに行つたこともあるのだもの。」

濱子——過去の事件

七七

「銀林の件に就いて、多少の参考にもなるのだから、僕は初めて聞いたことなのだが、君を信じて此お話も信じませう。」と何時か平然として、

「で、濱子の處置に就いては、僕は最早何事も云つたりはしないので、直ちに断乎たる考へを實行しやうと思ふのだが、君何うだね。僕は未だ此事は両親には何とも話してないのだが、君の御所存を父の前で述べてはくれまいか。頑固なことを常に云つてるから、却つて僕を疑つたりしちや困るのだから。其に君、何うしたものか、母は大層濱子の氣立を舉げてゐたりするのだもの。」と云つたが、頗る當惑さうな顔をして、

「親が何と云つたつて、一家の不面目になることを懸つても過ごされないのでから、何うしても断行しやうとは思ふが、一應は父にも話さないでね。」

「其が當然の手續なんですかね。」と小管も勿體らしいことを云ふ。組んだ腕をほどきながら、

「日向君、君は勿論充分の御覺悟があるでせうな。」

「それは君、繰返す迄もないことです。」と怪訝な顔付。

「それなら、勿論僕も、君の阿父様に僕一個の御意見だけは申上げるとせう。併し今日云つて今日直ぐにはお肯入にはなりません。すると君、此事はさたくとした大問題となつ

濱子——過去の事件

七八

て、随分迷惑が八方に掛りはしないか不知。」と何だか考へてゐる。

「だつて父に相談もしないで、濱子を去るといふことも出来にくいぢやないか。」と日向は眉を蹙めた。小管は此處ぞと云はぬばかりに、胸を叩いて、密々辭になりながら、

「君僕の考へは其處は又別なんだよ。」と椅子を進めた。

森蔭の美術家

九

蹠蹠として日向男爵家を辭した青年美術家小山田清雄は、門を出ると帽子眼深に、玉羅紗の外套をひしと引纏つて、塵埃の中を成るべく淋しい途をくんと静かに歩いたが、何か深く物思ひに頭を搔廻されてゐるかのやうで、千駄木林町から根柢を見込んだ樺林の、冷たい夕風に騒がしい中の、濕っぽい小徑の二條になつた處迄来ると、不圖立停まつて、行手を案じたのである。

「如何にも銀林の爲めにも、其儘で冤罪に座すといふやうでは餘りつまらない。如何に罪惡が今の社會に道義の名の下に多く働かれてゐるからつて、誠實に富んだ銀林が、何うして

濱子——森蔭の美術家

七九

こんな罪惡を犯かし得るものか。況んや銀林は名こそ現はれてはゐないけれども、兎に角腕のある美術家だ。道に忠實なる藝術家ぢやないか。いや、こんな濡衣を着せられたのは、全く彼奴の構へて爲めにせうと云振らしたものに相違ない。今日だつて何うも疑ひを抜んで見たからか知らぬが、陰險なる様子が、ちよいくと正直さうな其顔の中から見えたやうだ。以前から何うもさうらしく思つて氣をつけてゐて、少し日向にも説いて見やうと思案して、行つて見れば、小菅め、ちやんと来てをるといふのぢやないか。人を陥罪して何ういふ目的なのか知らぬが、苟も我輩の信任する銀林に迄、累ひを及ぼさうとするからには、黙つて引込んでゐられん譯だ。日向ももう奴の術中に陥つてゐるやうだが、あゝ充分僕の忠告をして見る好い機會はないものかなあ。」と醒めかけた酔ひに俄かに身を顛しがなら、「さうだ、何は兎まれ、今一應銀林に逢つて、其考へを糺して置かねばならぬのだ。僕に嘘を云ひ得る銀林ぢやないから、其證言を以て日向に説いたなら、少しは耳を傾けてくれるだらう。下らない義侠心のやうだけれども、能く考へれば決してさうぢやない。第一これから名聲を博しやうとする銀林を救ひ、日向をして後悔するやうなことがないやうに、友道の親切をつくすのだから。其に可哀想なのは罪も咎もない奥様ぢやないか。これ迄に、自分

と交際があつたといふ人ぢやないか。日向夫人として何處ぞと缺點があるのでもないのに、こんな濡衣を着せられて、眞人の不明がある爲めに、人生の云はうやうなき苦味を嘗めさせられてるといふのは、實に氣の毒千萬だ。いや、これは僕たる者が——日向君の親友としての僕たる者が、出来るだけの力をつくして、救出してやらねばならぬ。さうだ、此上は銀林に事實を徹して、日向を説くばかりだ。何だ、小菅が何だ。今に見てゐる。」と未だ少しは酒の名残でもあらう、小山田は憤然として獨語した。而して左手の坂をすたくと駈下るやうにして、根津神社の池のほとりを無言で抜けて、谷中坂助の方へ急いだのである。場末ではあるが、此時煌然として星の如くひらめく左右の軒の街燈に、彼は薄ら輝くやうな姿を映してゐたが、踏み歩調は如何にも力強く、早く、傍目も振らずやがて上野山下の霧に裏された。陰々として迫まるが如き人通り稀なる森影を直進して、とある岐路に出て、更に左方に折れたが、殿めし寺院の門に突當たると、横の潜門を僅かに押し、さうと開くの慌て、中に飛込んだのである。

「君、ゐるかね、お、銀林君。」と御堂の前を横つて綺麗に掃除が行届いた、廣々とした庭を無遠慮に通つて、納屋の方へ進んで、其處の小窓に豆の如き一燈のちらちらと障子に映る

のを見て、軒下に立んだ時、斯う呼んだのである。
室内からはこれに應ずる聲がしなす。

「おないのかしら。」と小山田は呟きながら、一方の手を差伸べて、窓に縋りながら障子の破れから室内を窺いた。人の氣勢もしないのである。

「銀林君、々々々。」と重ねて呼んで見た。

「何様ですか。」と清しい涼とした聲で、恰も反對の釣のやうになつた、西向きの燈火のない窓を、さつと開けて、白い顔を出して夕闇を透かした者がある。

「やめ、銀林ぢやないか。小山田だく。」とこれも透し見をしなから、二三歩進みさうに歩寄ると、

「小山田さんでしたか、何うもこれは。」と顔を引込めたが、廊下をばたくと駈擦る音がして、件の少年の顔は、再び横手の上框の薄暗い戸に現はれたが、手には大事さうに洋燈を抱へてゐた。

今、食事をやつてゐた所です。何様だかと思ひましてね、何うも失禮致しました。さあ、どうぞ。」

先きに立つて導かる、儘、障子の破れから窺いた彼の六疊の室に通つたが、其處には繪具皿やら、刷毛やら、唐紙の片やら、新聞やら、其から壁には絹を張つた框が二三枚立掛けて、一開張の小机の上にてこそ光鈍い小洋燈は置かれてある。小山田はきよらくやつて見廻したが、進められた古びた更紗形の座蒲團に蹲まりながら、

「何うだね、此頃は少しは仕事が出来るのかね。」

少年は其處等に散らばつたのを片寄せながら、小山田の顔を仰見て笑出して、

「いゝえ、も些少も出来ません。」と頭を掻く。

「それは不可ん。一年の好時期をぬらくらやつてちや、いけないぢやないか。」と云つて、

「先月廻して置いたのは出来たらう。横額にするよと云つて注文されたのは。」

「あれだけはやつと仕上げ、先方へ持つて行きましたが——。」と云流むと、

「なに、金を未だくれんと云ふのだらう。は、いゝ。」と愉快さうに笑つた。

「そんなこつちや御座いませぬ。大層御馳走になりましたよ。而してね、奥様が大層譽めましてねえ、此度は又あんなものを。」と壁に立掛けた大きな櫃を指して、少し下つて蹲まりながら、

「先程迄かゝつて辛而張りましたのです。下繪は別に出來てをりますですが、明日からでも氣分が向いたらば、取掛らうと存じます。」

「さうかね、其は意外とする所だつた。奥様が君のを譽めたのだね、少し給心でもあると見える。松波といふ男は、大層洋畫が好きとやらで、日本風の書齋に提げるの迄、洋畫をその注文で僕に持つて來たのだが、僕の方で其は餘り面白くない、先づさ、違棚があつて、奥様の書齋とか云ふから亂れ箱とか何とか云ふやうなものもあらう、書架には源氏や草紙の大和綴が置かれてある、所で額だけが色彩の鮮かな洋畫がかゝけてあると思ひ給へ。室内の趣味の統一といふものは、全く破壊されて仕舞ふぢやないか。其で僕は松波といふ人は直接には知らないが、友人で親密な者があるから、自分が信用する日本畫家に依頼を移さうと話して、ま、君の方へ廻したといふものだが、奥様の氣に入つたとあつては、僕も何だか安心が出來たやうな氣がするね。」

「其であつたのことも、お噂をなすつて御座いました。」

「お、さうから、何と云つてゐた。」

「あなたにお頼み申したといふのも、去年の展覽會に御出品の波瀾の畫が同家へ買取られて

あつたとかで、其が大層いゝものだから、つまり何をしたらつて。」

「さうだつたかしら。賣れたは直ぐ賣れたと記憶してゐるが、あそこへ行つてるとは思はなかつたね。」と云つたが、

「君、食事中だと云つたらう。今夜はね、少し收まつてお話したいと思つて來たのだから、何れゆつくりお邪魔をします。何も遠慮するには及ばないよ。さうさへ行つて食つて來給へ。何、僕はもう濟んだ、早く食つて來給へ。銀林。」とそれと氣が着いて、注意をしたが、銀林は尻込をしたやうに、

「いえ、まだなんですから。」と云譯のやうなことをして控へてゐる。

小山田は少年を屹と見返つて、

「何だ、そんな他人行儀なことはないぢやないかね、遠慮には及ばんよ。食つて來給へ。僕は結構、茶も何も入つたものぢやない。」と強ひて云ふ。

もたすのも却つて失禮だと考へたか、銀林は、

「それでは急遽失禮いたします。」と町噺に辭義をして座を退した。

此銀林といふ男は、親も兄弟もない不幸なる身の上であるが、幼なじ頃に村野派の畫家と

して、冷ねく上流社會に勢力を有してゐた小山田清雄の父なる人の、在世の頃救はれて、其家に寄寓することゝなつたので、不思議に畫才を有してゐた所からして、其特質を發揮して、一かどの畫家にするには出来ぬでもなからうと頼母しく思はれて、小山田の父が我子のやうに愛して、出来るだけの積古を積ましたのである。其後此恩人は亡き數に入り、小山田は何か感ずる所があつて、日本畫より儼然洋畫の研究に移つて仕舞つたので、銀林も痛く失望して不遇を嘆いたが、小山田が好意に依つて、某大家の門下生として通ふこととなり、美術學校の撰科に入つて、一通りの禮義をも聞き、次第に上達する其腕を、更に獨創の天才に依つて、研上げたので、これならば今一息で一本立にして、毫も耻かしくないと迄なつたのは、二三年前のこと、銀林が僅かに丁年に達した頃であつた。然るに小山田は家事の都合があつて、何分銀林を家に置いて、相當の學費を給して置くことが出来なくなつたので、折角これ迄丹精を凝らして仕上げた者を、不人情に打放すといふことも惜しいとは思つたが、曰ひことを得ず、自分の親友なる例の日向輝雄に相談すると、其はお易い御用とあつて、明日からでも銀林を引取つて、當分一本立の美術家としてやつて行けるといふ見込が小山田につく其迄は、客分として取扱はうといふ話なので、内實を銀

漢子——森隆の美術家 八七

林に話して、日向家へ移らしめた。銀林は小山田の好意を深く感謝して、其よりは愈熱心に勉強したのであるが、其より半歳ばかりして、日向輝雄と小町田子爵の令嬢濱子との結婚式が舉行せられたのである。日向も銀林が誠實と熱心とに深く動かされて、待遇も日を追うて厚きに赴き、新夫人濱子にも引合はして、自分が美術家を保護することの出来るのを、此上もない光榮のやうに語るであつた。夫人も銀林が年少ながら伶俐活潑で、巨眼隆鼻、而も愛すべき其風采を珍らしかつて、眞人にも劣らず珍重して、日に一度、必ず銀林の爲めに居室と定められたる離座敷の一端を音訪れて、手して茶菓を與ふといふ位であつた。で、夫人が親しく銀林が身の上のことを聞き知るに及んでは、恰も我が肉身にでも對するかの如くに思つて、深き同情を送つたので、其事が端なく奸邪なる小菅龍馬の乘する所となつて、不思議にも怪しき命運の爲めに、夫人濱子と、少年美術家の今の悲慘なる境遇を醸すに到つたのである。

銀林は直ちに日向家の寄寓を謝絶せられた。能く銀林の精神と意氣とを呑込んでゐる小山田清雄が、日向に向つて多少辯ずる所があつたにも係らず、痛くも激せられた日向は、此小山田の辯解があつたために、更に忿恚の情を買つた。小山田は今少し時間を経過した

ならばとの、穩當なる考へを持つてゐたので、さらばと銀林を引取つて、此上野の寺院の一室を借りて住はせることにしたのである。

銀林は重ねて自分の爲めに迷惑をのみ掛けられる小山田清雄を、今は氣の毒にもなつて来て、せめて自分は自分一個を生計を營みたいとの念が心頭に湧くがやうなので、これを小山田に語ると、其位の意氣込がなくてはならぬと大に同感してくれて、もう思切つて仕事をやれ、其餘のことは此小山田が凡て引受けるといふやうな話で、銀林も其氣になり、爾來上野の森蔭に氣を養ひ、思ひを練つて、質素なる生活を續けてゐる。

日向夫人清子はといふと、云つて聞かせねば、銀林と自分とが疑はれてゐやうとは覺ても知らずゐる中、譯もなく冷酷に取扱はれて、其よりは真人類雄とは、来る日も背合せの、悲しく暮らしてゐたのであるが、遂には病氣を惹出して、挫乎となつて倒れたので、百日の餘も床にまつて、少し輕快になつたとやらで、自から真人に云出して、里の小町田子餘家へ立歸ることになつた。其より、涼風の肌にも心地好き頭より、醫師の注意に依つて、稻村ヶ崎の別荘に今も閑かに起臥其意に任かしてゐる。

斯くし斯くある中に、小菅龍馬の悪計術謀、一々其圖に當たつて、最初は根も葉もなき豆

の如き事件は、漸く枝を張り根を伸ばして、取止もなき一の統説は、今は動かすべからざる事實の如くに醜認せらるゝこととなつた。憂思、愁情、悲嘆といふが如き抽象名詞の精華は、あらゆる關係者の胸に蔓り、頭を搔亂してゐるのである。

銀林が食事へと立つて仄暗き洋燈の火影に、體も顔もす、小山田が或物と思ひつゞけてゐると、此寺の老婆であらう、胡麻鹽頭の恐ろしく髪毛の薄さ、顔の長さ、皺くちやなのが恭しく茶を運んで来て、茶托を進めながら、古びた汲子を差出して、

「大層お寒くなりましたして御座います。」と改まつて挨拶をする。

「朝晩は大層寒くなつたね。」と小山田は同じことを云ひ、

「いろ／＼と銀林が世話になることであらう、これから、ま宜敷く頼みますよ。」と氣體にこれが恐ろしく老婆の氣に入つたのであらう。齒の抜けた齒齦を出して、仰山らしく笑ひながら、恐悅顔にゆすり出て、

「いえ、もう、決してお世話申すなぞと申しますことは出来ませんので御座いますけれど、あのお方は、本當にあなたを優しくおつしやいますして、お召物の縫ひも仰有らずに召してらつしやいますのですから、申上げますると便當がつてからつしやいますけれど

やりますこと。」

「ほ、ほ、ほ。お老婆さん仕方がない堪忍するさ。」

「ほ、ほ、ほ。ま、本當に私は又本當のことかと思ひまして御座いますよ。ほ、ほ、ほ。」とこれも可笑しくなつて来て、覆へらうとする。

小山田は今の規合、こんな氣樂な眞似をしてゐられるのではなかつたか、少しばかり氣が粉れ出したのである。

「何うも失禮致しました。」と入つて来たのは銀林である。

老婆は座を避けながら、

「大變なところの御座いますよ。あゝ本當に可笑しい、腸がよれるやうなこと。旦那様はお人がお悪くしてゐらうしやしませんからな。」

「さうか。」と銀林は薄着してゐる。

老婆は其から暫らく話してゐたが、果ては取着がなくなつて、そつと湯を沸かした立つたのである。

+

進出す鐘が上野の森一杯に殷々として尾を曳いたかのやうに響き渡つて、三つ四つと數へて行けば、もう九時になる。月のない夜の風ばかりが、をり／＼小窓を音防れて、其都度洋燈の火を、ちら／＼とさするのみで、他には遠吠の犬の聲もせず、天井に鼠ががさ／＼とやる。夜氣の身を窺つてゐらう、俄かにぞく／＼とするばかりの、消えかゝつた火鉢の灰を掻きまきながら、膝突寄せて語るのは、小山田と銀林とである。

空は雲の重なり合つて、時雨を催してゐる。

小山田は少し激しても見える銀林を、取鏡めながら、尊々として説くのであつた。

「熱しても事は運ばぬ。僕はね、人が何と云はうとも、銀林、君のいふことを疑ふことは出来ない。又君は眞心を欺いて迄、僕に冤罪を憑へるやうな身屈もしまいから。」

銀林は輝ける大きい眼を漂ふやうにして、やがて小山田の顔に振瀧きながら、

「僕の眞心が如何に淋涼してゐたからつて、又たとへば勝感せられたからつて、そんな不道徳なことが出来ますものか。僕はあなたと、あなたの父上に、一方ならぬ御厄介になつて今日が日迄も生命を繋いで来てゐますから、あなたに迄不善を働いて、其を隠さうといふそんな馬鹿な考へは持たないのです。あなたは僕の爲めには、唯一人の恩人です。又男爵

へは長らくの間、御世話になつてゐて、常に感激致してをりましたのですもの。あなたへ對しても、男爵へ對しても、恩を仇で返すと云ふことが、何うして出来ませうか。僕は今も尚そんなことを云振らして、男爵の心を動かさうとしてゐる悪魔があると聽いては、實に憤慨に堪へません。よしや僕は甘んじて其不義の名の下に埋もれ果てゝもをりませうか。夫人をどうして陥れることは、平生の御好意に對しても濟みません。僕は斷じて——と云繼がうとして咽上げて、如何にも口惜しうに、拳を握り固めて齒噛をしたが、はらはらとして数滴の涙を膝に落した。

「だから僕は君の潔白を信じて、君が一旦着せられた冤罪をも滌ぎ、又夫人をも悲境から救出さうと思つてゐるのだ。僕の云ふことを能く聽き給へ。君、餘り熱しないで落着き給へよ。」と小山田は男々しく云つて、

「それで何だね、夫人が夜、君の室へやつて來られて、遅く迄話したことがあるといふのだな。」

「さうですすすけれども、遅くと云つたつて、九時半頃にはお歸りになりました。」と氣を鎮めて、

「僕は其夜のことか誤解せられて、男爵の怒りにも逢つたのだらうと、今思へば思はれぬこともないのですが、僕が其夜語つたことは、別にこれといふことは御座いませんでしたから。」

「其はもう分つてる。君を僕が疑つて、こんな問を發してゐるのぢやないのだから、其氣で云つてくれなくつては困る。これも其も僕が日向君へ辯解の材料に供するのだと思ひ給へ。」

「は。S。」と云つて、
「夫人は僕が不幸の身分であると、男爵に聽いてゐられたから、其夜もお話せよと仰有つたことは、僕の身の上のことなので、父母のまいこと、兄弟を持たないこと、其は何うしてなぞと其から其へと話が移つて、思はず時も過ぎたのですが、夫人は其を聽いて痛く御同感下をさまして、僕の爲めに泣いて下さりました。其から御自身にも母上のおられぬこと仰有つて、母一人ゐなくても、術ないこと、辛いことばかり多い世の中なのに、両親も兄弟もゐない時には、どんなに淋しいだらうと仰有つてね、其でお泣きになりました。僕も覺えず泣いてゐたのですが、話はそれきりで、僕は後に到つてこんなことにならうとは思はると思つては見ませんでしたのです。」

其からも毎日のやうにあり、御座いましたけれども、其は皆晝間で御座います。其後は何時もこれから自分を姉とも母とも思つて、本當の美術家になるやうにつて、浸々仰有つて、其都度意氣地がなくて僕は泣かせられました。けれども、僕は可成依頼心を起してはならぬと考へましたので、夫人にはお親しくも致しませんでした。いえ、夫人は種々僕の病氣の時分にも、御心配は下さりましたのです。」と云畢つて口を噤じと、小山田は「や、領して聽いてゐたが、

「事實はそれだけなのか、君。」

「どうです——別に夫人一個に關して種々のお話は承つてをりますけれども、其は申上げても何ですから。」と銀林は力漣えたやうな口振。

「夫人一個に關しての話といふのかね。どうだね。」と少時考へてゐたが、

「僕にも少しは知つたことがある。して、君は或日夫人と一緒に外出したと小菅は云つてをるのだが。」

「どうです、外出したことはありません。其は夫人の御用なのですよ。」と口早に述べる。

「それにお疑ひがあるならば、申上げて宜敷いのですが、夫人は其時決して人に話しては

下さるなと仰有つて、僕はそれを受合つてをるのですか。」

「けれども、君、其事が彼等の云草にせられてゐて見れば、僕も辯解するに足るだけのことは承知して置かねばならぬと思ふ。夫人の悲境を回す其爲めに、僕にだけ話し給へ。」と迫まられて、銀林は少し色を動かししたが、直ぐに心を決して、

「止むを得ませんから申上げませう。夫人の御迷惑になるやうなことがあるかも知れませんが、

「夫人には本當の母親がゐられぬといふことを聽いてをりますので、其時は氣が着きませんでしたけれども、後では若しかあれが母親ではなかつたらうかと 思つたのです。夫人が何日であつたか、朝早く僕の室へ來られて、仰有るには、實は極内密で慥うした人と逢はねばならぬのだが、手紙では何うも困ることがあるから、僕に行つて何處ぞで逢へるやうな都合にしてはくれまいかとのことで御座いました。其で僕は何事とも氣が着かないで、お受をして、名刺を持たせられてまゐりましたが、先方でも大層喫驚致しました様子で、種々と夫人のことを聽いてくれました。而して今日でも可いから來てくれるやうにとの御返事で御座いましたから、歸つてどう申上げると、直ぐ其午後に僕を案内にしておいでに

なりましたのです。先方は上品な四十年輩の方と存じました。何をお話になつたか、其等は次の間にをりましたから存じませんでしたけれどもね。大層しんみりとしてゐらつしやつたやうに存じますが。——其後は手紙を持たせられて二三次お使ひにまゐりましたか、どんな身分の人であるか、尤も氣も止めませんかつたので、其邊のことは分りませんですが。」

「丁度僕の考へてゐたこと、符貼を合はせるやうなんだ。銀林、其は屹度夫人の阿母様なんだ。」

「僕もさうかと思つてをりますよ、只今では。」

「夫人の氣質とか何とか、固より僕がそんな委細に亘つて知つてゐる筈もないのだが、僕は此度のことがあつて、誠にお氣の毒に感じたことがある。人の身許を穿鑿するといふやうなことは、好もしくないが、銀林、君の不名譽を瀧がうと思つて、實は出来るだけ、夫人のことも君のことも、是迄に調べて置いたのだよ。小菅は僕も友達ではあるが、甚だ面白くない人物であるとは、豫て知つてゐた。其で第一其云ふことを信用もしなかつたが、ま事は意外に始まつて意外に終るといふのが多いからと思つてね、一々出来るだけ力をつ

くしたのだが、銀林、夫人も全く可哀想な人なんだよ。」と小山田は熱心に云つて、

「これだけ分明してをれば、僕は君の爲め、日向の爲めにも、又夫人の爲めにも、必らず小菅が面皮を掻いて見せる。何だ、今日などは小菅な美術家を冷笑しをつちやないか。」

「夫人は今何うしてお暮らしてせう。」と銀林は氣遣はしうに問ひかけた。

「いや、其は僕は知らん。何處かの別荘にゐるでと今日小菅は云つてをつたが……。」と言葉を落したやうにいき。

銀林は寒さうにして、膝を掻合はして、頭を垂れてゐた。小山田はことごとくと微かに齒を噛んで、思ひに洗んだ。二人が話の途絶えた時、表の木立に一しきり風の騒いだか、雨にもならなかつたか、落葉がはらはらとして屋根に掛るやう。夜は次第に更けて、吐く呼吸の白く、虹のやうに凝つて、時を刻む彼方の時計の音ばかりが、冴えて聞こえる。寒さは身の毛立つかと思はれる。

心外とも、不思議とも、何とも早や云ひやうのな此度の云掛りに、銀林はつくづくと思つては、不快やら無念やら、胸を刺さるゝやうにも覺えるのであつた。小山田が何處迄も自分を信じてくれて、親切にもこれ程氣にかけてくれるのを思つては、感涙に咽ぶばかり

であるが、同時に又よしなき疑ひをかけられて、遂に味氣なく世を退いて、別荘へ日を透られる夫人を思遣れば、氣の毒やら氣遣はれるやらで、切なくてならぬ。あの優しい、同情に富んだ、自分のたよりないのを哀れに思つて自分を姉とも母とも思つてくれ、世の中の不幸といふは、誰にでもあるけれども、親や兄弟がなくて、慰めて呉れる者のないばかり悲しいことがあらうかと云つて、泣いて下された其人は、自分が日向家に寄寓したばかりに、奇禍を買つてぬられるのではないかと考へては、銀林は藝術にたづさはれる多くの人に有勝の、物に用せぬ、極めて自重心に富んだ其平生の氣質にも似ず、心から弱くく、自からの孤弱を感じて、坐ろに熱涙の頬を流るゝばかりであつた。で小山田に向つて、

「小山田さん、僕は此場合に臨んで、敢て自分の名譽とか何とかを左程深くは惜しむには足らんと考へてはをりますすが、せめて夫人だけの不名譽は取除いて上げねばならぬと思ひましてね、實はこれ迄も人知れず心を痛めてゐたのですが、僕のやうな一介の書生では、其も力には及びませんですしね、人は不思議の運命に弄ばれるものだ、僕は本當にもう涙が出てまゐりますことなぞが御座いました。」と思ひせまつて心から云つた。聴くと、

「其は全くさうに違ひない。けれどもね、此度のやうなことは災禍と諦めるより外にはあ

るまい。詰まらぬことにかまけてゐて、君の藝術に途累ひを及ぼしては不可ないよ。」と能く其意を傾して、小山田が云つた。

「いえ、決してそんな不心得は致しません。」と努めて云つたのであるが、顔を上げて振舞はらうな涙の目を威印したのである。

「銀林、これといふのも、妻を信することの出来ない日向に罪はあるが、小管のやうな悪物に騙されたのだと思へば、可哀想にもなるではないか。僕は只友義を庇とも心得ぬ小管ばかりが、憎いのだよ。」と口惜しげうたして、

「餘り心配しなさいね、君は勉強したが可い。君の心は僕が信じてゐる。」

「僕を能く知つて下さるのはあなたばかりです。」と銀林は覺えず叩頭したのであつた。

「寒い、銀林、火でも起こさうぢやないか。」と氣を換へて、火鉢を抱くやうにして、

「全くだよ、氣を落してはならぬ。心配し給ふな。」と故意と元氣よく云つたので、

「は。」「と云つたが、力無げにして立上つた。

又風の音がする。

惡魔

昔から腹黒い惡黨と呼ばれるものの性格は、多くは陰險、譎作、奸術に長けてゐるのは勿論のことであるが、更に一段の大惡に到つては、常に事物の陰に廻つて、表面は實體らしい顔をして、着々思ふ儘の惡事を取運ふのである。必らずしも世の中の親がさう生みつけて、件の惡黨が生ずるのではない。當然の人間は神様に其生命を授かるのであるが、彼等は惡魔に魂ひを入れられるのだとでも説かねば、迎も解釋の出来ないのは、此の洒々たる才子、小管靜馬が見掛に依らない大惡人である一事である。小管の父は信用ある實業家として、社會に洽なく知られてゐる。母は又實着なる、眞面目な、而して涙脆い性質で、小管が何うして此立派な兩親の間に子となつて、驚くべき惡魔の所業を喜ぶかは、殆ど推測の外と云つても差支はない。

小管は人を陥れ、欺きたばかりといふが如きことは、決して不徳ではない、これは欺く者よりも、欺かれる者が餘程惡いので、一言に云つて仕舞へば智慧が足りないと云ふのである。

る。人が生れてから以來成人となる迄の、長い間に於ける凡ての經驗と、學得した所のものとは、共に自分を大きくして、人に欺かれぬやうに豫備となるべきものであつて、下らない名譽とか、人情とかの爲めに、自分の思ふ所のものを枉げしむるべきものではないと考へてゐた。人を阻ふことは、而白いことである。人に涙を絞らすことは、愉快なことだと、悠ういふやうに裏から事物を考へるので、自分が學問も、智識も、初めから此道理ある(小管に云はせれば)哲學?を實現せん爲めに、なされたに過ぎぬとは、小管が處世上の信仰となつてゐた。

日向輝雄と夫人濱子との間を裂いて、こゝに而白い悲劇を演出せしむることは、どんな男子の快心事であらう。互ひに愛ひ、悲み、悶え、苦しむのを高臺に立つて見物するのであるから、こんな愉快なことはない。お氣の毒だが、日向も濱子も少しばかり智慧が足りないので、此始末だと云つたやうな次第で、小管靜馬は一見眞率なる其態度と、初々しい物越と、而して穩和なる言葉附、其に懐つてい目と、愛嬌ある口許とを以てして、毒惡を逞うせんと目論見てゐるのである。

勿論小管は自身の外に、人を使るといふことではない。心を打開けるなどとは夢にも思はぬ。

されば父母にも兄弟にも、乃至朋友知己に、自己の心事を披いて見せることは決してしなかつた。父母の信用も、小町田家の信用も、其友日向輝雄の信用も、猫の如く優しく鳩の如く愛らしき態度、言語を以て、容易に博し得たのである。

小菅が斯く思ひ、斯くしつゝ、自分一人が人間世界の舞臺に踊る役者の如くに感じて、愈々悪事の段取を進めつゝある間に、時として殆ど無意識ではあるが、闇にひらめく線香花火の如くに、其心中にちらりと輝くものを認めて、悸乎とする事もあつた。併し其は眞の瞬間で、次の瞬間には、無理にもそのひらめく火を撲滅したのであつた。而して何時でも、「馬鹿な。」

と獨語をして、自分で自分の愚さを冷笑するのであつた。

暗い小菅が胸に、時として微かにひらめく其火は何であつたらうか。

固より小菅が何時迄其を覚えてもゐまい。けれども小菅が未だ學生として、秀才の聞こえ高かつた時分に、父なる人の關係を以て、屢々小町田子爵家に入入してゐたので、其頃の世に馴れない少年の血氣に、前後の考へをもなしに、小菅は濱子に多少の想思を運んだことがあつた。其頃も自から威嚴を損せんことを懼れて、常に「馬鹿な」と自身を嘲るのであつた。

たが、其心の不安は亦著しいもので、慄慄、煩悩は身軀らの胸を燃盡くさんとするばかりであつた。而して自分の望みが逆も得らるべきものでないと思察しては、恰も其事を忘れもしたかのやうに、冷やかになつて、濱子が日向輝雄の妻と定まつても、美くしい丸髻姿の新夫人の顔を見て、少しも意に介するやうのことはしなかつた。固より小菅が其戀を打出しても、其が濱子の容るゝ所とならなかつたのは、云ふ迄もないことであるが、小菅が我身を下さんことを遠きに慮つて、假令千萬の辛い思ひは重ねたにしろ、其を只一人の胸裡に納めて、知らぬ顔をしてゐたといふものは、如何に小菅が用心深いかを知るに足るのである。微かに胸にひらめく火とは、此外のものではあるまい。

小菅が濱子の上になぞらへ事をして、日向の心を晦ましたのが、此後なき片戀をした其怨みに報いたのであるか何うかは知らぬが、小菅自身は少くとも決して左様な淺蕪な理由があるからではないと信じてゐる。小菅は單に自分のなすべきことをしたといふ而已で、他に理由を求めやうとはしないのである。繰返す迄もなく、悪事をするは、人のなすべき正當の途であつて、悪事を働かれるのは、智慧が足りなからである。日向の心を漸く動かして得て、断然たる離縁の處置をさせることに迄事が運んで、偕て離縁

といふのは、一應父母の承認を経てからでなくてはと日向に云出されて、自分が其父に面會すると云つて置きながら、何か其處には別に考案があると密々話に移つたのは、先づ日向の獨斷で離縁の請求をせよ、其から後ならば父母も已むを得ないで、同意する。同意さへすれば最早問題は日向の問題ではなくて、日向家と小町田家との問題となつて首尾好く男子の面目をそぐことが出来やうと云ふのであつた。日向は其を聽いて、呆れて、當惑して、種々と前後のことを思惱んでゐると、小管はもどかしさうにして、

「君、此問題は僕、小管静馬の直接の問題ではないんだよ。君が當然處置を加ふべき問題ぢやないかね。何もそんなに今更躊躇するにも當たらぬと思ふね、ぐずぐずしてゐると、又何か邪魔になるものが出て来ないとも限らないのだから。」と口を添へた。

「其は云はなくつても知つてるよ。併し此位重大の問題を決するのには、後で両親に何故一言云はなかつたと小言を頂戴せんものぢやない。其だから成るべく両親にも理由を云つてきかして、其上でも避くはないと思ふのだが。」といふ。其を奪ふやうにして、

「君は何うも日向家の當主ともあるべき身で以て、そんな因循な思想を持つてゐるから困る。」と頭をなしにやつて置いて、笑ひながら、

「其は併し子の情として無理もないことなんだね、だけれども、君、能く其間の利害を考究して見給ひな、君が一言云つたばかりで、非常の混雜になつて、ひよつとすると法返しがつかなくなるかも知れないんだ。其に比べれば、先づ處置を加へた上で、賛同を求めれば、多少の御不平はあつたとしても、仕方がないと云ふことになつて、事は早く片付いて仕舞ふだらう、日向君、僕は親友として切に君の果斷を欲するね。」

怒う云つて、日向も痛く心を動かされたものと見えて、竟には小管の云ふが儘に、小管を使者として其翌小町田家に早速ながら離縁のことを申入れたのである。締めくくると心に叫んで、小管は其時側を向いて物凄くにやりと笑つたのである。

小管の心事を早くも概破して、彼の上野の森影に果敢なく暮らしてゐる、少年美術家を音訪れた、義氣に富んだる小山田清雄は、何が何だからつて、事が是程迄に急進しやうとは思つても見なかつた。又日頃胸を痛んで、濱子を哀れに思ふよりも、第一小町田家の家名を潰さんことを、懼々として懼れた子爵夫人は固より、一家の者誰かこの事の、斯ばかり早急に破裂して仕舞はうと思つたものがあらう。更に稻村ヶ崎の別荘に病ひを養ひつゝ、湖畔、柔橋、將た夢を騒がす松の響きに、物悲しく、淋しく、哀れに、其日を送る濱子が、

譬へ左右の者の耳には端なく漏れて、童子が思ひを掛けぬ誹謗を聞知つてゐたものがあつたればとて、欠にも自からには知らしてくれぬのに、何とて想像もつくことであらうぞ。菅廬空にあつて、からくとも其勝利を喜ぶ悪魔の笑ひが、誤つて小菅静馬の口邊に漏るゝばかりであつたが――。

彼の母

十二

「阿母様はそんなこと仰有るけれども、僕の方でこれが何うなるつて云ふことはないんですもの。」とほとく困り入つてゐるのは、小菅静馬である。

「お前はそんなことだと仰有るけどもね、お前、第一阿父様が其ではどんなお困りだか分りませんよ。」と母は流石に心配さうな顔をして、

「阿父様が今日は遅くてもお歸りに相違ないのだから、小町田様へ御通知申すのは、其迄お待ちなさい。なんぼ頼まれましたからつて、お前、その位のことをしたつて差支はないぢやないか。本當に大事なことなんだもの。」

「僕は其でも、日向君の煩悶を見てゐるには忍びないんですもの。其はもう誰だつて、自分の愛してる妻がこんな不仕だらを致しましたなら、黙つて半兵衛を極めてられるのですか。僕も最初は阿父様に相談してからでなくつては、何だからつて申しましたんですけれども、日向君は其迄迎も自分は待たれないつて云ふんでせう。其に阿母様、何です、日向君は其罪を赦してやりたいと思つておいでなのやうだつたけれどもねえ、阿父様があんな頑固なものですから、一度思込んで矢も楯もたまらないんですもの、仕方がないぢやありませんか。僕が此大事の使者を引受けねば、日向君は僕に友誼はないぢやないかなんて怒るんです。全くもう可哀想でたまらないですよ。」

「其はお前のお云ひの通りかも知れませんが、餘程考へてからでなくつちや、お前は阿父様にどんなに叱られるか知れませんか。本當に妾も困つて仕舞ひますね。」

「全くですよ。誰かあなた考へないで、こんなことを引受けるものですか。日向君は昨夜直ぐ其足で先方へ申入れてくれるとさへ云つたんです。其を昨夜は阿父様がお歸りかも知れないと思ひましてね、無理に今朝迄延ばしてあるんです。僕は阿母様がそんなに仰有るのを、振切つて出過ぎたことをしたくは、ちつともありませんけれども、日向君が又僕が濱

子様を最負にでもして、友誼を輕蔑にでもするのだと思ひはしないかと考へては、何うも此儘安閑としてはゐられませんか。」

「困つたことですねえ。」と母は顔を深く襟に埋めて、まさか我子が悪事を巧らんで、今も出鱈目を並べて自分を騙してゐるのだとは思ひも寄らないので、前後の利害得失を考へては、何うしたらば可いものかと、一點我子を疑はない所から、氣が心ではないのであつた。

小菅は飽迄正直さうにして、溜息を吐きながら、

「阿母様、本當にこれからはどんなお親しい間柄でも、媒人などを頼まれるものぢやないんですね。こんなことが持上つたりしやうものなら、又どんな心配をしなければならぬかも知れませんか。」

「どうですよ、全くね、人の世話などするものぢやないんだねえ。」と考へて、

「靜馬さんや、お前の仰有ることは無理も無いお話だけれどもねえ、今も云ふ通り、何を申しても、阿父様が大坂からお歸りにならないんだから、お前日向様に對しても濟まないだらうけれども、こゝは阿父様のお歸りになる迄の所を、妾にお預けしておくれでなからうかねえ。」と云つて、

「それだけでなくつちや、全く手法がつかないんだよ。阿父様が媒人に立つてゐながら、おいそれとこんな大事なことを、お前などから持出されては、子爵だつても氣を悪くならぬおね、其處を阿父様なら、何うにでもうまくやつてお除けに遣ひないんだからねえ。其にも一度日向様へもお話をしてみたつても、さう避くはないのだから。」

日向へなど、直談判をされてたまるものかと、小菅は心に思ひながら、眉を寄せて、

「何時迄そんなこと、阿母様は仰有るんだらう。僕だからつて、此事が大切なことつてことは知らないのぢやないんだから、一日でも半日でも、延ばされるものならば延ばすのでさあね。僕も、全くどうも困つて困つて困り抜いで、仕方がなくなつたればこそ、餘儀なく引受けて来たやうなものですから。」

「だから、其處をお前が御不承して下すつて、今日の所だけ靜かにしてゐておくれだと、大變に都合が可いんだよ。」

「そんな無理なこと仰有つても、阿母様、其は逆も駄目。日向君が此度今日お午刻頃には、使者を寄越して問合はせるに違ひないから。」と云切るやうに云つて、

「諄くばかり、阿母様、仰有るものぢやございません。日向君だつて、假令僕だつても、名

辱を散々毀損せられて、其で黙つてられるものぢやありませんわ。」

「それぢや、云ふ迄もなほのこと、當然ぢやあね。阿母様は其を何とも仰有るなとは申しはしません。併しね、餘り血氣に逸つて、こんなことをするのは、好いことではありませんですよ。第一お前さん、濱子様だつてお可哀想ぢやありませんか。」

「それだから阿母様は不可ないんだよ。お可哀想だつて、可哀想なのは、濱子様よりも日向君ぢやありませんか。僕は些少も濱子様をお可哀想とは思ひません。自分で好きな、勝手な真似をして置いて、其で何です。可哀想なことはないぢやありませんか。眞人と云はれる身で、其妻に名譽を汚されて、黙つてゐたら、日向君は立つ瀬がありません。僕も阿母様には不賛成ですわ。」と云募る。

「そんな、お前が眞向になつて、かみく云はなくつてもよございませよ。」と母は叱りつけて置いて、

「何うも困つて仕舞ふ。」と又呖く。

「だつて阿母様、さうぢや御坐しませんか、そんな女子の身で、人の妻となつてから迄、仕舞ひ三昧をするんなら、僕はどしどし攻撃するが可いと思ふ。」

濱子——彼の母

一一三

濱子——彼の母

一一三

「これ、静馬さん、お噂みななら。」と又叱つて、

「お前は無分別に、さう」圖に物を思詰めてありでだけども、阿父様と小町田様のお邸とは、どんな關係があると思ひますね。日向様々々つてお云ひだけども、はづんでこんなことするものではありませんよ。」

小菅も少しはむつとしたが、

「それぢや、阿母様は何うしろと仰有るんです。」と落着いて云ふ。

「何うするも怨うするも、阿父様も今日は必らずお歸りだらうと思はれますからね、其迄はお前の方でじつと押つけて、待つてゐるんです。其よか何うとも仕方はないのだから。」

「そんなことは僕には出来なひんです。」と小菅は突然立上らうとした。母は慌て、引止めながら、

「これが出来なひつて法が何處にありません。静馬さんが思ふ儘のことばかりが、阿父様の體面にかけて出来なひぢやありませんか。」と無理に其處に坐らせて、

「能く考へてね、決して静馬さんを悪くといふのぢやないのだから、阿母様の云ふことも少しは眞面目に聽いて下さいよ。」

「だから、これ位眞面目にしてゐるのぢやありませんか。だつて阿母様は無理ばつかり仰有るから困るんです。」と弱切つたが、到頭母の云ふことには従はなかつた。

何ういつても、理を分けても、肯入れないので、母は怨めしくもあるが、別に小菅が悪事を企てゝぬやうとも思はぬから、其ならばもう止めても仕方はない、此上は呉々も落度のないやうに、注意に注意をして、子爵を初め、夫人の氣を悪くしないやうに、御相談見たやうにでも話したが可い。其上で又父が歸つてから、双方をうまく取做して、事の決着をつけやうと練返ししく、云つて聞かせるのであつた。

小菅は一々御尤もにして拜聴してゐたが、これといふ注意を拂つたのではなかつた。何れも其位のこと此用の中に藏めてある計略の萬分一にも當たることか、而して又母は斯く迄破裂したものを接ぎ合はせやうと夢想してゐるのではあるが、自分は破裂を一層激しくしてこそやらうと思へ、これを元の鞍に無事に納まるやうには如何なことがあつたとしても、するのでないと、心の中では茶にしてゐながら、仰有ることは皆御道理といはぬばかりの顔をして、此部屋を辭したのである。

其から三十分ばかりして、腕車を飛ばして小町田家に向つた。意氣天を衝く小菅が、如何

漢子——彼の母 一一四

に巧みに其術謀を施したかは、想像の及びもつかぬ所である。

運命の戯

十三

松波謙次郎の父は、明治維新の際には勤王黨の若武者として、今の小町田子爵等と共に、頗る幕府黨を惱ました一人である。身は歴々たる旗本の家に生れて、徳川十幾代の恩顧に預つたものであつたが、謙次郎の父は二男であつたから、松波家に養子となつて、長らく蘭人に就いて長崎の客舎に洋學に志ざした所から、萬事進歩主義を取つてゐたので、一度維新の變あるに際してや、一代の人心恟々として各自其去就に迷つてゐる中に、自からは進んで勤王黨の仲間に入り、盛に大義名分を明かにして、推されて一方の首領となり、小町田子爵とは其頃相識することとなつたのである。然るに不幸なることには、此空前の革新が、幾多の人の血を見て猶未だ成就されないのに、謙次郎の父は頓かに行方不明となつた。或は病氣の爲めに倒れて、人も知らぬ野末の一つ家に、醫藥を求むるよすがもなくて、果敢なくなつたと傳へられてゐる。けれども誰も其死を明かに語り得るものでもない。

漢子——運命の戯 一一五

恐らくこれは敵軍の爲めに裁はれたのであらうと推測するものもあつた。爾來星霜の轉移するもの三十。今に及んで依然其埋骨の場所を語り得るものもなく、杳たる其消息を齎す者とてもない。兎に角に其最後の頗る悲惨なるものであつたらうとは、小町田子爵を始め生き残つた他の二三の同志が、今も昔語りをする折り／＼に、首を傾けて語り語る／＼所である。が、其とて一片の憶測たるに過ぎないので、長の年月野を分け山を分けて、其跡は緜ねられたが、これぞといふ一の手掛りもなく、髪の一筋出て來るのでもなかつた。されば其家出の日を命日として、形見ばかりの葬式が行はれて、僅かに口を魂を慰めた位である。で謙二郎と其母とが、慙くて其後の辛苦艱難の數々といふものは、誠に言葉につくされるやうなものでなかつたが、不幸中にも幸なことに、小町田子爵が非運なりし舊友の遺族として、此母子を憫み、遂に自から引取つてくれたので、二人は辛うじて其飢飢を免れ得たのであつた。母子が引取られた其頃は、未だ謙次郎が年齒も行かぬ子供の時代である。

謙次郎は直ぐに學校に入れられる。母には充分の手當が與へられて、此子の成人するのを待つてゐるやうにとのことであつた。謙次郎は學藝衆に勝れて、厘子爵を驚かすこともあ

つたので、一家の覺え殊に目出度く、體の發育も並々の子供のやうでもなかつたので、果ては子爵が秘藏の子のやうに愛せられたのである。厚き其恩義に感じた母は、何時でも此子を膝下に引着けては、

「夢をらく、此御恩をお忘れしてはなりません。今頃は何うなつてゐたことやら分りもしないものを、こんなにお手厚くなすつて下さるのだもの。」と子供に云ふやうにもなく、云つて聽かせるので、謙次郎も幼なき身にも、貧の中に育つたので聽分よく、

「阿母様、僕は必らずえらい者になつて見せますよ。」と元氣好く云つて、母を慰めるのであつた。

又實際に於て、謙次郎も母に勵まされ、子爵に勵まされては、小供にも似ぬ大望を懷いてゐた。一心不亂に勉強はする、才智はある、これがつまらない實を結ぶ素質であらうとは子爵自身何うしても信じてないのであつた。

謙次郎は固より小町田家には掛人たるに過ぎないのであつたが、子爵が我子同様の鐘愛を重ねてゐたので、別に一家の者と起臥寢食擇ぶ所はなかつた。で、令嬢厘子とは無邪氣なる謙次郎には只年下の優しい友達として、兄妹のやうにしてゐたのみであつたが、生長する

につれて、濱子の母たる人が、母親と仰ぐ現在の子爵夫人ではなくて、何處にか他處にゐられると聞知つて、何故ともなしに濱子が氣細く思ふことのあるやうになり、隔ての出来て、急に替つてばかりゐるやうになつてから、謙次郎は實に其慰藉者であり、乳母と等しく只管に身内と頼む濱子には大事の人であつた。殊に慈悲深く、同情に富んだ濱子が、不幸なる謙次郎の身に、我身を思ひ較べて、哀れを催した何時でも、涙に晦れて、

「本當に人は誰でもこんな悲しい者でせうか、謙次郎は何と思つて？」とそつと眼を拭くと、

謙次郎もつまざれた氣に我知らずほろりとして、

「世間が悉皆でめないうでせうけれど。」と云つて、

「ですけども、僕はあなたのお家にこんなお世話になつてゐるのですもの、外に不幸福とは思ひは致しません。」と男々しく云ふので、

「そんなお世話だの何のつてことは御座りませぬわ。だけれども、本當に勉強して下さいよ。」と濱子は少からず自分も勇んで、謙次郎を唯一の勇者の如くに思ふのであつた。

で、謙次郎と濱子とが緩かに慰め合つて、小さき二人が同情の世界を造つて、心淋しい中にも悲しければ共に泣き、嬉しければ共に喜んで、肉親の兄妹も及ばぬ程に心をゆるし合

ひ、慰めつ慰められて、憂ひの中に樂しい日を送つてゐる中に、二人は其誠心を神に誓つて、假りに胸の汚れを思ふことはしないのであつたが、其親しみの念濃かとなるにつれては、世の人の口の傍なう、何人に嘲をせられてか、一家の中で面白からぬこと迄云はるゝやうになつた。子爵自身は二人を堅く信じて、左程のことであらうと思はなかつたのであるが、濱子が其生みの母親を密かに胸に痛むやうになつてから、夫人は自から落着かぬ其様子をのみ見てゐるので、まさか母戀ひの思念とは氣も着かず、怒る思はしい嘲を耳にして、顔の色を變へて、我と騒ぎ立つたのである。で其を宥める子爵を却つて怨めしくも思つて、繰返し繰返し、二人を此儘にして置いて、氣儘を募らせて置いては、爲めにならぬと云ふ所から、竟には謙次郎を母の住居へ引取らせることにして、暫し餘熱の冷める其迄、出入を遠慮するやうにこのことであつた。謙次郎は事の餘りに意外なのに驚いて、少年の容氣に不平不満は山のやうに胸につかへて、飽迄も身の潔白を證據立てやうと迄逸つたのであるが、其事の恩義に報ゆる所以ではないことを、泣いて一人の母に諫められて、無念には思ひながらも、母をもだすことも出来ず、泣寝入となつて其からは一層學事にいそしんだのである。濱子は又口惜しいとはかり思詰めて、泣いたのであるが、無益

と知つて辯解もせず、只其よりは殊更憂鬱なる日を送ることが多かつたのである。
藝に邪奸、小菅静馬が日向輝雄に向つて、松波事件として語つた針小棒大の話は、取りも直さず此事を云つたのである。其頃から小菅は小町田家に入入をしてゐたものである。
謙次郎と濱子との間柄が、子爵夫人に推量せられた如き、忌まはしきものでなかつたことは、二人が共に何人に向つても證言し得る所であらう。併し慥く離れ／＼に見ることが出来なくなつてから、二人は果たして戀しとは互みに思ふことのなかつたのであらうか。
淋しく悲しく、心に物足らぬ思ひの湧いては來なかつたのであらうか。殊に濱子は女の身の、捕擒の囚人にも劣る増進に落ちて、起居にも人の目を惹くのであるから、苦しさは如何ばかりであつたらうぞ。乳母のおとせが能く二人が心意氣を知つてゐて、時偶に濱子の爲めに文使ひとなつてゐたこともあるが、其とて月に一度、謙次郎よりは故意と心を打開けたやうな返事もしてくれないのに、濱子は悶えに悶えたのである。今一度親しく膝を混へてと思ふを云つて、乳母を困らしたこともある。謙次郎とて濱子に劣らぬ心遣ひをしてゐたが、これは子爵の恩義を餘りに深く思つたので、よしないことと諦めて、濱子に對しては濟まぬながら、出来るだけは他處々々しくしてゐたのである。

其も二年の後は謙次郎は目出度く大學の業を卒へて、醫學士となつた。大學にある数年の間僕等で押通した、其榮譽は今亦留學生として獨逸に學事の深遠を叩かうといふことになつたので、陸ながら多大の補助を與へてゐた小町田子爵は、譯もなく喜んで、一夜卒業の祝宴を開くと云つて呼び迎へた。で謙次郎は小町田家へ對して、多少の惡感を抱いてゐたのにも係らず、其等は恰も忘れもしたかのやうに喜び勇んで、子爵の好意を敢て受けなかつた。流石に子爵夫人と語ることの、心持の好いことはなかつたが、逢つて見ればこれも舊事を忘れたやうに、ちやほやと待遇するので、自からも少しは面目を施したやうに思つたのである。其夜更けて久々振に濱子とも逢つて、二年の間のことどもを語つたが、二人は奥庭の四阿に、切りに胸の騒々を覺えた。其時二人は深く感じたものがあつた。
けれど悲しい哀れな話で、同時に降つて湧いたのである。小町田家の掛たる松波謙次郎が今纔かに自己の運命を下しつゝある間に、小町田濱子は、子爵の令嬢として、權勢ある自己の境遇の、頗る思ひに任せぬことを覺つた。境遇と境遇とのこぼち難き摺壁は、二人が其後の面白からぬ生涯を作為したのである。如何に深く、厚く、切に、二人が相戀つてゐたかを今宵各自の心に感じた其事が、其後長く二人が其胸に痛手を覺え、止む時

もなく苦惱を閱せねばならぬ動因となつたのである。其より再び二人が心を隔つることなしに、相見相語ることは更になかつた。

謙次郎が悉くなく歸朝して直ちに博士の名號を得、此醫學界の泰斗として仰がる、好運に迄到つた時、彼は尙瀆子のことを忘るゝことは出来なかつた。固より謙次郎の歸朝を心待ちに待つてゐた瀆子が、忘るゝことの出来なかつたのは當然である。併し二人は最早舊時の謙次郎と瀆子とはなかつた。逢つて語り、見て笑ふのに、多くの虚偽は刻まれてゐる。何れからなりと僕は忘れなかつた、羨は待つてゐたと切出したならば、恐らくあの時のやうな今は悲しい思ひもせず、光明なる二人の將來を劃したのであらうのに、互ひの氣を兼ねて其さへなし得なかつたといふものは、能く不運な星を戴いてゐたものであらう。表面は慇懃たり行くのにも係らず、其で二人が思ひは相も變らずであつたのであるから――。

謙次郎が名聲の噴々として、世間に迎へられるのに、子爵は密かに瀆子を以て、これに妻せやうとも思つてゐたが、何故か其事は子爵夫人に依つて揉消されたのである。而して瀆子は遺願なき胸を抑へて、涙で日を送る中に、慇懃とは知らぬ謙次郎は、自分ばかりが瀆

子を忘れ得ないのかと、我と我身が怨めしく思ひつゝ、少しでも其思ひを去るやうにと努めて、身を多忙に紛らしてゐた。竹原玉子を妻と定められる時にも、意氣地もなく書齋に涙を零した。今一度せめて瀆子の心を確めると、人をして其思惑を捜らしたが、瀆子は少しも左様な事は思つても見ないとあつたので、意を決して玉子を迎へた。謙次郎が玉子を迎へたといふ時、氣を取亂さうと迄に泣いて、其なり二ヶ月の餘も枕が上らなかつた瀆子を、謙次郎は夢にも知らぬのであつた。

彼の人をして其意を實さしめたといふ其者こそは、好んで惡をなす彼の小菅靜馬であつた。謙次郎は自分の心を乳母のとせに送通じてくれよと頼んだのであるが、小菅は此時既に天魔の黙契を得て、敢て事をあとせに通じないのみならず、瀆子の意は未だ確乎たる地位なき新醫學博士に、傾注されるのではないと返事をした。さう言はれては何うすることもなからず、謙次郎はせめて此事を表面に打出して、取返しならぬ耻辱を擧げなかつたのを取柄にして、無理に心の權衡を保つに力を盡したのであつた。

其後瀆子は日向家に縁附いて仕舞ひ、謙次郎は稍ともすれば冷かならんとする心を引立てつゝも、誠實を籠めて自分に仕へる玉子を不便と思ふやうになつて、二人は最早脆くも、

だけ散つたる初恋の哀れを、我と泣くことをだに出来ない身の上になつたのである。只それ女だけに、濱子が心優しくも氣弱くて、ともすれば家庭の平和を破らんとする其を聽いて、謙次郎は、今更ながら若しやと多少の感慨を喚ばぬこともなかつたが、去りて其を何うするといふことも出来なかつた。殊に近く濱子が病ひを得て一度稻村ヶ崎へ引込んで以來、悲しいことが間々あると子爵に聽いては、え堪へぬ思ひもせられたのであつたが……

奇しきは運命の戯れであらう。凡ての人の悲みと歡びと、而して哀樂とは常に不可測の邊より、不可思議の境に向つて投げられる。人は常に是非もなく其影を趁うて、果敢なき此人生の行路を進るのである。憎々乎として行衛を知らず、越し方を顧みず、夢ともつかす、幻ともつかず、將た現ともなくて、悲みの影に歡びを偲び、微笑の中に愛ひの唾を掬ひて、我生を辭すのである。況して悲みに身を破られ、愁ひに心を傷ましめられて、ついぞ歡喜の笑まみを望み得ないもの、斯ばかり憐を極め、苦を極め、人の世の索寞を極めたものがあらうか。苛酷なる運命は、茲に其惡戯を極度に弄ぶのである。而して今謙次郎と濱子とは、眞に此怖るべき惡戯の犠牲に供せられてゐるのではないか。

濱子が家庭の主人公として破れたのと、謙次郎が色にも見せず、慈愛の母と可憐の妻とに

濱子——運命の戯

一一四

濱子——松波一家

一一五

擁せられて、和氣霽々たる平和の家庭に、苦痛を忍んでゐるのは、共に同情ある眼に一つの慘酷なる事實である。

松波一家

十四

夕暮から何となく空の氣色の怪しき迄擡擡つて、殊更風の冷たかつたが、宵に時雨ていよと吹きしきる風の、家の中にもても寒さは堪へられぬ迄である。謙次郎が未だ歸らないので、母も玉子と共に待ち侘びてゐるのであるが、夜はもう十時に垂んとして、時々腕車の響きも聞こえるが、それが悉皆何處の辻へか消えて仕舞ふので、滅多に夜歩きをせぬ我子

を思つては、母は氣が氣ではないのである。

茶の間に孑然としてゐたのであるが、餘りの淋しさに、部屋に閉籠つて、先程から手紙を書いてゐた玉子を、喚ばうと思つて、自から立つて行つて、其處の紙門を開けると、玉子は今し書き畢つて、冷たさうに手焔に手を翳してゐた所なので、これを見ると莞爾して、「只今彼方へお伺ひしやうと存じてをりました。」と蒲團を押遣つて、

「未だ御寝なりませんので御座いますか。」

後を締めて母は進寄りながら、

「謙さんが未だお歸りでありませんからと思つて、私は懲うしてゐるのだけれども、玉さん、涙多に喚は出なすので、今夜に限つて遅しやうだね。」

玉子もさうと思つてゐた矢先、

「本當にさう何う遊ばしたので御座います。」とさうつくしい眉根を擧げた。

「滅多にこんなことはありませんがな、何うしてゐますのやら、外は寒いだらうに。懲うやつてゐても寒いやうだよ。」

「夕方からのお寒いことと申しましたら御座いますねえ。」と云つたが、

「只今漬子様への御手紙を仕舞ひました所なので御座いますよ。」

「あゝさうですか。其の私の私は未だ御様子承はらなかつたが、御容體はどうかですの。と母は其處に座を占めて、

「謙さんも大層心配して下さるが、およつておいでやありますませぬね。」

「え、え、そんなでも御座いませぬすけれども、依然あの何で御座いませう。御氣分が

お勝れ遊ばさるるので御座いませう。さうさうやつて、あゝで遊ばすやうで御座います。」

「さうですかねえ。」と母は譯はなしに感入つたやうな首肯して、さう云つたのである。

「それでも全然別人のやうにお褒れ遊ばして、妾は本當にお可哀想でなりませんでした。

どんなに御苦勞遊ばしました所爲で御座いませうと、を存じましてねえ。」

「さうですかねえ。お若い時分にはあんなにお美しくつてゐらつたのだけれども、

乳母やさんが御心配なすつてだらうねえ。」

「それはさう、どんなにか御心配して下さるか知れませんが、妾が不審にまね

りましたもので、大層喜んでくれますして、其はく大變なので御座います。本當に

好い乳母やさんなので御座いますのねえ。」

「そして漬子様も喜んで下さつたでせうねえ。」と呑込んだやうなことを云ふ。

「本當にあなた、お久々振なので御座いましたもの。妾も漬子様がどんなにしてゐらつしや

うますでせうと思つて、まゐりましたので御座いますもの。漬子様は又お淋しくつて、お

暮らし遊ばして、御座りますものですか、お懐かしくつて、二人共涙が零れまして御座

います。其に思ひも掛けず、あんなにお褒れ遊ばして、御座いましたもの、妾は一層悲し

くなつてまゐりまして。」としみづく云つて、其時のこと思出したかのやうに、
「忘れも致しませんが、其夜は何うしてもお歸し遊ばさないで、一夜二人種々とお話を致し
まして御座いますが、其時濱子様が羨ましいことを思つてれば、氣が澄んで来て好いの、
人の運命といふものは可笑いものねえつて仰有つて、阿母様のことを云つては、お泣き遊
ばしたのが、今も思出しては泣きたいやうな氣分になつて仕舞ふので御座いますわ。」
何時か鼻聲になつて、

「玉も母親といふものには、幼なり頃別れまして、只今ではお顔も覚えてはをりませぬので
御座いますけれども、時々思出しては氣が鬱いてまゐるので御座います。其は死別れた
ので御座いますから、致方も御座いませぬやうなものですけども、濱子様はさうぢや御座
いませぬのですつて、仰有つて御座いました。そしてね、お可哀想で御座います。早く
からおたづね遊ばして御座いましたけれども、此頃迄もちつとも御消息が分りませんか
つたので御座いますつて、仰有るんで御座いますもの。稻村ヶ崎へおいで遊ばしてからは、
外に御用事といふのも御座いませぬだし、そんな悲しいことばかり、御思案遊ばして
御座いますわ、さう仰有つて、あの、

（羨は外には望みといふものは御座いませぬの、せめて阿母様をお引取申すことが出来て、
暫らくでも何だから、御孝行がして見たら思ひますわ。）つてねえ。乳母やさんがそれ
を聽いて、泣くので御座います。羨も悲しくなつてまゐりまして。「云流んだ。

「あの濱子様には、阿母様が何うして何でせうか、羨共に存じも寄らないことなので御座
いますけども、可笑しう御座いますわ。濱子様はそして誰にでもこんなことは仰有つたこと
はないのだけれども、玉にだけ仰有つて下さつたので御座いますつて、後程乳母やさんが
云つてくれましたが——」。

母も同情に堪へぬらしく、これは老の身の涙弱く、聽いてゐるのに涙含んでゐた。

「其もね、阿母様が好んで濱子様をお見捨なされたのでは御座いませぬ。けれども其處には云
ふに云はれない事情が、こんがらがつてゐましたものだからなんですよ。未だ其頃は服様
もお若くつてゐらつしやつたのですし、此頃の濱子様のことなども、深くも御考へ遊ばし
てぢやなかつたらうけれども、御夫婦中はお睦まじくつてゐらつても、何や彼やと御一
家中の紛糾から、到頭あんなことにおなりですもの。其はもう濱子様の生先のこと、少し
でも其頃お考へ遊ばしたのですと、當座の中はお辛く遊ばしても、其處は又何うにでもな

りましたでせうと思ひますね、やつぱり濱子様は阿母様の御縁が薄くつておらしたの
ですわえ。」

「本にねえ。」と玉子は溜息つした。

「誰にしましても、子といふものは可愛いものですよ。濱子様の阿母様も、決して濱子様の
ことお忘れ遊ばしたりなさる方ちや御座いませんでせうけれども、別れてゐては、どんな
に思つても力の及ぶことでもありませんから、決して、もうお怨みなど遊ばしてはな
りませぬ。」

「いえ、お怨みに思召すやうなことで御座いません。それは、おなづかしくこそ思召
すので御座いますせうけれども、決してお怨みなどなさる方ちや御座いません。お悲しくは
かし遊ばしてだものですか。」

「それはらうでせうとねえ。私は能く存じてゐますが、阿母様も其からといふものは、二
度とお嫁入もなさいませぬ、藍ながら濱子様のことはかしか念じ遊ばしてと云ひますか
ら、濱子様が其をお聞き遊ばしたら、お泣きでせうよ。こんな難有いことはありませんで
すもの。お光様と仰有つて、立派な精神のお方なりました。」

其から其住居の様、御座々のお嬢様であつたこと、學問がなか／＼今の者の及びもつくま
じきこと、濱子様をつくりのおうつくしかつたことを語つたが、何故御離縁になつたか
は、一家の折合が取れないで、御夫婦飽きも飽かれもせず、生木を裂くやうに引分られ
たのだと大概を云つて、其には又深い原因のあるかも知れぬとだけのことを一言添へたが、
餘り語りたくもない様子で口を噤んだ。

玉子は「一々自分のことでもあるかのやうに、深い注意を引起して、聞いたのであるが、
何故御離縁遊ばしたかに到つて、雲を掴むやうに、折合が悪かつたとはかりで、少からず
失望したのである。其でもお氣の毒でならなかつたやうに、姑御の云畢るのを待兼ねたや
うにして、

「其でもどんなにお悲しかつたでせう。産んだばかりの子を置いて、お歸り遊ばしたので御
座いますものねえ。濱子様がお懐かしがり遊ばす位のことでは御座いませんわ。」

「らうござと、玉子に似た所だね、そんなことはありはしないが、可愛い子供をなした
ばかりで、去られるものだと思つたら、私も若い時分からどれだけ苦勞を重ねましたやら、
分りませぬ位だけれども、誰さんがあるばかりで、辛いことが辛抱も出来ましたやうな

ものですよ。さすもの、こんなに無慘々々と……。「と云はうとして、玉子を差覗くと、

「阿母様、どんなに辛いことで御座いませう。」と玉子は慌て、手巾を顔に押當てた。

「ですもの、こんな無慘々々と引分けられて、どんな思ひをなされたか、考へても分りませんよ。」と云ひ、

「濱子様も早く御病氣を御養生遊ばして、少しは阿母様にも、御安心をおさせ遊ばさねばなりません。あのやうな方でしたから、今も濱子様のことはかし、御案じでせうと思ひますよ。」

「阿母様のことはかし、あの時も仰有つて、御座いましたから、羨もさう申上げてまゐりましたので御座います。あゝやつてあゝを遊ばせば、悲しい方にはかし御考へ遊ばすので御座いますから、早く御全快遊ばして、日向様へお歸り遊ばすやうにつてね。」

「どういふおこね。」

「さすけいも、あの濱子様はもう思ふやうつて、何時迄もここにゐたさうつて、どう仰有るので御座いますもの。而して泣いてゐるつしやさしてねえ、乳母やさんも羨も貰ひ泣をいたし

ました。」

「本當にお可哀想でなりませんのう。」と氣の毒さうに俯向いて、何か思案をするかのやうであつたが、

「玉さん、これからは濱子様のお力になつて上げる氣でゐたら、どんなにか喜びだらう。

あゝもうこんな氣の洗むお話は止ませうね。」

「は、それは出来ますることならば、どんなにでも。」と云つて眼を外らした。姑御は欄間を振仰いで、書棚の方へ眸を移したが、少時して氣を取直したやうだ、

「あれですかえ、出来て来た繪とさあのは。」

「さうなので御座いますよ。今日お午刻過ぎ辛而表具屋が持つてまゐりましたので御座います。あの明日あたりどこぞへ掛けて見やうかと思ひますの。」とこれも振返つて其方を見らる。

「夜目でしかとは分りませんけれど、あの松林が本當に好い鹽梅に出来てゐますやうですねえ。私共はちつとも繪の方は知らないのでだけれども。」

「羨もめの松並木に惚れくづしてゐるのですよ。而してあの小さな家と、ぱつと刷毛でなす

りつけたやうになつてゐますが、奥床しいやうな氣がして來まして。これでも繪師の方
では、大層一枚のものを仕上げますのにも、骨が折れますつてねえ。」

「おつてせうとさ。」「藝に秀でますのは、大抵ではありません。」「とつと見詰めたまへ、
「未だ若う男だつて云ふのぢやないかえ。あの繪を頼んだのは。」と返事を促すとさの
もなして下らなうことをたひねる。

「本當におとなしう方で御座います。あれ位腕が有りまして、やつぱし氣になるの御座
います。何と云はれるかと思つて、心配してのやうで御座いました。美術家といふの
は、みんなあんな方かと思ひましてね。羨は本當にお禮を申しましたよ。」「

「さうですかねえ。」「母は淨の空を返事をして、熱心に見てゐたが、願ひで、
「あつちの壁に置してある西洋畫も可うけども、やつぱし私共の素人目には、日本繪の方が
あもしろやうな氣がするよ。見慣れてゐるからかも知れないけれどさ。」「と笑つて、

「あんまりこつてくして、傍へ寄つて見ると、きたなくつてなりません。」「
「ほ、ほ、ほ。」「と王子も笑出した。
「何とか云ひましたの、これを書してくれた繪師は。」

「は、銀林さんと申すの御座いますよ。未だ年は何年もありませんのさすけとねえ。」「
と何氣なく云ふと、

「え、あの銀林さんすつて。」「と母は仰山らしく驚いたが、聲を低くして、
「あの銀林つて云ふのさすかえ。」「と顔を突出して訊直す。
「はあ。」「とつて王子は何か解せぬ顔付をして、

「銀林さんと仰有るので御座いますかね、大層腕があんなさいますつて、旦那様が他處で
か聽出たてなりませしたさうな御座いますよ。」「
「さうしたかねえ。私は又何處で聽いたやうな名だつたものだから。」「と故郷からして
笑ひに紛らして、何氣なく装つて、

「それである、鎌次郎も其繪師にお逢ひのやうをしたねえ。」「
「お逢ひになりまして御座います。歸らうつてなまむの無理にお引留め遊んで、御一編
に御文版を召上つて、外に二三枚も繪を御注文ならしました様子で御座りました。」「

「はあ、さうでしたかねえ。」「と表を切らぬことを云つて物思ひに洗んだが、其も本の瞬間で、
「そんなお若いのに腕があんなさるのかねえ。本當に面白い仕事をせうねえ。」「

「妾共も女子に生れませんが、したらこんな美術家になつて、楽しく暮らして参りましたな
ら、どんなに愉快だらうと思ひますけども。ほ、ほ、ほ。」と笑ひくづれてゐると、

「男子に生れても、いやなものだけれども——。」と何か云はうとして覺えず振返つた。

「あの旦那様がお歸り遊ばして御座います。」と叮嚀に物を云つて、細目に聞いた頼子の陰
から、半身を現はして、引詰め鬘の、小娘が機軸を利かしたので、

「おや。」と二人は顔を見合せて、

「ま、何時の間にお歸りだらう。」

「本當に、まあ、ちつとも存じませんでした。」と玉子は急いで立上つて、一歩如御の先へ飛
んで出た。

「大分、も、今夜は遅いだらう。」と母も立出でた。

十五

「いえ、何も欲しくはありません。」と云つて衣服も着更へず、茶の間の火鉢の前になつたり
として坐つた儘、餘り物も云はないで、苦り切つてゐるのは謙次郎である。

「でも、謙さん、こんな夜更迄、何有も召上らないでは、體に悪いかと私は思つて。」と兎見

頼子——松波一家 一三六

から見て、

頼子——松波一家 一三七

「何うかしたのぢやありませんかえ、お前、大層顔の色が悪いやうですよ。」と母は落着かぬ
謙次郎の、常にない様子を見ると、氣が氣ではないのらしく、進出てらう云つたのである。

玉子は一目に見て取つて、真人の様子の今夜に限つて、何うしてこんなに變つてゐられる
かと、出迎ひもしなかつたのが氣にもなるし、平常そんなことに心を止めるやうな人では
ないけれども、胸を騒がしながら、黙つて謙次郎の後方にかしこまつて手持無沙汰であ
る。

「いえ、別に氣分が悪いといふのでも御座りませんが、少し何なものですから。」と沈返つて、

「阿母様、何うもね、心配なことになりました。」

「え、何うしましたのですつて。だから私は餘り謙さんのお歸りがおそいものだから、氣を
揉んでゐた所なんだよ。まあ、何うしましたえ、本當に何うもお顔の色が眞蒼なんだもの。」
玉子を顧みて、

「ね、お顔の色が好くないやうぢやありませんかえ。」

「どうなので御座りますよ。」とちづく云つたが、少し顔を赧くして、眉を擧めて、心配がらう

である。

「なにね、私の體には少しも異状はありませんですが、大變なことを聞出したので御座いますよ。」と四下を顧みて、

「玉さん、其處等には誰もおなつかさ。」と玉子を頭で差圖した。

「は。」と氣輕に立つて、次の間を覗いたが、別に人らしいものもおない。只書生部屋の方で、笑聲が聞えるばかりである。

謙次郎は顔を突寄せ、母に向ひ、

「到頭濱子さんが御離縁になりますつて申しますよ。」

「まあ、それでは本當なんだらうか。」と呆れたやら、驚いたやらで、母は思はず聲を立てた。

「今夜直ぐに子爵をお伺ひしやうと思ひましたけれども、夜も更けまじし、阿母様も御心配下さりませうと存じましたものだから、其儘歸りましたのですが、日向さんとひとしやありませぬか。」

「でも、本當ならば誰さん、そんなことをお云ひでも。」と母は聲をひそめた。

「何を本當かつて仰有るのですか。」

「銀林の一件を。」

「馬鹿なこと、そんなことがありませんものか。」と強く云つて、眸を据ゑて母を見ながら、

「そんなことがあらうと、阿母様迄仰有るのですか、本當に情ないねえ。」と氣色ばんで云ふ。

四下を窺き廻して立歸つた玉子は、少時差控へたが、話の途切れたのに、

「あの誰もおませんです。」と不意に云つた。

それには謙次郎は返事もせぬ。

「濱子さんは阿母様、決してそんな修まらない方ぢや御座いませぬ。其で銀林の方を兎に角糺して見やうと思つて、兄弟のやうにして世話をしてゐる小山田といふ、これも番頭ださうですが、其處へまゐりましたので、こんなに遅はりましたのです。其處へ銀林の性質や、素行、何彼を委しく問糺しました所が、何うしてあなた、人の口業にかゝるやうな、そんな詰らん男では御座いませぬでした。」

「それぢや何らういふのだらう。」と母は「氣に辯じつけられて、當惑したので、

「それでも日向様のお云分もありませう。」

「それお御座いますとも。ですけれど、其れがみんなこしらえとなんですから、驚か

うちやありませんか。私は實に残念でたまりませんよ。」と眼を輝かして、口惜しむように云つたのである。

「餘り道理の分らないことなんですもの。可哀想になつて來ますよ。誰か聴きまして。」と言葉は妙に響いて、謙次郎は力を落して云つた。

「只今の所では、固より此事が私に利害の關係も御座いません。けれども、私は何うも人事のやうには思はれませんですよ。此頃は頼とお目にかゝらないけれども、御別荘の御様子、毎々子爵のお口から承つてをるのです。小供の時分から、子爵のお世話になつてゐて、濱子さんとはあんなにお親しく致してまゐりましたのですもの。此の間ちらとそんな話を耳には致してをりましたが、まさか〜と思つては、其を頼みにして來た今日といふ今日、あんなに突然にきかされて、私は喫驚して言葉も出なくなつて仕舞つたのです。」

「それはお云ひの通りなら、道理至極のお話なんだけれども。」と母も涙み盛になつて來た。

「玉さん、お前もお聴きかいよ。濱子様は御運がお悪くつてね。」

「ま、其は本當なのでせうか。」と玉子はをかしの思つて耳を傾けてゐた謙次郎と姑御との話を、今其と打出されては、胸が躍つて我知らず涙がほろ〜と出るのである。

謙次郎は、今日鳥渡内密にお話があるから、繰合せがついたら來て下さいと、小菅静馬の母から手紙を寄越されて、近來小菅家とは音沙汰もしなかつたのに、何事だらうとは思つたが、不圖思着いたのは、近來濱子のことを聞込んでゐたことである。小菅静馬の父は當初媒人として小町田家と日向家との間に、斡旋したのであるから、若しや其等のことについでにはあるまいかと考へたので、其事は母にも告げず、夕方から出掛けたのであつた。所が話といふのが案の定、此度の離縁談であつたから、密に期してはゐたもの、顛動せんばかりに驚いたが、頼馬の母の云ふ所に依れば、相悪父の愛重が京阪地方へ出張してをつて、多分今日あたりは歸京するかと思つてゐると、矢先へ今一週間も遅くなるといふ電報を受取つたので、此度のことには就いては、頼馬が双方へ断廻つてはゐるが、何うも若年であつて見れば、安心をしてこんな大事を見てもゐられぬ、外に誰とて心當りもない所から、篤と御相談がしたい爲めに、お呼立申したとのことである。其では未だ此事が小町田家へ通せられてはあるまいと訊いて見ると、其は最早今日頼馬が待てといふのも肯入れず、取上氣せて申上げた筈との話に、謙次郎は一方ならず羨望して仕舞つたが、此儘にして置くことも出来ぬ、相當の此上の手筈もせねばならぬといふので、根柢を葉掘りにして、委

細のことを聞取つた。日向が偏に濱子の不義を信じてゐることから、銀林といふ男は悪者であるといふこと、日向の父も立腹してゐることなどである。併し此等の話の中にも謙次郎は早くも首肯し難い所の少なくないのを觀取たので、後の相談は又お伺ひすることにしたいと云つて、小菅の母を辭した。而して途中腕車の上で、銀林が小山田清雄に引立てられてゐることを知つてゐたので、小山田の意見を徴しやうと思つて其家を訪ふたのである。所が小山田の熱誠を籠めての意見は、殆ど小菅の母の口とは反對である。而已ならず、小菅靜馬が確かに此狂言を仕組んだのであると確言して、銀林に就いての一々の疑ひを、悉く立派に解釋した上、日向が自己の眼識を持たないことなどを罵倒しつくしたのであつた。謙次郎は此處にも用心が深過ぎて、悉く其云ふ所を信ずることは敢てしなかつたのであるが、氣の所爲か、何うやら此方に同意したく思つたのである。で小山田には未だ離縁の話が小町田家に持込まれてゐるなどは云はなかつたが、若しそんなことでもあつた時には銀林の將來の爲めにも、其であるが、第一濱子の爲めに、取返しもつかぬ汚辱であるから充分の盡力もしてくれるやうにと云置して、一先づ引上げたので、とつ追ひつ、思案にくれて、我を忘れて我家に送歸されたのであつた。顔色の悪いのも、事實食事のことなどは

全く忘却してゐたからでもあらう。

蓋し小山田清雄が謙次郎に語つた所のものは、此事件の事實に近いものばかりであつた。否、事實其物であつたかも知れぬ。謙次郎が若しこれを信じたならば、少しは此事についての希望を、胸に抱くことが出来たらうと思はれるのであるが、謙次郎が輕信せず懸疑せざるは、銀林と濱子とを容易に疑はぬが如くに、恰も小菅靜馬の好惡を信せなかつた爲めに、頗る不便宜に陥つたものである。

で、自から母にも語つた如く、謙次郎は濱子一個のことを以て、何うしても濱子一個の事柄として、濟まして見てゐることは出来なかつた。濱子が淋しき海のほとりに、味氣なき生活をしてゐるのだと聞きては、腸を斷つと思ひもせらるゝのに、今又かゝる悲しい慘酷なる宣告の、濱子が上に加へらるゝに到つたならば、どんなであらう。況して不義の汚名を蒙らせられて、濱子が果して長らへてゐるであらうか。其を思へば男子ながらも、泣かすにはゐられない。自分のことを濱子が今は何と思つてゐてくれるかは知らなけれども、自分自身は斯ばかり果敢なかりし戀人の身の上をと思遣つては、何うしても他處事にして仕舞ふことは出来ないのである。救つてやりたい、何うぞして幸福な境涯に世を送らせた

い、此上に悲惨なることに達着せしめたくないとばかりの一念で、謙次郎は日頃の沈着なる態度にも似ず、昨日迄の我と殆ど別人のやうな心地になつた。妻女のあることを知らぬではない。現在の自分の地位を忘れたのではない。けれども、其等の煩累を思ふが故に、冷々然として死灰の如く濱子を顧みないでゐることは出来ないのであつた。固より濱子を再び日向家の人とならしめることが、果して濱子に幸福であるか何うかといふことは、深く思つても見ないのである。濱子は既に再び日向家へとは歸るまいと、乳母のとせへも云つてゐる位であるから、病氣の平癒するのと共に、日向家へ歸らねばならぬことともならば、或は却つて今の身の上よりは、幾倍かの不幸なる身の上にならぬとも限らないのであるが、謙次郎の思ひは、具さに其等を考へることよりも、濱子に面白からぬ汚名を蒙らすることが、一面に忍びないので、一面に小山田のいふことを輕く信じない程用心深くしてゐながら、此等の込入つた事柄に迄は、深く思考を凝らすの餘地を持たなかつた。謙次郎は膝を組み直して、

濱子——松波一家

一四五

「女子の不名誉は、真人に去られるといふこと位、不名誉なことはありません。私は日向さんも餘り輕忽ぢやないかと思ふ。確乎とした證據でもあつてのことならば、何だけれども、さう自分で思込んだからつて、其が何の離縁の申譯になるものでせう。」

濱子——松波一家

一四五

「全くだよ、そんなことなつては、人の名譽を損ねますばかりぢやない、御自身の不名誉にもなるのですから、假令そんなことがあつたからつて、其は穩便になさるねばなりませんのう。」と母も其には同感で、浸々と何か思合はしたやうに云つた。

「然として謙次郎は思ひに沈んでゐたのであるが、玉子を振返ると、

「玉さん、お前か濱子さんをおたづねの時に、何か思合はすやうなことは云つてなかつたかSo」

「は、S、S、え、別に何うといふことも仰有いませぬかつたのですけれど、と顔を上げて、

「妾には何ともそんなことは仰有りはなさいませぬかつたのですけれども、乳母やさんのお話に依りまするとあなた。」

「うむ、何とか云つてゐましたか。」

「あんなにお傷はしい迄、悲しくばかりなすつてゐらつしやいますのですから、其爲めだらうかとも思はれるので御座いますですよ。何でも、もう日向様へは歸りたくないつて仰有つてのやうに御座いますですよ。」

「どうも泣き止んでおたのかねえ。」と謙次郎は自分も悲しうに連絡した。

玉子も聞けば聞く程、考へれば考へる程、涙が出るやうな思ひがして来るのに、何時か人知らず泣き止んでゐた。

「濱子様に何うしてあなた、そんな不名理なことが御座いますでせう。屹度どうなので御座いますわ、日向様が御自分で思立つて、御離離遊ばさうとなるるのでせう。こんな云掛りをなすつて、若しか證明が立ちませぬやうですと、濱子様は逆もく其はもう屹度生きてゐては下さりません。妾は能く御氣質を存じてをりますから。」

「玉子ももう思ふのだね、私も其が氣になつてならぬ。」と謙次郎は意氣地なく涙を垂れて「人のことで泣くやうなことがあらうとは、思つてもゐなかつたのだけれども、私はお氣の毒でくならぬ。」と云つたが、流石母もこれには少からず驚かされた。小供の時には随分物に感じ易くて、めそくしてゐたこともあつたのだけれども、此頃では世間一統何事に依らず、愉快なことはかりのやうに、快活にしてゐた者が、此度のことばかりに人目を血ちす涙を流すといふのさへあるに、こんなことを云ふと云ふものは、何としたことであらうと、濱子よりは却つて我子を氣遣ひのであつた。玉子も濱子の爲めに、謙次郎が泣いてく

れるのは、嬉しやうなものであるけれども、曾て涙を良人の眼に見たことのないのであるから、聊か思掛けない心地もするのである。

で、母は年寄だけに落着いて、

「ですが謙さん、お前がそんなに下らないことを云つておいては、ならぬぢやありませんかえ。小町田様のこれ迄の御恩義に對してだけでも、出来るだけの働きをお目にかけて、濱子様にもね、潔白が立つやうにおしでなくつては。小町田様には御家來は澤山おいでせうけれども、心から御忠義申さうといふのは逆もたんとは御座いませぬ。今頃はどんなにか御心配でいらして遊ばしませう。」と澤々と説くのであつた。其を打消すやうに屹となつて「阿母様、其は謙次郎も心得てゐるのですから。いえ、こんなに涙つばい謙次郎では御座いませぬでしたけれども、餘り日向さんともあらう者が、男子らしくないことをなさいますものですから。——其に濱子さんか、あんな潔とした御氣性だから、又どんなことにならうかと思つては、子爵のお心をお察し申しましてねえ。」と片唾を呑んで、

「謙次郎に今日がありますのも、偏に子爵の賜物と申してよい位なのですから、其をお忘れしてはなりません。それに子爵は只今も私を我子のやうに思ふと云つて下さるので御座い

ますよ。私は濱子さんに對しても——。」

「さすから、こんな時にもお力におなりでなくつては。」と母は聲をうりました。

濱子の本當の母親がこの事を聞いたらば、どんなに悲嘆にくれることであらうと、途端に思ひだしたのであつたが、母は二人の氣を兼ねて、驟んで仕舞つた。玉子は濱子を何うかしたと一筋に思つてゐたので、良人の言葉を聽いては、大方ならず力を得たのであつたが——

「小さい時分から、本當の阿母様に逢ひたい——つて仰有つてだつたことが、悪く濱子さん

に報いたんだねえ。」と謙次郎がきつぱりと云ふと、

「お可哀想に、それから御病氣がお悪くならなければ可いが。」と母も涙々とする。

濱子——松波一家 一四八

ながら、思はず腸を抉つて出た謙次郎の一言に、痛く感慨に打たれたのも不思議である。玉子は顔もえ擧げないのであつた。而して心の中に只々何うかして上げたい、こんな汚ら

慈悲とほまれと

十六

額を燃めて密々と語るのは、子爵と夫人高子とである。

子爵は先の程より、苦しむうちに吐息ばかり漏らしてゐたが、種々と夫人に責立てられるやうに云はれて當惑して仕舞つたのである。

「何うも怒う足許から鳥が立つやうに云はれては、私も殆ど當惑して仕舞さんだね。」と額に手を當てゝゐるのは子爵である。夫人は聲を少し高くして、

「あなたかどう仰有つて、何うと御決心遊ばしませんでは、本當に妾は困つて仕舞さんで御座いますよ。此儘にして放棄して濟みますやうのことでは御座りませぬのだし。」と云つて憂ひの色は目に見るばかりである。

「其といふのも、濱子の爲めには一生の大事と云はんければならないものだから、私は昨夜も睡らない位に考へ考へしたのだけれども、思つて見れば餘り馬鹿々々しくつてねえ、まさか濱子に左様なことがあるべき筈はないのぢやないか。」

「どう仰有つても、先方でさう申すので御座いますなら、仕方がないぢや御座いませんか。妾だつてこんな不名譽な申状で、承知したいとは思はないので御座いますけれどもねえ、お嫁にやつたので御座いますから、無理にさうだと云募られては、只もう耻の上に耻なのです。すから、其にあなた、女子のことですから、たつて其だと申されますれば、七八分の弱味は此方へ出来てまゐりますもの。」

「そんな滅相なことはない筈ぢや。女子でも何でも、身に覺えのないことを、無慥々々云掛けられて、其で引込んでゐる必要もないぢやありませんか。私はさうとしか思へないのだから。」

「どう仰有つて罪へば、何をなさることなのですけれども——。」と口籠つて、

「これがあなた、一通りの出来事をも御座いませうものならば、其程にも御座いませぬのですけれどもね、何を申しまして、ひよつと申すれば、一家は申す途もなく、一門の杖

へない恥辱を蒙らねばならぬやうなことにでもなりましたから、妾、それが心配でなりませんですよ。」

「それどうだかな、奥、濱子も此儘にして濡衣を着せられては、再びと世間に立交はることも出来ぬやうになるであらうが、なんぼ不慣れぢやないか。」と子爵は術ない思入をして、

「私も自分の家の耻を思はんこともない。其だから引取ることにして、出来ることなら穩便にしようと思つての、人の子を返すといふのに、せめて、もう少し立派な名義でも以てしたなら、私はこれ程にも思はないのぢやが、これでは輝雄さんの心が分らん。阿父さんが頑固なことを云つたからつて、眞人たる者が、何とか仕方があらうぢやないか。私は何う思つてもこんな狼藉なことを云はれて、はいさうかと引取られはせんよ。」

「其を仰有いますれば、もう何とも申上げられないので御座いますけれども、其處を又お考へ遊ばして下さりませ。いくら穩便にと申しました所を、一旦斯うと申出ました上では、先方でも言葉を二重にするといふことも出来ませうと思ひますが。其だからつて、これを此方で荒立てましては、一時に世間の嗤笑となつて、いゝ耻を掻かねばなりません。いしね、何を申しまして、小町田の名が大事なんで御座いますもの。あなた、こゝが切

なうんで御座いますよ。」云繼いで、

「口の悪い新聞などの種にでもせられやうものなら、あなた出入の者に對しましても、何うも斯うも出来るのでは御座いませぬ。」

「それぢや、此儘濱を引取れといふのか。」と夫人を上目遣ひの、額越に噴めて屹と云つた。

夫人は其に怖れをなしたやう、黙つて差控へたが、やがて、

「圖にやうと申上げるのでは御座いませぬですけども、あなた能くお考へ遊ばして下さりませぬでは、取返しがつかないので御座いますよ。」

「其をどうと思へばこそ、こんなに苦しんでゐるのだが——困つたことが出来た。」と獨語のやうに云つて、ぐつたりとして仕舞つた。

夫人は膝を進めて、

「又妾は斯うも思つて見るので御座いますよ。何うかこれに話がついて、濱さんを再び先方へ上げるやうな事になりまして、若しか輝雄さんのお心遣、濱さんの心を疑つてゐて下さるやうですとね、まなむつか上げて置くばかりでも、濱さんにどんな苦勞の種になるやうな事でもありはせぬかとも思ひましてね、何を申しまして、輝雄さんのお心

濱子——藤巻とほまれと 一五二

「つとゞのさすの。」

「私も強ひてこんな邪慳な舅や婿の下に、濱をやつて置かうとは思つても見ないのだが、此儘引取るといふことも考へて見なくてはね、濱が先生の長い生涯を誤らせるやうなものだから。」と困り入つて考へ飽んだ。

「小町田の家名を濱すの、心持の可いことではないが、濱子も可哀想でならんぢやないか。こんなことを聞いたら何と思ふだらう。」

「可哀想なことは申すまでもないことなのですけども。」と云足らぬ口振で、夫人の高子は眞人の顔を穴の開く程見詰めて考へてゐる。

畢竟夫人の意見といふのは、兎に角こんなことを云掛る位であるから、随分此方の迷惑も内兜も見透かしての上で、離縁話は持出したのに相違ない。して見れば思まはしい名をよしや一時は附せられたからとて、濱子の冤罪は何時か冤罪として分明する時もあるらう、其を慌てゝ不都合だの怪しからんのと、事八ヶ間敷く云へば、これが世間での取沙汰にもなつて、小町田家の家門を衰なしにする次第である。されば何分にも此度の無念は無念として、程能く取つくらつて、一層のことに濱子を深く引取ることにしたがよからう、殊にこ

濱子——藤巻とほまれと 一五三

んなことがあつて見れば、濱子を日向家へ歸すのも、却つて濱子自身の爲めに不得策ではあるまいかといふのである。子爵は一條の道理が夫人の言葉にあることは容易に知つてゐるのであるが、其よりもこんな不義の悪名を、さることのあらうとも思はれぬ可愛き濱子に蒙らることが、何うしても忍びないので、譬へば此事は濱子にだけは秘してゐたとて、何時か漏れぬといふことはなからう、これを聞知つて、濱子の思ひは何うであらうぞ、平癒に近づいた病氣が、少しの氣分でどんなことにならうも知れぬ、或は一生涯々として暮らすやうな悲慘に陥ることはないかと氣遣ふので、小町田の家名を惜しまないではないが、濱子——不幸なる濱子の身の上を思遣つて、身も世もあられぬのであつた。夫人は交際場裏にも立交はる、小町田子爵夫人の自重心を以て、小町田家其物を大事と思ひ、子爵自身は深く濱子の性質と、これ迄の生立、其から現在の境遇、將來の不幸を思つて、父の慈愛に肝膽を碎いたのである。

そこで、

「で、私は家名を思ふことも、先程云つた通りであるが、濱の身にもなつて、少しは考へても遣らなければ、可哀想のやうに思ふ。」と子爵は其太眉を動かして、首を傾げた。夫人は

濱子——慈恵とほまれと 一五四

濱子——慈恵とほまれと 一五五

慌てたやうに、

「それもさうには違ひありませんけれども、第一あなた、家名に悪評が立つやうにでもなりませうなら、濱さんばかりが可哀想ぢやなくなりますよ。お嫁入前の豊子の爲めにも、又あややつて未だ小供で御座いますけれども、高光だつて、肩身が狭うなつてまゐりますですよ。」

「けれども、豊子は未だお嫁に入つたといふのぢやないし、高光は男の子だから、そんなことに頓着はしないだらう。」と妙に濱子の辯護にかゝると、

「はい、あなたはさう仰有るのですけれども、小供で御座いまして、さうばかりはまゐりませんですよ。豊子もお嫁入が済んでをりますのなら、まだしもなんですけれどもねえ、世間は正直な者では御座いませんですから、豊子のこと迄、又どんなことを云はれるか知れませぬ。」と少し高がつて物を云ふ。子爵は、

「さうかしらん。」と云つた儘、黙つて仕舞つたが、夫人は自分で少し言過ぎて、子爵の氣を損じはしなかつたかと思つて、これも控へた。まじくと其顔を見てゐたのであるが、時と溜息して俯垂れた。

二人が黙つてゐると、其處へ何氣なく豊子が入つて来て、二人の様子の変な心に心怖ぢたやう、ためらつた。物音に振り返つた夫人を見ると、つかくと進出て、其處へ座つたが、懐かしさうに擦寄つて、目敏く兩親の氣色を見て取らうとした。少時すると、

「あの只今、松波様がいらしつて、御座いますよ。」と忘れてゐたのを思出したやうに云ふと、夫人は目を瞪つて、

「え、松波ですつて？、松波が来ましたかえ。」と向直る。

「たつた今見えたばかりなの。」

「豊さん、まあ前、ぼんやりだことねえ、何時迄も黙つてゐて。」と云つて、

「あら、何ですわ、だつて阿母様。」と豊子が打消さうとするのを見も返らず、子爵に向つて、

「あなた、あの松波がまゐりましたつて申しますか。」

子爵は物憂く顔を上げて、

「さうか。何うしてこんな可い鹽梅の時に来てくれたらう。少し松波の智恵を借りることにでもせんければならぬよ。」と少しゆびやかな顔をする、夫人は険しい眼をして、

「あなた、だつて松波にこんなこと仰有つて、いゝでせうか——未だあなた何ですから。」

豊子——慕戀とほまれと 一五六

子爵——慕戀とほまれと 一五七

「松波は私を深く信じてゐる。私もあれを信じてゐるのだから仔細はない。此室で逢ひませう。」と云はれて多少の疑懼は抱きながら、夫人は兎も角もと立つて行つて松波を迎入れた。

今日に限つてあの愛想の好い夫人が「お寒いややありませんか、能く入らつしやいました。」と云つた。何とも云はないで案内するのに、謙次郎は早くも肚胸を突かれたやうな氣がして、自からも言葉少なに導かるゝまゝ、子爵の居間に通つた。程のゝ處に蒲團などを直されて、可憐に豊子が挨拶した。

子爵は謙次郎を見ると、

「お、松波か、能く来てくれた。」と坐行出た。其顔には何とも云はれぬ陰氣な雲が懸つて、故意と機嫌をつくつては見せたが、笑ひが濟むと、直ぐ沈切つて見えたのである。

「久し振ぢやないか。数日前に来てくれたとか聞いたけれど。」

「はい、鳥波お伺ひ致しましたけれども、殿様は御留守のやうに承はりました。」と落着いて語つたが、謙次郎も少し睡眠が足らなくてか、眼が充血してゐるかのやうで、頬のあたり又となく蒼く見える。

「只今あなたのお噂を致してをつた所なんですよ。お目に掛りましたのは、不知此間で御座

「ますければ、本當にお珍らしい方のやうに思はれますよ。」と云つて夫人は豊子を顧み、
「豊さん、めのお茶でも入れて来て下さいよ。」と眼をする。
其と氣が着いたらう。豊子ははつと思ふと眞赤になつて仕舞つたが、水の滴りやうな頭髪
を下げて、

「はい。」と云つたばかりで、そくそくと退いた。見濟ました夫人は、火鉢を差寄せながら、
「さう、どうぞお進みなすつて下さいまし。何も御遠慮は入らないぢや御座いませぬか。妾共
ではあなたはもう家内の者のやうに不心得致してをりますのに。」

「はい、はい。」と聲高く笑つたが、云はるゝまゝに進寄つて、三人三つ鼎に僅かに尺を隔て、
膝突き寄せた。

「松波、困つたことになつた。」と子爵は突然繩るやうに口を切つたので、松波は愈小菅が申
入れて仕舞つたのかと胸を躍らす。
子爵と共に夫人は視線を松波に注いだのである。

夫人高子は俄かに百萬の援軍を得たかのやうに力を得て、子爵の顔を鳥渡々々偷見しながら

漢子——慈悲とはまれと 一五八

ら、馴々しく松波と話してゐる。

「妾もさうしたらばと思はないこともなかつたので御座いますけれど、子爵はさうはお考
へ遊ばなすものさすから、つゝ何ぞしたけども、本當に松波さん、さうして戴けるやう
ですと、どんなに忝ないかねえ。」と愁眉一時に開くと云つたやうに、喜ばしやうに、
「本當に濱さんもお可哀想でならないんで御座いますよ。ですけども、又翻つて少しは家
のことと思はないでは、不可ませんですわねえ。何も家名を重んじて、濱さんを放棄にし
て置くといふのぢや御座いませぬけれど——松波さん、此處のところが何うしたらば可
かと思煩ひましてねえ。」

で、こんなこと迄も云はれて、日向様へ歸りました所で、漢子の方はいゝとしまして、
輝雄さんが何うお考へ遊ばすでせうか、またく夫婦中が折合はなかつたりしましては、
どんなものだらうとも思ひましてね、本當にもう口惜しう御座いますやら、切ないやら、
胸が痛いやうなので御座いました。」

「くれぐれもお察し申してをるので御座います。」と謙次郎は口々に云つたのである。
「松波、君の仰る通りにすれば、ま、離縁といふことだけは漢子に知らすのであるが、後

漢子——慈悲とはまれと 一五九

で銀林とやらの一件が知れた時には、嘸口惜がるだらうと思はれるのだが。」と子爵は大方同意はしてゐるが、只此一點を何うにかしたいと思つたのである。

松波は何か思案をしてゐると、夫人は又も子爵が此事迄も不同意でかゝと、不安を懐きながら「でも、あなた、其は何うも致方は御座いますまいと存じますすよ。此儘にして置きましても、何れは濱さんに知れないことは、行く／＼御座いませんですもの。」

「其も知つてゐるがな、其でも可愛想でならないから。」と口先は温和しく云つたが、夫人の言葉が暗めたのらしい。夫人は云はうとしたが、目色で睨つて、其儘口を噤んだ。謙次郎は尙考へながら。

「其には私の方で好案といふ程のことゝも御座いませんですが、今暫らく——まあ、御病氣がなくなりませう迄、日向様のお申状をお知らせ申さないので置きましたなら、其中には輝雄様の御真心に懇へられる機会もあらうかと存じてをります。出過ぎましては何ですが、いえもう、決して濱子様と銀林とに、そんな馬鹿なことがある筈は御座いませぬ。銀林の方は昨夜も或處へまわりまして、確めて置きましたが、今朝は又小山田といふ人を同道で、銀林を訪ねましたので、こんな流説のある所にも、大凡は見當をつけてをりますから、其點

は決して御心配遊ばすことは御座いませぬのです。で問題はもう只御離縁を御承諾遊ばすか何うかといふことなのですが。」

「それは松波、何うあるものだらう。引取つてくれと云ふのだから、私の面目にかけても、なりませんとは云へないのだが、兎に角濱は何う思つてゐるのやらね。私も先々のことを思へば、こんなこともあつて見れば覺束ないやうにも考へられるのだが。」

「はあ。」と謙次郎も考へてゐる。

で、實際の所を云へば松波とて、さう種々のことを考へてゐるのではなかつた。子爵は濱子が可哀想だからと云ひ、夫人は家名の爲めに、多少の苦痛を忍んで離縁は引受けねばならぬと云張つてゐる所へ、謙次郎が入つて来て、濱子の一身上から打算して、日向家へ落着くがいゝか何うかは、常人の胸は未だ聞かないのであるけれども、子爵自身から嘗て一再話を承つてもゐるのであるから、寧ろこれは離縁は離縁としたが可いのであるまゝいか、さすれば流説は流説として、土を掘つても其證明は立てやうとの恰好なる考へを、充分の熱心を以て話したので、子爵も夫人も其には想はず氣が進んだ。謙次郎が是迄の考へをしたといふものは、昨夜小山田に逢つて、一半の事實らしいことを聞かされたのに、今

朝更に銀林に逢つて、濱子が母親に逢はん爲めに自分を使者にやつたりなぞしたといふ、如何にも本當らしいことを聞いて、——又事實に相違はないのであるが——其を信じたからである。昨夜は濱子に汚名を蒙らしたくないとの只一念で、其はかりに憤激してゐたが、今朝は又別人のやうな着實な眞面目な、冷やかな、而して綿密な考へに移つたのであつた。殊にこんなこと迄あつた後、濱子を日向家へ置くといふことは、子爵夫妻共に疑獄としてあつたので、端なく離次郎の考へと其が合つて、二人は心から喜んだのであつた。で、其がさうと決定したならば、離次郎は自から稻村ヶ崎へ出向いて、濱子の心を曳いて見やう、其上で自から離縁のことを話すか、子爵から話して貰ふかに決めやうと迄切込んで云つた。固より離次郎の言葉にもある通り、離縁の理由として持出された一事は、今暫らく堅く秘すべしとのことである。

子爵は言葉を繼いで、

「これ迄も實の所、私は濱子の爲めには苦勞は絶えなかつた。其だから元の轡に收まるやうにした所で、何うもね、其上こんな侮辱を加へられてゐては、親の面目にかけて、挨拶をしないでも置かれんから。」

濱子——慈悲をほまれよ 一六二

「御無理は御座いませんですよ。」と離次郎は我意を得た如くに首肯した。

夫人も少し前方に膝を乗つて、

「松波さん、何もあなた、お隠し申しては却つて失禮と存じまして申しますのですが、濱子と輝雄さんとの間は、これ迄でも餘り譽めますやうなことは御座いませんかつたのでした。こんな内事を人様に申しては、愚痴にきこえまして、お耻かしい次第で御座いますから、誰にもお話など致したことは御座いませんですけれど。」と云つて、

「本當に濱子の爲めに、離縁は却つて幸福になるのかも知れないやうにも思はれますよ。」
「そんな誰でも離縁をせられて、幸福なものがありますものか。松波、さうぢやないか。」と子爵の聲は思はず高聲であつた。離次郎は微笑んだばかりで答へなかつた。其が濱子の場合には、事實幸福かも知れないと思つては悲愴の感慨も湧いて來るのである。

「それぢや、私もね、濱子の氣分次第にして、この事は運ばうと思ふから、松波、君今一つ骨を折つてやつてくれ、多忙だらうとは察するのだけれども、何も私の爲めぢやと思つてな。」

「いえ、決してそんなお氣遣ひには及びません。私今日明日は、病院の方も其お心算に致し

濱子——慈悲をほまれよ 一六三

て、助手に云つてありますから。私に出来ませうだけのことは致しませんでは、第一母が免しては置きません。」

それが子爵には又なくうれしかつたのと見えて、此時ばかりは晴々とした様子で、

「さう云つてくれると、私もどんなに面目を施すかも知れん。——其でも未だ君は母親の前にはだけは、頭が擧らんのだと見えるのだね。は、は、は。」と嗤笑した。夫人も尻馬に乗つたやうな口調で、

「それはね、あなた 松波さんかどんなえらい方にあなりでも、あなたを生みつけ遊ばしたのは阿母様なんだもの。」

「は、は、は。母は母で、その、何うも何で御座います。」と謙次郎は頭を掻いたが、眞面目に返つて、

「それぢや、私が濱子様の方へ、まわりますことに致して置きませう。其で子爵にも御都合があつき次第にいで遊ばすやうにお願ひ申して置きたいのですが。」

「其は君が云つてくれる迄もない。どんな用事でも外のこととは織合せます。」と云つて

「それでも、ま、可いだらう。今少しおて話してくれ。濱のことについて、少し話もし

濱子——慈悲をほまれよ 一六四

たいと思ふのだから。」

「はい、でもあの、あちらの方へ只今から歸宅致しまして母に其事を申してまわらせうと存じます。」

「それもさうだ。其ぢやね、私は君を頼みにしてゐるから、濱を不憚と思つて、充分冤罪を瀧いでくれるやうに。」と頼母しく打見遣つて、云つたので、

「承知致しました。濱子様にお氣の毒ばかりでも御座いませぬ。銀林といふのは、見込のある美術家ださうですが、あれも可哀想なんですから。」と謙次郎は膝を浮かして云つた。

「何分にもよろしく頼む。日中には今一兩日の中にもと思つたが、今日が日にも通知してやりませう。」

夫人は傍から、

「あなた、其でも其はお急ぎ遊ばすにも當たりませんでせう、媒人を御座いますから、小菅から何とか挨拶があらませうですから。」と注意した。

謙次郎はくどくどと頼むくどくを繰返されて、何とも云へぬ氣の毒な心地になつて、小菅田家を辭したのである。平常ならさうもしてくれない子爵夫妻が、今日に限つて玄關先迄、

見送りをしてくれた。其も便りのないために、自分如きを一心に思つてであらうと心に案じながら、立ちいでると、不圖遠きく過去の夢ではあるが、此家と同じく辭して、憤懣を抱きながら母の寓へ歸らねばならなかつた時、故意と送出て、じろりと氣味悪い一呷を送られた、あの夫人がと憶出して、一種異様の感じがして、謙次郎は我と微かに呼吸をついた。

「これ、松波さんのでせう。」と折針の帽子を取つて、夫人手づから渡されたのに、はッとして漸く受取つたのであつたが――。

腕車が門を出やうとする時、威勢のいゝ一輛の腕車が、ヘルメットの紳士を乗せて、小町田家へ曳込まうとする。謙次郎は何氣なく顔を上げると、先方も振向いたが、互ひに物を言はうとする途端、門の内と外とに、腕車は五六間隔だつて見えなくなつた。小山田が云ふ通り、あれが全く悪人であらうかと、其瞬間に思つて、逢つて話して見たいとも考へたが、引返す勇氣がなかつた。乗つてゐたのは小菅潤馬であつた。小菅は離縁についての小町田子爵の考へを質しに來たのであらう。

日蔭の草

十七

朝霜の薄日に消えて、今日も風の冷たき稻村ヶ崎の磯の邊、松林の蔭に、浪子の生活は依然として淋しかつた。

殊に玉子が眞の一夜さ此家に泊つて、其翌別れ難なるうちに、随分達者にして、さらば上の言葉を發して東京へ歸つてから、次の瀛車では家扶の辰巳が何か浪子のことゝ氣遣はれることであつて、同じく東京へと立歸つたので、後に發つたのは乳母と浪子と、二三の男の片と云つては、別荘の守をさしてある、土地の者とやら、六十餘りの老爺が目が酸んで、耳が遠くて、體だけは流石に潮風に吹かれて、殿丈造りであるけれど何にならう。辨慶の松風、日ねもすの潮の音、淋しさは一入である。直。

てゐたのに、何うした都合でか、辰巳は未だ歸らぬ。
愁じ生中、玉子が來てくれたので、去つた後の又なく心細さに、浪子は更
かりであつた。朝起きてから夜床に就く迄、一室に閉籠つて、何もせぬ、

くやつて顔を擧めて、悲しうに吐息溜息ばかりをわたのである。
固より玉子が忘れてゐてくれねばこそ、たづねても来てくれたのに何で其
ことがあらう。うれしい、懐かしかつたればこそ、歸るといふのを無理に引
つては泣いたのである。夜更くる迄も話したのである。けれども、濱子は尙
を、何うしても玉子に打開けて、其同情を求むることは出来なかつた。四方山
ては、其を出来ない迄も、人知れず推察んで、さあらぬ態を装ふ切なさ、並々
堪へ得る所のもではなかつた。玉子に「本當に御病氣はもう可いのですか。」と心遣
に問掛けられては、折角の興が一時にさめつくして、泣出しさうにして、僅かに有耶無耶
の間に返事をして、其間を揉消さうと努めてゐたといふものは、其を問はれることの、如
何ばかり辛かつたからであらう。

よしや時を経たならば、此體の病ひは癒ゆることもあらう。けれども、我が心の花を飽迄
食んだそれ、苦しきは、惱ましきは、悲しきは、淋しきは、死を待つばかりの此痛疾は、
何時の日、如何にして癒やさるべきものであらう。想ふまい、云ふまい、氣にも掛けない
とは眼を塞いで覺悟をしながら、え堪へでは繊弱き女子の心に、涙が湧返るばかりである。

玉子がゐた其間、少時は氣もあり張もあつて、出来ぬ我慢をしてゐたのであるけれども、
又元來の佻びしい住居に返つては、人のない爲めに、憚ることのない爲めに、張も弛めば
氣も滅入る、掻撚りたき胸の思ひの、そよる糸の亂れに、解くに術がなく、いよ、結ばれ
行くのである。

其を傍に見てゐる乳母のかとせが、辛氣苦勞は並大低のことではなかつた。日に増し疲せ細
り行くかとはかり思はれる濱子が姿の、髪も上げず、着物も繕はず、そくれた髪の中の
頬を撫で、頸を持たせて考へに沈し手の指の力にえ堪えで、血の氣のない顔の色を何と
見るであらう。顔を見合はせて、言葉も出ないのに、先づ差しぐむは、うたて涙である。
大凡の濱子が思ひを、おとせは知らぬこともなかつた。併し濱子に疚しき心の露ばかりも
あらうとは固より信じなかつた。事實濱子は玉子の今の幸福なる身の上を、我身の哀れな
のに引較べて、羨ましいところ思ひもすれ、ゆめ羨ましいとは思ふのでなかつた。思はな
いばかりか、出来るならば此上にも幸福は多かれよと祈つたのである。其意は暗々に玉子
にも語つたが、玉子として濱子の眞意を誤る程の人でなかつた。で、心に其美はしい思遣り
を感謝して、濱子が一日も早く今の悲しい境涯を挽回したいと念じたので、吳々も病氣が

平癒して、日向家へ歸るやうにと説き勧めたのである。其には濱子も返事はしなかつたが、玉子の好意を敢て顧みないといふのもなかつた。

再び日向家へ入るといふこと。此事は今の濱子に取つて、苦痛の極であるかも知れぬ。乳母も是迄幾度か其事を云はぬでもなかつたが、濱子は其を聴く度に身を顫はして、恐怖をなすのであつた。父の慈愛の戻し難くて、嫁入もしたのであつたが、所夫と便るべき人に餘り面白く取扱はれもしないのに、せめて一度は家庭の女王となることの、猶且つ失意の濱子にも、妻若き女の心に、幽かなる樂みの影を宿してゐたのであるが、其が實際のこととなつて見れば、迎へ濱子に捉え難きものとなつて、今は望みといふものも、自分には得られないかの如く思はしむることとなつた。其間にも生みの母親に一度逢つて見たいと思ひが、連りであつた爲めに、圖らぬ奇禍を買つて、自からは遂にそれとも知らず、今に到つて思ひも寄らぬ事であつたが、出来るだけの氣を引締めて、所夫に仕へたのにも係らず、冷酷なる筈の下、針の窟にも坐せしめられた如き辛さを重ねて、涙に目を送る中に到頭病氣となつた。其より里の家へ一先づ歸つて、此別荘に移されたのであるが、日向の家を出る時に、再びと此園を内へ跨ぐまいとは密かに心に思つた所である。乳母に理を分

けて説かれても、濱子が容易に心を離して、再び其家へ入ることを諾なひ得なかつたといふものは、今も所天の辛さを思ひ返へて、胸に痛みを覺ゆるからである。

ではあるが、濱子は其でも無理に思返さねばならぬのではあるまいかと、心に感ずることもあるやうになつた。玉子が稻村ヶ崎の松蔭を去つた其翌の日の夕に、悲しきやうに何彼と思ひを辿つて、濱子が泣きたらうにしてゐた時、乳母は側近く進寄つて、

「また、何うぞなされましたのでは御座いませんか。」と心遣つて慰めてくれて、其から其へと話を進めての上句に、濱子が、

「王子さんは本當に羨ましく思つたので、あとせは顔色を煩つてゐたのであるが、何か思附いたかのやうで、

「も毎々申上げますことなので御座いますが、お嬢様も早く御病氣が御全快遊ばして、東京へお歸り遊ばすやうになさいますせんでは不可ません。」と云つて、故意と日向家へとは云兼ねた。濱子は、

「だけども、乳母や、妾はもうこんな淋しい處から、又人中に出て行くのは、厭なやうな氣がしましてはけませんの。」

「そんなこと仰有るものでは御座いません、お若いお體をお持ち遊ばして、決して、そんな果敢ないことをお考へ遊ばすのでは御座いませんですよ。」

と云つたが、不圖辰巳が自分に叫びたことを思出すと、胸を騒がしたのである。併し今更御離縁遊ばすと云つて、逆も運ぶことではあるまい、今日明日にも辰巳が歸つて来てうれしうことを知らしてくるであらうと信じて、若しや萬が一に左様なことが出来て来たとして、このとせが本の通りにせでは置かぬと、獨り心に領いたので、

「たつた今、玉子様をお羨ましいつて仰有つたのぢや御座いませんか。まだく、これからお嬢様こそ、玉子様に羨ましいがつて羨き遊ばす氣をなくつては不可せんのに。」といふのを抑へて、

「乳母や、後生だからそんなこと、妾には云つておくれでない。妾にはもう樂しうこと、うれしうことも、みんな過去の夢なんだもの。」と一時に悲しうな顔をして、

「妾はもう、何も樂しいことの何のつて、思つても見ませんわ。何時迄でもく、こゝに斯うしてゐましたら、可いと思ふのだけれども。」

「そんな情ないことを仰有つて。」と其が濱子の眞意ではあるまいかと、乳母はさう云つて、

俄に下の句が續げなかつた。而して漸く、

「あなた、それでち濟み遊ばすか知れませんが、あなたのことはかしお氣遣ひ遊ばす、それでは阿父様をいかんなさいませう。埋もれた花のやうに、こんな磯貝の處に一生をお暮らして遊ばさうといふことにはなれば、とせはあなたもうくく、死んで仕舞ひます。」と聲を放つた時、涙がほろ／＼と落ちた。

濱子もつまざれたやうな氣になつて来て、

「だけれども、妾は世の中に、希望も何もありません。乳母や、妾はもう、此儘で朽果て、仕舞ひたい氣がして来るの。」

「毎日々々、あなたそんなお悲しいことばかり、朝から晩迄お考へ遊ばすから、御病氣も今一息といふ所になつて、抄々しく御座いませんのですもの。も少し御氣樂に遊ばせばよろしいのに。此儘でゐたいの、あなた、朽果てたいのつて、それはお嬢様、あなたの仰有るお言葉では御座いません。そんなことでも腹極にでも仰有いませうものなら、どんなに御失望遊ばしませうやら。——其は何處の里へまゐりましても、みんな自分の氣に慥ひますやうのことばかりがありますものでは御座いません。少し位のお辛いことが御座いますして

も、お夫婦の中にお子様でもお出来遊ばすことになれば、自然とお若い中のお辛いと思召したことも、なくなつてまゐりますもの。何も其迄の御辛抱を遊ばさないやうでは……。いくら申上げてもお肯取遊ばさないの御座いますなら、これからあなた、とせは何有も申上げませんですよ。」と涙も拭かないで、

「これは何有も分りませぬ私だけの考へで御座いますか存じませんが、私はさう思ふので御座いますよ。どんな高貴な方でも、貧しい家に住んでをります者で御座いますとね、みんなそれく世の中に生きてをります間は、苦勞と云ふものは絶えませぬ。義理といふものは、何れ逃れるものでは御座いせんですつて。さうで御座いませねば、誰に致しました所で、辛いことが御座いましては、死にたい、親も兄弟も入らぬと思ひますことは、間々あるので御座いますもの。其でも親は子があればこそ、子は親があればこそ、思ひに任せませぬことが御座いまして、出来ぬ我慢も致してまゐるので御座います。自分の爲めばかりで世の中が渡られますものでは御座いせんのですから、憐へばどんな辛いことが御座いまして、世間への義理、親兄弟への義理には、死にたくつても換へられんので御座います。あなたは其迄のこと、少しはお考へ遊ばして、物をきなく一圓に思込ん

だりなされるのは御座いせん。私、とせも此の歸になります迄には……。」と云つたが、咽んで聞分けなかつた。

「あなた、何うお考へ遊ばしますか。」

「妾はさうは思つてゐるのだけれども。」と云つて、濱子は顔を俯伏せて、泣入つたのである。乳母は呼吸と呼吸とが觸れ合ふ迄に擦寄つて、いぢらしく思つて、少女のやうな氣もするのであらう。濱子の香中を撫でてやりながら、

「それを御承知であいで遊ばすなら、氣を大きくお持ち遊ばして、も少ししやんとして、御養生遊ばさないではなりません。殿様がお嬢様が徳うしてあいで遊ばすのを、どんなにお氣遣ひ遊ばしてと思召します。數ならぬ身では御座いますが、とせで御座いまして、あなたお嬢様にお幸福が御座いませう爲めには、どんなお辛いことでも御引受由さうと存じてをりますので。」

玉子様もあなた、くれぐれとせにさう仰有つて、御座いました。あなたが一日も早く御全快遊ばすやうにつてね。私は御嬢様も、決して、お嬢様をお悪しみ遊ばしてはないと存じてをりますよ。いえ、そんなによしんば思召してだと致しまして、世間でゆる

しては置きません。輝雄様の阿母様も、お嬢様を何時もく、お舞め遊ばして、御座いますもの。御心配遊ばすことは御座いません。」

「それでもね、妾は歸りたいとは思ひたくありませんわ、日向へ歸るのだと思へば、悲しくなつて来て。」

「それがあなた、御氣隨だと申すので御座います。ま、そんなことは後で、まあよろしいので御座いますから、とつくり御思案遊ばして、阿父様のお氣をお安め遊ばすやうになさうましてね。」と繰返して云つたが、言葉もなく、涙を絞る濱子を見ては、乳母は何とも彼とも云ひやうのない切ないのであつた。

此の事があつて、濱子は更に或物を思ふやうになつたのである。玉子が自分を氣遣つてゐてくれると乳母に云はれた時、圖らず玉子の眞人なる松波は、自分を何と思つてゐてくれるだらうと思浮べた。玉子は自分に松波も其母も、痛く自分の病氣を氣にしてゐると云つたが、其が本當なば、自分が何時迄もこんなにしてをつたなら、嗚かして心を痛めることであらう、心を痛めて、若しや自分が松波に累ひを醸すことであらうと思つては見ぬであらうか。玉子と松波とがあれ程睦まじく、浦山しいばかりの間であつて見れば、よも過去に

於ける自分のことなどを思つてくれやうとは考へられぬが、——思つてくれてはならぬ——若し其を忘れないでゐて、自分が此後の長き一生を、こんなに世を遠かつて暮らしてゐるのを見たならば、何と思つてくれやうか。定めて厭な思ひをするのであらう、憎むべき女とも思はぬであらうか。おとせが云ふが如くに、自分が日向家に落着いてゐるおたならば、こんな心苦しう松波を憚ることもない、又松波も女々しく過去のことを思出して見ないであらう。第一松波は玉子の眞人ではないか、自分が果敢なく暮らしてゐる爲めに、松波に苦みを覺えさせることもなつたらば、自分は玉子に對して濟まないではないかと想到つたのであつた。濱子は此久しい間、ついぞ謙次郎とは顔を合はしたこともないのであるが、謙次郎が決して自分を忘れてはゐないことと信じてゐるので、たま／＼乳母や辰巳から、謙次郎が此頃の様子を聽いて、其所信を堅くした。固より濱子が謙次郎を其念頭に置いてゐる如く、謙次郎が常に濱子の身邊を慮つてゐるやうななどは、深く思つても見ないのであつたが、意志も強いが感情にも鋭い謙次郎が、平生を知り抜いてゐるのであるから、出来るだけ自分の生活を、目立たぬやうにせねばならぬと考へたのである。憫むべき濱子が床しき思念である。

又斯うも思つた。謙次郎は自分のことを忘れてもゐてくれやう。——忘れてゐてくれれば此上もない幸福である。——けれども小町田家へ出入する爲めに、自分のことを父にでも話されて、嘲笑すべき者とも思はないのであらうか。嘲笑はるゝこともなからうか。こんなことがあるかないかは分らないけれども、萬一にもあつたなら、自分は何とせう！ 逆も好い氣持はすまい、玉子にも逢ふ面目を失ふのである。あゝ厭だ、死んでもそんなことあつて堪まるものでない。松波に笑はるゝ位なら、世間の者は云はずもあれ、一家の者にも笑はれるであらう。思つては漬子は青褪めた其頬に血潮がさして、眼は失意の人とも見えす、輝き渡るのであつた。氣性の潔々しい母親譲りの、自尊の性質は、何うしても人の嘲笑を安んじて看過することは出来ないであつた。

これと思つては身は切らるゝとも、此儘にしてゐたくはない。日蔭の草として枯れ果てんことは、今の身に此上もない好もしきことであるかも知れぬのであるけれども、自分を私語する人があつては、何うして其を忍ぶことの出來やうか。自分が身を殺した物として、日向家に歸つたならば、父もどんなに喜んで呉れるだらう。自分を殊更氣に掛けてくれて、苦勞ばかりしてゐられるのに、自分は何一つお氣の安まることもしないので、此頃は乳母に

迄も辛ひ思ひをさせてゐるので、今心を定めて、目を瞑つて、温順に歸つて行けば、自分には人にも輕蔑されず、四方八方圓く納まるのではあるまいか。歸つて行かうか、行つたらばどんなであらうか！

行つたらばどんな思ひがするであらう？ 良人はどんな感想を以て迎へてくれるであらう？ 冷かな手に取扱はれて、再び此家の闘を内へは踏ぐまいと一度は思定めて出た自分が、事情が止むを得ずなつたからとて、面白くして歸つて行かれやうか。別れて彼是百日にもなる其間、端書で一度見舞つてもくれなゝ輝雄の心を、自分は何と解くべきであらう？ 乳母は切りに輝雄をそんな人でないと云ふけれども、自分を鶴の毛程思つてくれない心は、果たして自分が當にされやうか。自分は其でも歸つて行かうか。歸らねばなるまいか!! 漬子は父のこと、謙次郎のこと、乳母のこと、世間のことを考へれば考へる程、此儘で此處にゐることの濟まないやうにもあり、自分にも不利益であるやうに思つたのであるが、偕て日向家へ歸るとなれば、又堪へ難い辛い思ひがする。其より朝も晝も夜も、此事ばかりを兎思ひ角思つて、心にそれと定め兼ねては、裏悲しく涙含むので、乳母は又してもと氣を苛つて、突寄せて、

「とせがこれ程口を酸くして申上げまするのに、何故さう而徹で御座いませう。あんまり思
過ぎ遊ばして、不可ませんことにもおなり遊ばしては私は何う致します。お氣を丈夫に
お持ち遊ばして。」と諫めるので、濱子は身の置場所もないかのやうに思つて、
「乳母や、さうぢやありません、何うぞ堪忍して。」とばかり、只泣入るのである。
「とせが申しますこと、少しは耳にお止め遊ばして下さいませんでは、こんなにお附き申し
ておながら、何う致しますことも出来ません。濱子様。」

「乳母やお云ひのこと、羨は忘れるのでも、聴かないのでもないけれど——本當に切ない
わ。」といふので、事は只々分らなくなつて仕舞ふ。三日四日を今日明日とこんなことで、
同じ日のやうに過ぎた。

今日も辰巳は歸つて来ないのであらうか。若しや本當のことに、氣遣はれるやうなことが
降つて湧いたのではあるまいかと、心に疑惑の雲を浮ばせながら、其と固より濱子に打出
しては云はぬが、心待つてゐる午後、珍らしく腕車に乗つた洋服扮装の紳士があつた。
豫て案内を知つてゐるかの如く、裏戸の方へ玄關を折れて、軒を廻つたが、井戸端で洗物
をしてゐた女中の兼やに取次がせて、驚いて奔り迎へた乳母と、其後から亂れた小鬘を搔

濱子——口陰の草 一八〇

上げながら、淋しそうに笑みを湛へた濱子とに、挨拶をしながら導かれて、見晴らしの座
敷へ通つた。これは小町田子爵に大事の用事を托されて来た、松波謙次郎である。

快活なる笑聲は、四隣を動かすばかりに、其間には珍らしく濱子の待遇す、優しうな聲
も聞こえた。茶が運ばれる、菓子器が出る、乳母のおとせが立ちつ居つ、少しも尻の落付
かぬ忙しきは、先月子爵が見舞はれた時以來初めてある。

何を取違へてか、別荘守の老爺は、お兼を捕へて勝手許に、お客様の何人なるかを糺して
ゐる。

「お前さんの氣遣ひなさるにや當たらな人さ。」と非高なのはお兼である。

「お嬢様の、あれが旦那様だいかね。」と老爺は耳を傾けながら、

「俺だつても一目見ましたばかりで、なら立派な人と思つた。」と感心したやうに云つて、
鼻を擦上げた。

「ほい、い。此人は、ま、何を云つてゐたらう。お嬢様の旦那様だなんて、あ、可笑しい。」と
笑ひこける。

濱子——日陰の草 一八一

「さう笑はつしやらねえでも可えねえかね。俺でねえな田舎においでなされるのだから、さうでなければ、あんまり可笑しいと思つたよ。」

「ほ、ほ、やつはし、あ、思込んで仕舞つてるよ、此人は。」と腹を押へて、

「ね、老爺さん、あのお客様はね、お嬢様の旦那様ではありませぬよ、他處のお方ですわ。」老爺は怪訝な顔をして、差控えたが、

「はてな、それぢややつぱし殿様の御家來だつぺえよ。さうぢやねえけえ。」

「ま、さう云へば、そんなものさね。あのお客様は、本當にえらいお方なんだよ。お前さんは知るまいけれどもね。」と割つて聽かせる。

「どねえにえらい方だね。」と不思議さうに見廻はしたが、

「お車夫はもうけえつて仕舞つたが、お客様はお泊りなさるのぢやありませんか。」

「妙なとおきぢやないか。そんなことわしは知るもんかね。」と突煙食に云つたが、

「それでも老爺さん、お前さん、何日も御機嫌が好くつて結構だね。」とさつと仕事に掛る。

「へ、へ、へ。」と笑つたが、

「これでもね、からもう意氣地がありましねえだよ。殿様からお扶持を戴いて、健全なはるますげんと、儘には體が動きましねえでな。」

「本當に殿様のお蔭ばかりなんだよ。ゆめ、あるそかに思ふのぢやありません。」と笑つたが、

「お目出度いのだから、お酒でも戴いてれば苦勞がなくて結構だね。」と口の中を眩した。振向いて、獨りで可笑くなつて、

「ほ、ほ、老爺さん堪忍するんだよ。でもこんなよいくのつそりで、平常御番が勤まるから不思議なもんさね。」

老爺は其を聽取らなかつたか、口を歪めて、

「これでも若え時分には——。」と其處の板敷に腰を下して、にまきりと首を前へ突出して、まじくとお兼を見たので、

「おやく、これは大變もんだ。そろくお林が始まりさうだよ。——老爺さん、もう何時だらう、鳥渡時計を見て来て来て下さいな。」

「何を云つてるだね。」と平氣の顔色。